

高司君はどうやってもモテない リメイク

ヘンリー発生

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高司君はどうやってもモテないのリメイクです。

アカが消えたので作り直しました。

高司くんははたしてモテることができるとか？

目次

設定（ネタバレ注意！）	1
序章	
ソシテボクタチハデアツタ	1
ソシテボクタチハデアツタ	2
第一章	
ハジメテノタタカイ	1
ハジメテノタタカイ	2
ハジメテノタタカイ	3
ハジメテノタタカイ	4
ハジメテノタタカイ	5
ハジメテノタタカイ	6
第二章	
ドラゴンペアレント	1
ドラゴンペアレント	2
ドラゴンペアレント	3
ドラゴンペアレント	4
ドラゴンペアレント	5
ドラゴンペアレント	6
ドラゴンペアレント	7
ドラゴンペアレント	8
第三章	
ダーティーフェイト	1
ダーティーフェイト	2
73	
70	
65	
62	
59	
55	
51	
48	
44	
42	
39	
36	
34	
31	
27	
22	
17	
13	

第四章

センケツノキズナ	1		103
センケツノキズナ	2		106
センケツノキズナ	3		112
センケツノキズナ	4		119
センケツノキズナ	5		123
センケツノキズナ	6		129
センケツノキズナ	7		135
センケツノキズナ	8		139
センケツノキズナ	9		143
センケツノキズナ	10		147
センケツノキズナ	11		152
センケツノキズナ	12		155
ダーティーフェイト	3		76
ダーティーフェイト	4		81
ダーティーフェイト	5		87
ダーティーフェイト	6		89
ダーティーフェイト	7		93
ダーティーフェイト	8		99

設定（ネタバレ注意！）

設定

世界観：魔法は人間も扱える。

しかし高校生は魔法を習わない。

大学で習うのが殆どだが、この世界の医学部のようになんまり難度が高い。

また、魔法を使うためには免許証が必要、魔法の犯罪の取り締まりはかなり厳しい物である。

免許証を取るさいには心理テストなどで本人の潜在された性格や信頼、さらにサイコパスであるかどうかのテストが3度に渡り行われる。ちなみに人間の魔法はせいぜい、建物を横に移動させたり、火炎放射気の炎が出せたり、ちよつとしたコンクリートを破壊するレーザーを出せたりする程度。

さらに範囲も少ない。悪魔を呼び出したり、物体の次元移動の魔法を使うときは、最低3日もかかるときがある。ちなみにこの魔法で美術館の物を盗む可能性があるが、その場合は悪魔や天使に任せるケースが多い。

最大の攻撃魔法で、家が吹き飛ばす程度。この世界には魔法は古来から存在し、認識もされていたが極僅かの人間しか扱えず、さらにそこまで大したことでもないので科学が主に発展してきた。

天使や悪魔の存在も上層部の人間には認知されているが、一般的に姿を見ることが出来ない。彼らは主に人間界、またはお互いの観察を目的によく人に化ける。

ボンノー：元魔人、1度天使との戦闘中に仲間を何人も失っており、守られてばかりの自分に嫌気がさし、エピロに頼んで誰かを守れるよれうな剣になった。

しかし魔人の時の能力が体の大きさを自由に変える、熱を操る、物質を硬くする能力だったため剣になったと勝手に卑猥な能力になった。

性格は魔人と思えないような仲間思い、戦いのルールをきちんとするタイプで、そこら辺をキチンとしない高司に若干不満を持っている。結構ノリがいい。

人間の時の名前は、大獅子丸

大獅子丸（ボンノー）：彼は戦闘の中ひたすら貪欲に力を求めている。彼は強かったので、彼の力は上がり続けていた。

しかしそれでも次は、次はと力を求め続け、いつしか彼は醜い魔人へと姿を変えていた。彼は人とは関わらない方が良いと、判断しそれから悪魔たちとともに天使との闘いに明け暮れた。彼が力を求めた理由は、仲間を守るため・・・

しかし彼がどんなに強くなろうともそれらを失い続けた。どんなに彼の身が醜くなろうとも失い続けた。そのたび、彼は貪欲に力を求めた。

赤色で地面が見えない地ただ一人になっても、失った後の地の上でも、命が尽きようとしてる時も彼は貪欲に力を求めていた。

最後まで失い続け、絶望した後、彼は死のうとしたが、その時にエピロの提案で魂だけでも残しておけばいつか自分が誰かを守れると思いい、彼は剣になった。次は守れることを信じて・・・

高司 蒼一郎：モテたい、非リア、イケメン、成績優秀、スポーツ万能、だがモテない。あつそうだコイツが主人公。

基本的にはツッコミを担当する。たまにはボケる。兎に角リア充が嫌い。性格は、まさに男子高校生。がしかし、呪いのせいで少し性格が歪んでいる。

作文などからその様子が見られる。

エピロ：なんかいろいろ可哀想な呪いをかけられた悪魔。終わりを司り、何かそういう感じの魔法をめっちゃ使う。

大食漢。

未来を見る鏡を持っている。最上級悪魔だったが、今は中級レベル

の力しかない。

本来の実力は超チートレベル。元々は人間と余り干渉しなかったが、とある人物に恋をした事を切っ掛けに変わった。人間とは友達と思っている。

プロロ：いわゆるどじっ子。何故かその身にハプニングが度々起る。料理は上手い、しかし皿によそうことが出来ない。エピロの逆で始まりを司る。

実は強い。過去が見える鏡を持っている。

最上級悪魔。エピロとは昔から仲が良い。回復魔法を得意とする。

古川 モテル：顔面は下の上ぐらいだけど、なんか女神の祝福を受けてるからモテまくりだぜ！キャットホー！って感じの奴。普段はイケメンの性格を装ってるが、モテない癖に成績や運動神経が自分より勝る高司を昔から虐めている。たぶん他の奴も虐めている。大分女癖がひどい。性格は屑、マジで屑。

カリエル：コットン100%、神速と言う能力をもつ。後々再生能力も身につける。あの爆破で一回死んだ。

プリム：お嬢様系女子。くるくるヘアー。物質を棘状に変える能力をもつ。

エンド：シルフドラゴン、草とか木とか操る能力。

カリエルから渡らされた卵からかえったドラゴン。プライドが高い。エピロになつく。

女神：昔女神は、ある男に恋をした。女神は彼に何度もアプローチをしたが、振り向いてくれなかった。

実は彼はエピロの事が好きであり、エピロも彼の事が好きだった。その後エピロと男は結ばれ、ある日のデートの帰りだった。二人が

酔っている事をいいことに、女神は男を殺した。

さらに自分の思い人を奪ったエピロには自分に反抗出来ないよう
先ず神に関わる者に攻撃できない呪いをかけ、その上魔力を奪い去
り、殺そうとした。

その後エピロは命がらから高司家に逃げ込み、高司家の祖先は女神
の侵入を必死に拒んだ。これが原因で高司家は呪われてしまった。
異性に触れられない。異性から嫌われる。

だめ押しとしてエピロにもう一度、何かを愛する事が出来ないとい
う呪いをかけ、去っていった。

親父：作中で二番目に謎。ヤクザとつるんでたりする。

母：作中で一番謎。マジで謎。

金剛寺：霊長類最強。ルックスは何かガ○ンドロフ的な感じ。

魔人：欲に溺れた人間の成れの果て。欲望に歯止めがきかなくなり
暴走する。姿は頭に角がはえている誰でも簡単になれると思いがち
だが自分の欲を満たせ続けなければなることはできない。魔人にな
ると最上級の悪魔とも台頭できる。主に独裁者や王がなりやすい。
しかし寿命が著しく減るので、ボンノーは死ぬ直前にエピロに自分の
魂を剣に写してもらった。日本では古来から鬼のこと。

天使：神に使える者、主に人の姿をしている。見た目は人間に翼と
頭にわかをつけている。定義は神が作った者。

しかし全知の神が作った者は純粹種。他の神が作った者は人工種
と区別される。

人間の信仰心を糧に生活しているので、悪魔の人間に欲を出させる
行為に迷惑している。基本的に善のイメージがあるが、結構人を殺し
てたりする。他の地域の神に攻撃して人間の信仰心を横取りしたり
もする（布教活動）。

つまり自分の主である神にしか愛はない。他の神は認めない。どうして皆僕らの神を信仰しないの？つて感じ。しかし日本の神には勝てなかった（島原の乱）。アマテラスつえー

悪魔：地下の別空間に住んでた人外種。見た目は人間に角を生やして、尖ったしっぽをもち、コウモリのような翼がはえている。必要な時以外はそれらは出さない。人間から何かを受けとる替わりにその者の望みを可能な限り叶える。

基本的に無害（手を出さなければ）、自分勝手。エピロとかプロロとかベルゼブブみたいな人間にと普通に接することが出来るのはごくごく一部。基本的には人間と余り干渉しない。

呼び出されても言うことを聞かないのが大半（報酬がよければ、普通に聞いてくれる）。猿の言うことなんか聞いてられるか！が多数派。新しい友達が出来て嬉しいぜ！が少数派。

神：めつちや自己中、気に入らないならすぐ怒る。人間より人間くさい。つまり欲望に正直。

白羽先生：高司を苛める人。美人。嫌いな奴には容赦しない。イケメン大好き。結構女子力高い。高司を苛めるのは呪いであり、決して本心ではありません。周期的にデレ期的な何かがおこる。

エクソシスト

悪魔を排除し神の信仰を広める者、一般的には善、役員にはS〜C級まである

C級 低級の悪魔程度を

祓うことが出来る、聖水や
聖灰、十字架などの

一般的な武器を扱う。一般人でもカテル。て言うか、基本的に人間にイタズラで取り付いた悪魔を祓うのが仕事。一般的なエクソシスト。でも患者の大概は精神的な問題。まあ早い話

心療内科。

B級

中級悪魔にも複数で対抗

出来る、聖職者、

協会から与えられる

特殊な武器を使う（破邪シリーズではな

い。）。

軍人なら勝てる

A級

上位悪魔を複数がかりだが

相手にすることが

出来るレベル。特殊

な武器のほか神の

奇跡による魔法に

似た聖なる攻撃を行える。まず、人間は勝

てない。魔法道具などで身体能力がイカれてる。

S級

限られたものだけが使える特殊な武器を持ち

神の奇跡を使える（覚醒時）

神の子と

呼ばれる部類。複数の上

級の悪魔にも一人で対抗

可能。世界に二人しかない!!覚醒す

ると、最上級悪魔をも倒せるようになる。

覚醒・S級のみ起こりうる、神の力の一部を使えるようにする力。

ただし代償も伴う（体の一部を失うとか）。

御手洗 雲高：ウンコマン。高司を恨んでいる。昔給食の時間

にカレーライスのルーをお尻の所に高司からかけられ、（意図的ではない）あだ名がウンコマンになってしまった。まあそもそもウンコマンと呼ばれる前もウンコって呼ばれてたけどね♪

高司の運命の人：エピロは実は男と言ったが、それは未来の話である。何かがきっかけで男になると決めたのである。今は女の子です。事前に食い止める事ができれば・・・実は候補が全部で3人いる。

ベルゼブブ・見た目はシヨタ(子)。自尊心が高い。中身は魔王の息子。蠅や畜生を自在に操る悪魔の魔王の1人。エピロとプロロと仲がいい(父)。ちなみに強さ(父)は本気出すとS級エクソシクト10人分くらい(子は3人分)。

しかし、体力がもたないため、あまり戦いは好まない。力は何段階かに分けて封印している。知識と知能が凄いが、代わりに心と身体がいつまでも子供の状態になった。普段は上級悪魔くらいの強さ。父がいる。父はめっちゃ強い。

半魔人化・高司とボンノの体が一体化し、体の半分が魔人化する。物凄いパワーを扱えるがかなり体への負担が大きい。下手をすると、命を削ることになる。最上級悪魔と同じくらいの力です。激しい怒りや精神的なショック、かなり強い殺人衝動などで発動する可能性がある。

おっちゃん(安形 啓二)：年38歳職業A級エクソシスト

武器 呪符、ナイフ、聖水

銃(エアガン)

弾 銀、聖水、聖灰

好きな物

豚足、麦酒、ココアシユガレット

服装

黒のロングコート

備考

近距離は十字のマークの入った清めたナイフ、遠距離はM92Fベレッタと呼ばれるハンドガンを使用する。常にココアシユガレットをくわえている、

砂城楓 性別女

職業：魔道師

所属

魔法、砂魔法、サンドガーディアン

武器、レイピア

格好、組織の制服。

一人称は「自分」。真面目系女子。

鈴鹿 英昭：いやー、完全に忘れてたわこいつの事。高士の友達で高士の良き理解者。

本多 弥生：保健室の先生。3秒で仮病を身分けれる。

女神：名前は、ゼネシス。性格は自己中。自分が不快に感じる物は全て消す。容姿は西洋の女神。なんかヒラヒラした服着てる。武器は杖。顔はゲルマン系の顔。この女神の至上の悦びは自分が気に入ったものを自分の思い通りにすること。エピロを殺せなかったので、生きたまま苦しめるため、不様な姿を嘲笑うため、希望を無くすために呪いをかけた。口調は丁寧。愛に狂っているのかもしれない。

元ボンノー使い：ボンノーをうまく使い、三千の大軍にも対抗する力を持っていた。最後はこの時代のS級エクソシストとの戦いで勝利をおさめ、愛するものと杯を交わした後、息を引き取った。とある悪魔と恋をした。

アウル・フランシス・ブライアン

性別女、年齢62

見た目、白髪幼女

強さ、エクソシストA級より高い

得意魔法、魔具を使った魔導系

備考

魔具の製作を家業としてきたブライアン家に生まれる、元神童、弟子はボワルフほか数名（魔具の精製系で独立、ボワルフは師匠の元に

ただただいるだけ、かなりの凄腕)

年が幼く見えるのはブライアン家代々のことでサイヤ人みたいなもん、

仕事以外魔術師には一切の関与せず、国からの依頼もほとんど受けない、むしろCafe家業を褒められるのが好き、

若さの秘密は、昔祖先が生け贄として山神に捧げられた際に、その山神と交わったため。言うなれば人間と神のハーフ。ブライアン家の60歳は人間の12歳つまり人間の1/5の早さで歳をとる。

通称ロリババア

名前：ズ・グヌンバ・ペペ

見た目：20代後半のおっさん(25歳を越えたら男は大体おっさんだよ)

職業：元エクソシスト。

ファミレスのバイトリージャー兼時間帯責任者。

あだ名：はたらくアホウ様

強さ：元とはいえ凄腕のエクソシストだったんだからそれなりに強いよな。まあ、ブランク無しで安形のおっちゃんと同じくらい？(ブライアンには負けるけど。だってブライアン、クソ強いもん！)

得意魔法：大体それなりに使えるけど、強いて言うなら火、雷、氷かな

備考：元は凄腕のエクソシスト。昔はエクソシスト界でも1、2を争う程の力を持っていたが、ある日行き倒れていた悪魔を助けて教会から追放された。まあ、本人はそれほど気にしてないんだけどね！

はぐれ者として放浪していたところをブライアン(幼女)に拾われる。今はファミレス、チェ・ストーンで働くバイト。面倒見がよく後輩に慕われている。

バイトリージャー兼時間帯責任者。(この働きの者が！)

偶にブライアンが持ってくるエクソシスト関係の仕事もして生計を立てている。(といってもバイト優先。↑ここ重要)

口癖は、トゲピーヘッドの人に向かって、

「ウルセーんだよ、このトゲピーヘッド。一丁前に日本語喋ってねえで、大人しく『チョツギプライイ イイイイイイ！』って鳴いてろよ。」

(使い時が限られる口癖だろ。ワイルドだろ。)

「ここから先は、俺のターンだ！」

(もう一つもふぎけてると思った？残念！割とまじめです。)

戦闘時はエクソシスト時代から愛用していた妖刀を使い、魔法を織り交ぜた戦い方をする。(まあ、ペペさんが教会を追放されたのって妖刀を使えたからでもあるんだけどね。だってあれじゃん、こうエクソシストなのに妖刀使ったらね……。聖剣ならまだしも……。)

名前：古川 緋那 (旧姓 凰 緋那)

年齢：23歳

容姿：美人

概要：モテルの母親。しかし実母ではない。

モテルの父親とお見合いをして、結婚し今へと至る。

お見合いから結婚までの過程が早くモテルの父親とは未だに、キスは愚か手を繋ぐことさえしない。

代々続く武家、凰家の娘で養子。養子にも関わらず立派に育ててくれた両親に少しでも恩返しをするためにモテルの父親と結婚した。しかし、別にモテルの父親が嫌いなわけではないよ。

後に救済あり？(あったら良いな)

過去にペペさんと会ったことがあるらしいが本人は覚えてない様子。

ペペさんもあまりその話を語ろうとしない。

え、設定が重たくなかった？バカやろう、今まで散々ふぎけただろ？

モテルの実母：金の亡者で割とクズな人。表向きは病気で死んだことになっている。

モテルの性格はこの人似

モテルの父親：真仕事人間。

家庭より仕事重視の人。

緋那さんとの結婚を断ろうとしたのも仕事集中したいから。

モテルの女癖の悪さは知っているが黙認してる。

アスタロト：ベルゼブブの部下。こちらもベルゼブブと同様父と息子がいる。子供ベルゼブブには子供アスタロト。大人には大人がついている。立場的には部下と上司だが、オフでは普通に友達。高士に渡された紙からは子供アスタロトが出てくる。

子供アスタロト：一人称はオラ、容姿は天然パーマ（カリエル程ではない）の子供、ケモ耳（馬）。結構アホだが、力は強い。聞き間違いがひどい。が素直。

アスタロトの戦闘スタイル

大体肉弾戦、動きは遅いがめっちゃパワフル。使う魔法は、自分や対象者の力を引き上げたりするドーピング系。ちなみに空も普通に飛べる。回復魔法も得意。サポート系。動きが兎に角遅いので速い敵に弱い。

アスタロトの性格：天然。ボーツとすることが多い。たまに意味不明なことを言う。鼻を垂らしてる。見るからにアホそう。どちらかと言うと優しい。がやるときはやる、少しだけだけど。

語尾はくど。くだど。

ヴァルル・モント（男）

女神ゼネシスの懐刀で天使の総まとめ役、性格は柔和だがどこことなく怖い場面も

能力は、触れたものコピーする能力と破戒球と呼ばれるビームを打つ能力

得意魔法は召喚魔法

嫌いなものはベルゼブブ

昔因縁があつたとか無かつたとか

まあ女神の天使団ではNo.2、エピロの魔力での強化は全くして

いない女神の力だけの純天使
今は召喚術での召喚獣が戦う戦闘法だか昔はかなりの肉体はだつ
たとか

序章

ソシテボクタチハデアツタ 1

序章：ソシテボクラハデアツタ

俺の名前は、高司 蒼一郎、典型的な非リア充の高校2年だ。だがそんな俺にもついに女の子に告白されるときが来た。

「あっ……あの……好きです。付き合ってください!!」

その女の子は俺に向かってそう言った。

「えっ? 本当に?」

ついに俺にも彼女ができたぜー!! イヤー長かった彼女いない歴〓年齢生活ともこれでおさらばだ、キャツホー! そう叫ぶと、急に世界がぐにやぐにやになつていき、見覚えのある天井が俺の視界に入ってきた。それはつまりそういうことだ。

「畜生!」

俺がベッドから起き上がる反動で家が揺れた。……

「どうしたの? 彼女ができた夢でもみたの?」

「何でドンピシャで当ててくるんだよ!!」

「悪いわね、そういう能力なのよ……」

「ずいぶんと便利な言葉だな、おい」

今俺と会話をした、この女口調の奴の名前はエピロ……ひよんなことから俺の家に住み着いた、悪魔だ。

「そんなことよりあんた“ボンノー”を少しは扱えるようになったの?」

“ボンノー”って言うのは俺がこいつから預かった魔剣で、制限時間はあるが、下手したら神様に傷をつけることができる位の代物らしい……。で何で俺がそんな剣を授かったかのか今から説明しよう。

そう、あれは雨が降りそうで降らないと見せかけてやっぱり降るのかよ! って日だった。

その日俺は天に向かって雨降るのかよ!! と思い切り突っ込んだことは、言うまでも無いだろう

まあ、そんなことは関係ない、本題はなぜ俺がこの剣を預かることになったかだったな、それは俺が顔も完璧、性格も完璧、成績優秀、運動神経も抜群なのにモテないことと関係している、その日、親父が酔った勢いで

「実はな、この家の地下には悪魔が住んでいる。」

・・・と言ったことがきっかけだった。次の日親父は母親を連れて、海外に出張していったけどね。そしてその時俺は考えた。その悪魔なら俺をモテモテのハーレム状態にしてくれるかも知れない。

「というわけで地下にレッツゴー！」

俺は親父に一度悪魔をよびだす儀式を習ったことがあったので、うる覚えながらそれを試した。すると偶然にもソイツは現れた・・・。

悪魔らしいオーラを放ちながら、ソイツは俺に聞いた。

「私を呼び出して何のよう・・・」

「俺をモテモテにしてくれ！」

「人の話を・・・まあいいわ、願いはそんなことなの？いや・・・」
「ん？」

悪魔が俺を興味深く見つめ始めた・・・。

そして首をかしげて

「いや〜えーつと」

「どうした？」

「結論から言うと。その願いは無理よ」

「ど、ど、どーしてだよ!!」

「んーと、説明するのは難しいんだけど簡単に言うと貴方は、ある女神の呪いを受けてて、私には手が出せないのよ」

悪魔は、困り顔でそう言った、

「どーにかできねーのかよ!!」

「方法がないことはないのよ、1つは君の呪いに負けない、運命の人を探してその子と結ばれること・・・」。

少し溜めて悪魔はこう告げた、

「そして、君に呪いをかけた女神を見つけ出し屈服させること、ハーレムを目指したいなら二つ目の方法しかないわね、あつついでに運命の相

「はじめまして、お前が次の相棒か？」

「うおっ！しゃべった！」

「次の相棒もニンゲンか・・・まあいいだろう。我の名はボンノーだ、宜しく」

「へあ？今なんて？」

「ボンノーだ!!」

ソシテボクタチハデアツタ 2

「ボノ？」

「ボンノではない!!ボノだ!!、あれ違うな、間違えだ、ボンノだ!!」

なんか、良く見たらこいつ男性を象徴する『ソレ』に見えないこともないな、そう思うと急に笑えてきた。

「プハハハ」

「何を笑っているのだね！」

「あ、ああ、すまない」

笑いを堪えるのに必死だ。

「一つ、いいか」

「なんだねニンゲン、我は今不機嫌だ手短に済ませたまえ」

「見た目は変えられたり出来るか？」

ブチッ

何かキレる音がした。

「あの笑いはそういう事か、ニンゲン」

「一度ならず二度まで我輩を侮辱するとは良い度胸ではないか」

「ぶ、ごめんで本当に。」

「貴様、本当に反省の色が見えないな、その笑いも、我が能力を聞けば止まるだろう、よく聞けニンゲン!!」

圧倒的威圧が場を支配した。俺は無意識に、気を付けをしていた。

「まず、私の能力は主の欲望の大ききさによって硬くなる。」

「は、はあー？」

「そして、伸び縮みする!!」

なんとなくそつち系な気がする、

「最後に熱くな・・・」

「ちよつと待て！それ以上は18禁的にも待て！」

「あのくそろそろいい？」

悪魔の呼び掛けに思わずはつとなった。

「その剣の説明は本人がしたから省くけど、突然ながら実はあの女神は私一人でも倒せるの。」

!!!?

イマナンテイツタ？タオセル？ジャアオレイラナクネ？そんなことを考えてると

「続けるわよ、でも今の私じゃ倒せない理由があるのよ。」

「ふむふむ」

「実は一度あの女神と戦ったことがあるのよ……。男を取り合つてね。」

理由下らねーなんて思いながら

「で、どーなったんだ？」

「負けたわ、その時お酒でべろんべろんに酔ってたから……。でその際にあいつに私の力をアクマノチカラスイトルクンで半分くらい持つてっちゃったのよ。」

何だそのネーミングセンスなき……。・・

「何だそのネーミングセンスのなさは。」

どうやらボンノーも同じことを考えていたらしい。

「うるさいわね、私に聞かないでよ。」

そして俺はふと疑問に思ったことを聞いた

「そのお前が奪われた力はどうなったんだ？」

悪魔は下を向いて

「その力は今あいつに利用されて、人工的に造り出した天使になってるわ。」

「なーんじゃそりゃ」

いや待てよ、じゃあその天使たちを倒していけば、エピロに力が戻るじゃん。それってつまりそういう事じゃん。なんて事を思い付いたも矢先。

「今、私の力が戻れば女神を倒せると思ったでしょ？」

あちやーばれてたな……。・・

「でもそいつより強いんだろ？」

「そういう問題じゃなくてね、私もあなたと同様であいつに呪いをか

「いやーこれに必死過ぎて」

「そう言いながら、奴等は俺が先週渡したポ○モンを見せつけて来た。」

「ポ○モンに？」

「ポ○モンに」

「落ち着け！たかし、お前が今やることはそうではない。拳を握りながら必死に自分で自分をなだめた。」

「・・・デーソノテンシハイツタイドンナトクチョウモツテルデスカー？」

「はっはっはー相棒、見ろ、今色ちがいのポ○モ・・・」

「今日の夕飯は魔剣の天ぷらかな？」

「すいませんでしたマイマスター」

「しよーがないわねーじゃあ一回だけよ。」

「初めての戦いになるであろう天使・・・一帯どんな特徴が？」

「男、天パ」

「めつちや適当だったあああああああ!!!?」

「他は？他は無いんですか!？」

「えくとねくまあホテルって言う子の隣の席だったような気がするわね。」

「ビシッ!!・・・俺の中で電撃が走る音がした。理由はその名を耳にしたからだ・・・そう「ホテル」と・・・」

「ホテルだ?!?!あの、さしてイケメンでも、性格が良いわけでもなく、運動もできない、頭もいい方でもないが、めっちゃうちゃモテてるあのあのあのホテルか!!」

「ぐおおお何か無性に怒りが湧いてくる、

「落ち着け相棒、我が大きくなってしまう」

「若干の熱量を持ったボンノーがなだめて来る、

「そうよ落ち着きなさい、その子が女神と関係があるかはわからないんだから、無駄な力つかわないの」

「そう言ってエピロ微笑んだ」

「・・・カワイイな畜生」

女の子耐性がない俺にはどストライクだった。

「何か言った？」

「何も言ってるねーよ」

何がなんでも女神は倒さなければ少しそう思った。

第一章

ハジメテノタタカイ 1

俺の学校に天使がいる……。エピロとボンノーはそう言った。しかし俺は1つ疑問に思った。もしそこで戦闘になったら、そこにボンノーを持ってけないから俺に勝ち目が無くね?と。

だからそれをボンノーに相談してみたところ。

「そうだな、我は大きさを自由に変えられるから持ち歩く事に関しては問題ない。ただ・・・」

「ただ?」

「常に平常心を保つ事だな。我は少量の欲なら抑えることができるが、あまりに大きいと抑えきれずに体が反応してしまう。」

反応してしまうということはつまりそういうこと、俺は思った。こいつめんどくせー

「相棒よ今めんどくさいと思ったな、我には伝わっているぞ!!」
そう言う所もめんどくさいんだよな・・・と心の中で思う。

「まあ、とりあえずお前は鞆の中な。」

「はあ? 貴様我を誰だと思ってる? 三千の大軍を相手にしてもものとしなかつた魔剣ボンノーだぞ!」

本当にめんどくさい魔剣だな・・・。

「ハイハイわかった、わかった、大魔剣様はどこがいますか?」

「うーんそうだな、ポケットでいいぞ、ズボンの。」

ポケットかよ、もし欲望に反応したとき場所的になんか勃つた感じになって、最終的に小中学生の男子に囲まれる光景が目に見えかぶんだが・・・。

まあでも、確かにポケットの中に入れてれば戦闘になったときすぐに対応できるしな、俺はとりあえず朝食をそそくさと食べて学校に向かった。そして俺が歩いてると通りの向こう側から黄色い歓声が聞こえた・・・。

「モテルだ。」

「キヤーモテル君よく！キヤーカツコイイー」

「畜生！」

いつもの台詞を言っているとその黄色い歓声をあげてる女子がこっちを向いて

「やくちよつと何でモテル君の近くに高司がいんのよーマジキモいんですけど〜」

「そーよー本当モテル君が汚れる〜」

ぐぬぬー呪いが解けたとき覚えてろよお前ら・・・

「まあ、やめなよ君たち、高司という引き立て役がいるから僕が輝くん。高司がいなかったら僕はいないも同然さ。」

それを聞いて女子は

「キヤーカツコイイー」

決まった反応だ。反対に俺は殺意が沸いてきたけどね

「相棒・・・」

ボンノー自身が反応して大きくなる前に俺をなだめて落ち着かせようとしていた。だが怒りを堪えるのは個人的に厳しかった。

「うぐう・・・クソがア・・・」

必死に怒りを抑えるがやはりコイツにはムカついてしまう。そしてまもなくだんだん股間が熱くなってきた。

「ん？股間が熱い？」

やばい、やばい、やばい、ボンノーが大きくなり始めた。これは周りから見たら、モテルに馬鹿にされて股間を大きくしていると、思われるのではないか、モテル×高司とか同人誌漫研の腐女子が書くのではないのか、これはまずいことになった。

「ボンノーどーにかしてくれ」

俺は小声でボンノーに助けを求めた

「相棒よ落ち着くのだ、落ち着けばこの状況は収まる。」

「落ち着いてられっかよ、このままじゃ俺のあだ名は勃鎮魂だよ!!」

「じゃあ、少し落ちついて、我をシャーペンだと言えばいいでわないか、勃鎮魂」

「誰が勃鎮魂だ!!」

え?! 周りがざわつき始めた。

「たちんこん?、たちんこんとか叫び始めたわよ高司が、やっぱり怖いわ、キモいわ高司・・・。」

ボンノーが俺を落ち着くように指示する。しかし俺の怒りはいつこうに収まる気がなかった。

「ダメだ、俺の怒りは収まらねー。」

俺の怒りが収まらないせいかボンノーはどんどん大きくなっていく。

「きゃー!! 高司の股間が徐庶に大きくなってるわ! キモいわ! キモいわ! 高司!」

きゃーきゃー女子たちが騒いでいるが今、俺はそれどころじゃない高司、さすがにそれはちよつと・・・。」

モテルが横で若干引いている。てめー! 誰のせいでこんなことになってると思つてやがる! 畜生

「相棒! それ以上は色々ヤバいぞ! 落ち着くのだ!」

ボンノーも大きくなる速度に色々な意味で危機を感じたのか俺を宥めてくる。

「無理だ! もう止まらねー!」

俺も必死で止めようしているがもう俺の意思じゃどうにもならないくらい腹が立ってきた。

「でも、ヤバイぞー! このままじゃ俺のあだ名がヒドイことに! どうにかしてくれボンノー!」

俺はボンノーに頼み込む

「致し方ない。行くぞ相棒! 賢者タイム!」

ボンノーがそう叫ぶとみるみるボンノーが小さくなっていく。

かわりに体が一気に軽くなり、周りの動作がゆっくりに見えることに驚きを隠せず、俺はボンノーに尋ねた。

「ボンノー、なんだよコレは?」

「我の力の本質は、欲望を魔力に変えることだ。変換した魔力を相棒の体に流し込んだそれにより身体能力を向上させたのだ!」

そう言うと急にボンノーが、どんどんフニヤリ始め、まるでしおれたホウレン草のようになっていった。

「どうしたんだよ？おい」

「どーひひやひえはにやい、わへのほかげでてやしゆかつひやひやろーが（どーしたではない、我のお陰で助かっただろーが！）」

何を言ってるのかよくわからんが、確かに俺の股間の膨らみと熱はなくなった、が少しまずいことになってしまった。

これは、昨日見たジョ○ヨで学んだあの技を使うしか無いようだなあ。なんて俺が企んでいると・・・。

「はいぼーはやくしてくりえー（相棒、早くしてくれ）」

こいつも喋らなかつたら良いのに。まあそんな事思ってる場合じゃねー・・・。

「悪い悪い、じゃあやるぞー！」

そんな事を言っていると、女子たちが、俺を仕留めようところち近づいてくる。

「高司、よくもホテル君を汚してくれたわね」

「今だ！」

「逃げるんだよおー！」

ダダダダダダー

50メートル走7秒の力を見せてやる！ザマーミロ、そう思ってからを振り返ると・・・。

「まてー！てめえー!!ぶち殺してやるー！」

この妙に野太い声は、金剛寺 日向子だ。見た目の特徴は男子顔負けのガチムチバディ、ルックスも完全に男、

いや「漢」！

俺はすかさず言つてやったよ

「ぎゃああああああああああああああああああああああああああ!!!なんだよアイツ!?走るたびに地面が揺れてんじゃあねーか!!!しかもはええええ!!!」

そしてとうとう奴の手が俺に届きそうになった。

「絶体絶命だー!」

そう言った直後だった。俺の体がわずかに輝き、さっきの比じやないくらいのスピードで走れるようになった。

「コレも、賢者モードか? 足が速くなったぞ。」

そう言うのとボンノーは俺の頭の中に直接語りかけてきた。初めからそうしろよ……。

(その通りだ相棒、だがかわりにまわりの動きはスローではなくなつたろう?)

「言われてみたらそうだな。」

なんて会話していると、後ろから地響きが聞こえてきた。

ドドドドドドドドドドドドドドド!!!

「貴様アー!!!この私から一時でも逃げられると思うたかアアアアー!!!」

日向子だ! アイツどんな身体能力してんだよ!!!?

本当に人間かよ!?

(相棒よ、あやつは本当にニンゲンなんだよな?)

どうやら俺達は気が合うらしい、同じことを考えてた。だがそんな事を考えてる場合じゃない、だんだんと距離が縮まっていく。

「糞! このままじゃ捕まっちゃう。」

「ふーはははははは!!! 覚悟しろ! 高司!!!」

奴の手がせまってきた……しかしここで学校の校門が見えた! あと少し逃げ切れれば校門の前になつて生活指導員の安部先生が何とかしてくれる!!

うおおおお!!! しかし現実には甘くなかった。

(相棒、時間切れだ。)

「え、ちよ……」

次の瞬間後ろからまるで磁石が反発するような力を受け、地面に着地したと同時に、俺はそのまま意識を失っていった。

キーンコーンカーンコーン……

俺が最後に聞いた音は学校のチャイムだった。

ハジメテノタタカイ 2

(相棒よ起きろ・・・)

大分時間が過ぎたらしい、俺が目を覚ますと保健室のベッドの上だった。

「いや〜高司君が急に前方からミサイルように飛んできてそのまま気絶したって、安部先生から聞いたわよ。いったい何をしてたの?」

保健室の先生、本多先生が心配してくれてる。マジか、そんな飛びかたしたのか俺、アイツの力はどーなってんだよ

(いや相棒の耐久力もどーなってるんだ・・・)

ボンノーのツツコミは無視だ。

「じゃあ、俺は教室に行きます。」

「わかったわ!気を付けてね。」

俺は保健室を出て、教室に向かいながらどうして、日向子とぶつかっても大丈夫だったか、考えていた・・・。

「そうか、呪いか!!」

「どうしたのだ相棒」

「呪いだよ、呪いの効力の一つの女子には触れられないっていうのがあって、それが俺が日向子に轢かれなかった理由なんだよ!!」

「あーなるほど、よかったな相棒あの化物に轢かれなくて、最後の切り札賢者モードは、神からも逃げられることができる能力。あの能力に追いついてくる化物に轢かれたら見事にグロテスクな映像が出来上がっただろう」

「皮肉にも呪いに助けられたってわけだ。」

俺が妙に考え深くしているとボンノーがボソツと呟いた

「そもそも呪いがなければこんな事にならなかったのではないか?」

「ん?何か言ったか?」

「いや何でもない。」

そんな話をボンノーとしながら歩いてっていると教室の前に着いた。

「はあー、今日も一日学校かー・・・早く帰りたい・・・。」

俺が項垂れていると・・・

「なんだ相棒。学校は嫌いか？」

ボンノーが俺に話しかけてくる。

「いやー、そうじゃないけど。これからまたクラスの女子たちに罵倒されるかと思うとな・・・。」

「・・・なんか、すまん」

「謝るなボンノー、余計哀しくなる。」

俺とボンノーが話していると登校時間の予鈴がなりはじめた。

「やばっ！予鈴が鳴り始めた。早く教室に入らねーと。」

「そうだな。いくか、相棒」

ガラガラガラ

教室の中は喧噪で包まれていた。俺が席に着いて少し経つと先生が入ってきた。

「おう、みんな席に着けー朝礼は始めるぞ!!なんだ、高司今日もキモいな」

この人は担任の白羽先生だ、こんな、喋り方だが一様女性で、美人である

「クソ、美人じゃなければ文句も言ってるのに」

「少しばかりこの呪いの酷さがわかったぞ相棒これは辛いな」

ボンノーがポケットの中から小声で慰めてくる、

「そこ、なんか、ぼそぼそ言わない!!」

愚痴が聞こえていたようで、白羽先生が注意してくる、悪気が無いのが逆に辛い

「...はい」

渋々俺は返事をする。

「委員長、号令」

「起立、気をつけ、礼」

「二お願いします」

「今日も高司は」

「キモイ!!!」

「着席」

ガタガタガタ

「どんな号令だよ!？」

(新卒のいじめだな・・・)

「うるさいぞ高司、廊下に立つか？」

「はいすいませんでした先生」

しづしづと席に座ると、クラスの男子が全員笑いを堪えているのが見えた。まあいつもの事だからいいんだけどね。ただしホテル、テーマはダメだ。

(随分と、酷い扱いではないか相棒よ。)

大丈夫、もう慣れてる。そんなことより天使だよ、どこにいやがるんだ？たしかホテルの隣の席にいたんだったよな？

ホテルの席は廊下側の最寄りの席で前から4番目の席だ。つまり隣は1つしかない、しかしそこには机の上にカバンが置いてあるだけで誰もいなかった。ちなみに俺の席はそいつの席の列の一番後ろだけだな。

「おい、どーしたんだよ？高司、今あいつは保健室だぜ。」

すると俺の隣から、友達の鈴鹿がそうやって教えてくれた。んーまた保健室に行くのか・・・。なんて考えてると

(相棒保健室に行くのか?)

「あーうん、そうしようと思う、保健室なら保健の先生だけで人も少ないだろうし」

(それもそうだな、奴は保健室で討ち取るとしよう)

ボンノーと奴を倒す計画が決まったので、俺は手を挙げた。

「先生、頭が悪いので、保健室に行ってもいいですか？」

「頭が悪いなら、ここで勉強しろ」

あれ？何を間違えた？ここで俺は保健室に行けるはずだったのに・・・少しびびりして啞然としていると

先生が急かしてきた。

「早くしろー!」

「はい、すいませんでした行ってきました。」

糞くこのままじゃ、テンション的に戦う気が起きねーぜ・・・。

(本当に、きつい呪いだな相棒)

まあ、いいやさつきといこう・・・。

あとついでに俺にかかっている呪いの効果を1つだけ振り替えてみるとするか、

俺にかけられた呪いにはいくつが存在してて、さつきのは女子に触れられない呪いだな。

これは別にどうってことはないんだが、今までの扱いをみてくれたようにあれも呪いの1つで、どうやらひたすら俺の行動が異性に対して嫌悪感を感じさせるといふ呪いらしい。

そんなこんな思ってるうちにどうやら保健室にたどり着いたようだ。まあさつき出たばかりなんだけどね・・・。

「ここに天使がいるのか。」

(相棒よ、構えておけ。)

わかったよ、ボンノー。俺は慎重に保健室の扉に手をかけた。

ガラガラガラ、建て付けが悪いのか音を立てて扉が開いた。

「ん?」

俺は驚き目をこすった、何故なら天パの天使らしい生徒が正座で保健の先生に怒られていたからだ。

「ボンノー、天使らしい奴が保健の先生に怒られているんだが?俺の見間違えか?」

「残念だが、我にもそう見える。」

神の使いであるはずの天使が人間に怒られている。

ハジメテノタタカイ 3

しかも内容を聞く限り、仮病したということらしい、大丈夫か天使・・・そう思いながら、恐れ恐れ先生に声をかけてみた。

「あのー自分頭が痛いんですけどー」

「仮病だな!!」

3秒でバレてしまった、てかなんでわかるんだよ!!すると先生は俺の心を見透かしたかのように

「仮病は3秒でわかる、それが保健の先生歴7年の私能力だからな!!」
敢えて突っ込まないで、俺は下らない検討をした。

「本当に痛いんですが・・・。」

「嘘をつくのか?お前もこっちで正座だ!!」

「え??!」

俺は問答無用で天使の横に正座をさせられた。結局俺と天使が保健の先生に解放されたのは授業が終わる直前だった。

といっても俺も天使も授業時間のほとんどを正座で過ごしたおかげで足が痺れ、すぐに保健室からでることはできなかった・・・。

保健室から教室に戻った俺と天使を待っていたのは白羽先生が担当する授業だった。

「お、戻ったかキモ・・・違った高司。それで頭の悪さは治ったか?まあ持ち前のキモさは治ってないらしいがな。ヒヤヒヤヒヤヒヤ」

開口一番俺を罵倒する白羽先生。

なに?この人一回一回俺を罵倒しないと気が済まないの?

ほら、例の如く他の男子生徒はクスクス笑ってるし、女子なんかみんな揃って頷いちやてるよ・・・。

それと、おいモテル、お前は笑ってんじやねえよ。

(本当に難儀だな、相棒よ・・・。)

どうやら、またしてもボンノーは俺を慰めてくれるらしい。やめて優しさがツライ!

俺がドアの前で項垂れていると天使はさっさと教室の中に入って

いった。

「……普通に何もないうまま放課後になってしまったああああ!!
しつかり7限まで受けてしまった……途中天使の天パが大きく
なって黒板が見えづらくなつた気がしたがノートが完璧である、朝保
健室で正座したのが良かったのだろうか集中していた、」

「相棒、相棒よ」

俺が自分のとったノートに惚れ惚れしているとボンノーが声をか
けてきた

「ん?どーした?」

「天使、天使」

アツーン完璧に忘れていた天パが邪魔だったことしか認識してな
かった、いそいで周りを見渡してみるも誰もいない、俺だけナル
シだよ、自分のノートの出来に2時間も使うとか……

「ボンノー早く行ってくれればいいのにイイ」

「我大きい声出せないし人前で」

ふと時計を見ると6時半になっていた。こんなことしてる場合
じゃなかったわ……。

グラウンドを見てみるとまだ練習をしているのか幾つかの部活が活
動しているようだ。

俺は急いで荷物をまとめると天使を探すため廊下を走る。

……数分後、今日はもういないかなー。

そう思った時期が俺にもありました。

いたよ、天使。なんか窓から空を眺めて黄昏てる。

とりあえず、俺は天使に話しかけてみる。

「おお、まだ帰ってなかったのか?」

「おや、高司じゃないか。君もかい?。なんかさつきは自分のノート
を見ながら恍惚の表情を浮かべていたようだけど……。」

「……悪いそれは忘れてくれ。てか忘れてください、お願いします。」

おい、俺とだけ自分のノートに没頭してんだよ!

(おい、相棒よ、そのような事をしている場合ではあるまい。目の前に
天使がいるのだぞ)

ボンノーが脳内に話しかけてくる。

「そうだな、まずはこつちだ。」

「なあ、一ついいか？」

俺が天使に問う。

「うん？、なんだい？」

「お前、天使だろ？」

一筋の風が空いてた窓から俺たちの側を駆け抜ける。

「・・・なんの事だい？ちよつとわからないな。」

天使はあくまでもしらを切り通すつもりらしい。

「いや、そうゆうのいいから。もうわかってるし。そうだろ？女神の手先さん？」

「・・・高司、君何者だい？」

やっと天使は自分の事を認めるらしい。

「とりあえず、ここじゃなんだから屋上へ行こうか。・・・それに、君もその方が都合がいいだろ？これからの展開として。」

・・・こいつ、いきなり雰囲気が変わりやがった。

「・・・ああ、そうだな。」

俺は天使の提案に乗り屋上に行く事にする。

(おい、相棒。)

「(ああ、わかってる。頼むぞ、伝説の魔剣さん?)」

今、〃初めての戦い〃が始まる。

ハジメテノタタカイ 4

屋上に着くと奴は何やら魔法を唱えはじめた。

「ボンノー、アイツは何をやってるんだ？」

(恐らく邪魔が入らないように結界を張ってるんだろう。)

「そうか、じゃあ思いつきり暴れてもいいってことだな……。」

この会話が終わると同時に結界がはりおわったらしい。天使は正面から立ってポケットからコインを取り出した。

「このコインが地面に落ちたとき……そのとき戦闘の合図だ。いくぞ？」

キイーン

コインが高い音を立ててなり、次の瞬間天は神々しい羽を出した。

「これから、殺される君に僕の名前を教えてあげよう。神速のカリエル……この学校では狩林幸太と名乗って……。」

奴が喋ってる間にコインが地面に落ちた。

俺は相手が名乗り終わらないうちに斬りかかった。

名乗り出るなんて日本では、元寇の時代に廃れた文化だぜ！

「相棒よ、話を聞かなくて良かったのか？」

ボンノーがあまりの悪どさぶりに質問してくる。

「良いんだよ、俺らはライダーや戦隊モノの悪役じゃない！相手の変身シーンをみてるうちに攻撃してしまえば……。」

シュツ！

斬ったという感触は無かったが、それは魔剣であるボンノーの斬れ味の良さ故にだろうと思ひ、安心して振り返るとそこに天使がいた。

ズン!!!

「つつ!?」

声にならない声が出た。

ドガツ!!!

俺は奴から蹴りを受け、気づけば落下防止の金網に打ち付けられていた。

「言っただろう……僕は神速のカリエル。君の動きじゃ神速には追いつ

つけない！あと、人の話はちゃんと最後まで聞け!!」

怒り混じりにそう説明されたが、最後の部分が本題な気もする、だが確かに奴に不意打ちの攻撃は当たらなかった。

「ボンノー、あいつ初手にしては強すぎじゃないか？」

「仕方無い、天使とは人よりも数段も強いモノだからな。」

「勝つ手はないのか？」

俺は運動神経は割とあると言っても武術や剣術を習ったわけではない。まして今の攻撃が外れた俺に為すすべはなかった。

「くそ、どうすりや良いんだ？」

「欲望を溜めるのだ。相棒、中等部二年の時「俺の煩惱は余裕で108以上ある除夜の鐘如きでは傷一つつけられぬは、ハツハツハ」と言ったことがあるであろう、相棒ならできる。」

俺の黒歴史が一つオープンされていた。

「なんでお前がそれを知ってんだよ！人の黒歴史勝手に公開してんじゃねえよ！」

俺が文句を言っているとボンノーは

「何を言っている相棒よ。我は伝説の魔剣だぞ。」

・・・と、さも当然の様に答えた。

「なに？魔剣で、なんでもありなわけ？・・・まあいいや、それで欲望を溜めるって言ったってそんな暇あんのかよ？あいつ神速らしいぞ。」

「なに、時間なら我が稼いでやろう。」

俺の問いにボンノーは答えた。

「話しは終わったかい？なら、バイバイだ！」

狩林が話しかけてきた。なんとこいつは俺とボンノーの話しが終わるのを待っていてくれたらしい。腐っても天使ってところか・・・。

刹那、狩林の姿が消え俺の目の前に奴の拳が迫っていた。ヤバ、俺死んだわ。死ぬ前に一度くらいモテたかった。

ハジメテノタタカイ 5

ガキーン！

次の瞬間、俺の右腕が勝手に動き奴の拳を阻んだ。

「なにやっっている相棒よ。言ったであろう、我が時間を稼いでやると。」

「え？なにしたんだよボンノー？」

「我は伝説の魔剣であるぞ。当然幾多の戦闘の経験がある。奴の攻撃は出来る限り我が防ごう。その代わり少し体を借りるぞ。」

そして、そこからはボンノーが俺の体を操り狩林との激しい攻防が始まった。

・・・あれ、これ俺いらんじやね？とか考えていると奴の攻撃が激しさを増した。

「なにをしている相棒！言ったであろう、欲望を溜めると、幾ら我でもこれがいつまでもつのかわからないのだぞ!!」

ボンノーが珍しく声を荒げて言った。欲望を溜める・・・か。

欲望つてのは何もしなくても自然と生まれてくるものだ。

だが自分から望んで欲望を出すっていうのは聞いたことがねーぞ・・・。

ダメだ、考えれば考えるほど欲望からかけ離れていくようだ。

さつきから激しい攻防が延々と続いているが、俺はまるで迷宮にもはいりこんだかのように、思考が停止しかけた。

「ほらほらほら！さつきからボクの攻撃を防いでばかりじゃないの？」

ガキガキガキ！ギューン!!

「ウグ、相棒よ急いだ方が良い……。そろそろ奴の剣が通ってきたぞ。」

ボンノーがそう言ったときだった。

ビシュ!!

遂に奴の剣が俺の左ほほをかすり、そこから血が出てるのが確認できた。

「まずいな、このままだと・・・。」

だがさつきから一向に欲望が貯まらねー……いや溜めかたがまだわかんねー、どうすりやいいんだ？俺が迷つてるとボンノーが助言をしてくれた。

「相棒よ、深く考えるな。朝に相棒は欲望を出せただろう」

「そうだ、俺は朝モテルにムカついて……怒りで……」

「そう思った次の瞬間ボンノーが奴に弾かれてしまった。」

「つまらないな、君も魔剣も、いやニンゲンはつまらないな……」

「怒り……怒り……」

こんな状況にもかかわらず、俺は朝の出来事を思い出して怒りをつくろうとしていた。

「ククク、おい高司！お前の相棒は向こうに転がってるぜ、取りにいかないのか？」

はつとなつた。すぐさまボンノーを取りにいかなくては！

「まあ、取った所でそんなゴミ箱に捨てられた魚の骨なんてなんの役にも立たないだろうけどね。」

ブチン!!

俺の中でなにかが切れる音がした。

「今、お前ボンノーの事を何と言った？」

「おっと、怒るか？何度でも言おう、ゴミの中の魚の骨……」

俺は……無意識に体が動き、ボンノーを手にしていた。

「うおおおああ!!」

ギイン!!!

「バカな、さつきとはパワーが格段に違うぞ。」

「キタキタキタ！相棒よソレだ、ソレ！さあここから反撃といこうではないか！」

だがボンノーの声は俺に届いてなかった。

ガキーン！ガキ！キーン！ガキガキガキ!!!

力任せの剣撃だが、だんだんと奴に追い付いてきた。

「く……調子に、乗るなあ!!!」

ギユイイン!!!

再びボンノーが弾かれ、俺の頭上を舞った。

「はあはあ、糞が！てこずらせやがって。」

「まだ終わってねーよ！」

バキィ！

俺が右の拳で思いっきり奴を殴ると、そのまま向こう側の金網に体をぶつけていた。

ハジメテノタタカイ 6

「グフウ、このボクがこんな奴に・・・意味がわかんねえよ。何でコイツはこんな怒ってるんだ？」

「意味がわかんねえ？なら教えてやるよ。まだ出会って少しだけだよ、俺の・・・」

俺は上から落ちてくるボンノーを華麗にキャッチした。

「相棒を・・・」

柄を強く握りしめた。俺の怒りに反応してボンノーが熱をおびはじめた。

「ま・・・まで！」

待てるかよ！

「馬鹿にすんじゃねーよ！」

ズバアアアアー！！！！

確に相手を斬った。その感触もした。しかしそこに天使は転がってはいなかった。

あつたのは天使の翼であつただろう切れ端だけだった。

「つつ」

最初と同じように回り込まれた・・・そう思い急いで後ろを見るがそこには影一つない、

「どこに行きやがった!!？」

俺は周囲を見渡すも誰もいない。

「今回は僕の負けの様だね、高司君」

どこからともなく天使の声が響く。

「勝利した君にご褒美をあげよう、やられた僕の翼の切れ端とその近くに卵があるだろう」

俺は確認するために、天使の翼の切れ端をめくってみると本当に卵があり、また切れ端の裏には

ザンネン、後ちよつとだったね（笑）

と明らかにこちらをおちよくつてる文が書かれていた。

「あつたけど、何だよこれ？」

相手が、自分の攻撃をわざと当たったのだと察し、少し怒気を含んだ声で奴に尋ねた。

「それは、シルフドラゴンの卵、上手く懐けば君の力になるだろうね、君は女性に触れられないのだろうか？」

「だからどうした!!俺にはボンノーがいる!」

そう言うと、今は姿が見えない天使が少し笑いながら問う。

「天使には女性もいるのだよ?更に僕よりも遥かに強い天使も、そしてその二つが合わさった者も、僕にすらトドメをさせなかった君がどうやって勝つのかな?」

言葉を失った。考えても無かった。そら初戦だもんこれよりはみんな強いよね……

「そ、それは修行でもしてー」

「相棒、流石に修行は我がめんどくさいんだが。」

お前がめんどくさがってどうするんだよ。

「まあいいや、君達が僕らに負けてくれれば、僕らの邪魔はいないってわけだし、君達と遊ぶことはいい暇つぶしになるしね」

完全にこちらを舐めてやがる。

コイツ……モテルの次ぐらいに嫌いかもしれん、だから思いつきりこう言っただけだ。

「ヴァーナーカ!!!」

「小学生かい、まあいい、せいぜい頑張ることだ。」
バサッ!

天使が羽ばたいたと同時に周りの結界が消えた。

俺は誰もいない屋上でバタリと寝転んだ。

緊張や感情の動きが激しくて疲れたのだ。

寝転んでしばらくたつとボンノーが話しかけて来た。

「天使はどこかに言ったようだな、相棒」

「……そうだな」

こうして俺達の【初めての戦い】が終わった……。

俺は金網の近くにあるベンチに腰掛けて、今回の反省をしていた。
すると……。

ドカーカーカーン!!!!

急に爆発音が遠くから聞こえた。見てみると空中が爆発していた。

「なんだ？あれ？」

俺がそう聞くとボンノーは、何でもないかのようには答えた。

「ん、ああそーういやさつき相棒が奴を切った時に、切り口が爆発する魔法をかけた事を言うのを忘れていた。すまん相棒よ。」

衝撃で何も言えなかった………なんだよそれ……アイツの無駄にまた出てくる感台無しじゃねーかよ。

奴が爆発した後の所に何か色つきの煙のようなものが、ひとまとわりで浮いていた。

「ん？おいなんか消えたアイツの体からなんか出てるぞ。」

「うむ、あれは奪われたエピロの魔力だな。そのうち地面に落ちてくるからビニール袋か何かに詰めて持ち帰るとするか。相棒？」

なんかもう笑うしかねーや。

「ハハハハ、そうするか。」

こうして俺たちはシルフドラゴンの卵とエピロの魔力を持って家に帰った。はじめての敵の最後については……まあ語らないようにしましょう。

第二章

ドラゴンペアレント 1

俺、高司 蒼一郎は今すごい悩んでいる。

「くそー、奴から貰ったこの卵・・・どうやって孵化させるんだよ。」
て言うか孵化させた所で、俺にドラゴンなんて育てられるのか？

「おい！エピロ!!!!どうにかできねーのかよ?」

ドラゴンのことなら、悪魔のエピロが詳しいと思い、今彼女にドラゴンについて調べてもらっている。エピロはカップラーメンをすすりながらひたすら凶鑑とにらみ合いをしていた。

「ズゾーあのねゾーそのドラゴンはゾゾゾゾゾー私にもジュールジュールジュール・・・」

「うるせー!食ってから喋ろ!」

くっそ、俺も腹が減ってきた。

「相棒よ、豚骨と醤油のどっちにするか?」

「あー俺、豚骨で・・・て真面目に調べろおおお!」

そう言いつつ俺は豚骨拉麺の容器にお湯を注いだ。このカップラーメンは、作るのに5分かかるタイプの奴だからそれまでになぜこの状況になってしまったのか思い出してみよう。

昨日カリエルに勝利し、この卵と魔力を持って帰った・・・そこまでは良かったんだが、どうやらこの卵はボンノーが言うには、孵化直前らしくそれをエピロに見せた途端何を思ったのか、その卵をホビロンにして食べると言い出した。

ホビロンってのは孵化する前の卵を、茹でて作る東南アジア系の料理なんだがこれがまたグロテスクなんだ・・・。

俺は一生懸命ボンノーと共に彼女を阻止し、何とかその日は無事だった。翌朝エピロに、孵化のさせ方を聞いたが調理方法は知っていても孵化のさせ方は知らないと言うので今に至るってわけだ。状況を整理しているうちに、5分がたった。食べなければ!!

ズゾオオオ

俺がカップ麺を食べていると、エピロが突然

「うん、やつぱりホビロンにしましょう！」

とか言い出した・・・またか・・・。

「おい、それはもう昨日終わった事だろう。」

「そうだぞ、ホビロンはヤバイ。色々な意味で」

ボンノーも俺の意見に同意のようだ。

まあ、昨日あれだけ派手に止めたんだ。ここで寝返られたら正直この卵の未来はホビロン一択だろう・・・。

「ええー、絶対ホビロンの方がいいのにー。外国の文化を知るのも大事なことよ。」

「それならもつと違う方法があるだろう・・・てか、マジで卵の孵化のさせ方知らないのかよ？」

俺がそう言うと、エピロは投げやりに

「だから本当に知らないでばー。てゆうか、そんなに孵化させたいなら自分で調べなさいよね。」

「それだ、相棒。最初から調べればよかったのだ。」

とボンノーが言うが

「そうは言ってもよ、どうやって調べろってんだよ。」

「街の図書館にでもあるんじゃないのそれ系の本。」

どうやらこのダメ悪魔、街の図書館にドラゴンの卵の孵化のさせ方が書いてある本があると思っっているらしい。

「まあ、まずは行動だ相棒よ。」

ボンノーが俺に促す。

「そうだな、おいエピロ、これ食ったら図書館行くぞ。」

「えー、私もー。めんどくさい。」

こいつ・・・マシで殴りてー

「まあいいわ、これと後もう一個食べたらね！」

こいつまだ食う気らしい・・・。

ドラゴンペアレント 2

その後最後まで行きたくない駄々をこねていたエピロを無理矢理つれて、図書館に来た俺たちはなぜかあっさりドラゴンの孵化に関する本を見つけていた。

「なんか氷水にいれるって書いてるぞ。」

という俺の言葉がよほど信じられないのか漫画を読んでいたエピロが俺の持っていた本を凄いい勢いで取り上げて読みはじめた。

「本当ね…卵って普通温めるものだと思うんだけど…この種族は変なやつなのね」

「変とかいってやるなよ…。」

「この変な種族凄いいみたいよ。うまく育てれば言葉も話せるみたいだし、魔法がつかえるようになったり、人化なんかもできるようになるみたい」

「人の話を聞け！」

俺はつい怒鳴ってしまった。無論これが原因で俺たちは1週間ほど図書館から出禁をくらった。

「あーあ、漫画がいいところだったのに続きが読めなくなったじゃない！どうしてくれるの！」

帰宅途中からエピロはずっとぶつぶつと文句をいつている。俺はエピロを無視して洗面器に水を張り氷を浮かべて冷やしはじめた。

「ちよつと、無視しないでよ！」

とエピロが騒いでいるがとりあえず無視をして卵を氷水の中に入れた。

「えつと。たしか卵は1週間ぐらい冷やしっぱなしだったな。……てことはまさか1週間徹夜して氷の追加をしなきゃいけないのか！おいエピロ夜手伝ってく…。」

エピロの方をふり向きながら手伝ってほしいと言おうとして止めた。エピロが耳を抑えてうずくまっていたからだ。

「はあ…おいエピロ聞けよ。」

「夜遅くまで起きて卵の世話をするなんていやよ！夜更かしは美容の天敵なんだから！」

と力説されてしまった。悪魔って夜行性じゃねーのかよ……。
「じゃあ俺が学校にいつている間だけでいいからやってくれないか？」

俺がため息交じりにそういうとエピロは渋々ながら同意してくれた。

こうして結局一日目が過ぎていった。

数日がたった。俺はいつものように担任の白羽糞ババアからの罵倒を浴び、帰宅した。

「はあく今日も散々な1日だったぜ。」

「うむ、特にあの金剛寺とか言う奴に弁当箱を振られて中身が台無しになる奴は酷かったな。」

「全くだぜ、俺がちよっとモテルの糞野郎にぶつかったただけなのによー。」

そんな他愛もない会話をしていると、エピロが興奮気味に走ってきた。

「高司！見てー！」

「なんだよ？って」

そこには若緑色のドラゴンがまさに今殻を破ろうとしていた。

「うお！生まれそうじゃん。」

「うむ、そろそろだな。」

その様子が何となく鳥に似ていたのかエピロが1つボンノーに質問した。

「やっぱりドラゴンも初めて見た人が親と認識するのかな？」

「む？いやこのドラゴンの知能は人間の9〜10歳程度の知能を持つらしいからそうとも限らんぞエピロよ」

「あれ、ボンノー結構詳しいな。」

なんだかんだやってると、殻の音が激しくなってきた。

バキバキビキ、バキィ!!!

「相棒よ、生まれるぞー！」

ボンノーがそう言った後、数十秒経ってついに完全に孵化した。

しかし生まれたてなのか、うまく立てないみたいだ。それにしても可愛い見た目のドラゴンだ。

「キューン、キュキュ・・・」

「可愛いー！」

エピロが興奮してドラゴンに飛びかかろうとした。

「おい、待てー！」

その瞬間ドラゴンは急に走りだし。そのままエピロは床と濃厚なキスをした。

ゴン！

「ん？なんだアイツ、ビニール袋を掴んだぞ。」

あれには前回カリエルから取り返したエピロの魔力が入ってる。微妙な光を放っていて、夜に本を読むときちようどいいから実はまだエピロに返していなかった。

「そして、玄関から出たぞ。」

「相棒よ、あ奴は中々やるドラゴンだな。」

「そうだなボンノー。」

「あははははははは」

「っじゃないわよ!!! さっさと追いかけるわよ!」

いやーたまにはボケるってのもいいもんだ。てか、ボケてる場合じゃないな、このままだと街がパニックになってしまふ!!! 急いで追いかければ!

「あつ、ちよつと待って鍵閉めてねーや」

俺は鍵を閉めてないのを思い出して玄関にかけ戻ろうとした。

「そんな暇ないでしょうが!!」

呪いで俺に触れられないため、エピロは俺の襟首を日除け傘の取手で引っ張って阻んだ。

苦しい! グエエ・・・

「やめろよ!! 鍵閉めは超大事だつて! 空き巣入られるつて!」

「空き巣なんて、そんなに簡単に入られないわよ、それよりもこっちの方が危険だしね。」

「そうだぞ、相棒ドラゴンとは一歩間違えたら100の村を滅ぼす力を秘めているのだぞ、空き巣の比ではないのだ」

そう言いながらもエピロはどこにそんな力があるのかって言う力で俺を引きずって、俺の体が玄関からドンドン離れていった。

「鍵閉めーーーーー!!!」

俺の悲痛な声が住宅地に木霊した・・・

ドラゴンペアレント 3

〜数分後〜

もう、鍵閉めは諦めたよ……

「てか、エピロ、ドラゴンを探すって言ってもどこに行ったかわかんないんじゃないのか?」

「チツチツチツ甘いわねこんなこともあろうかと発信機を……」

俺はエピロの言葉を断ち切るように続けた。

「発信機をつけたのかドラゴンに!!」

しかしエピロが続けた言葉俺の言葉とは違っていた。

「つけてたらよかつたのにな」

ジャツツリン!!!

俺は思っきり家の鍵を地面に叩きつけた

「おい、発信機つけたんじゃねーのか!!?マジでドラゴンどうやって見つけるんだよ!!?」

「まあ、落ち着くのだ相棒、周りをよく見てみる。」

いつの間にか沢山の店が俺達を囲っていた。

「こ、こ、こは……商店街?」

そう、ドラゴンを追って走ってきた俺たちが辿り着いた場所とはこの街の商店街であった。しかも今は商店街の盛り上げとかで出店が沢山出されていた。すると横でエピロが突然騒ぎ出し

「キヤー!……、沢山飲食店があるわ。ドラゴンを探す前に腹ごしらえをしましょう。」

「おい!……さっきカップ麺食ったばかりだろう!?!まだ食う気か!?!」

どうやら、こいつまた腹が減ったらしい。

「甘く見ないで。私、食べるだけならギネス並みよ!」

しかも、横でどうでもいいことをドヤ顔で叫んでいる。最近家計が圧迫されているのは主にこのアホ大食い悪魔のせいだ。

トゴーン!

すると向こうの方から大きな音が聞こえた。

「おい、相棒。もしかしたらあのドラゴン向こうにいるのでは……?」

ボンノーがポケットから声をかけてくる。

・・・まあ十中八九そうだろう。

「よし行くぞ・・・おい行くぞ〜って・・・エピロ!」

俺が行こうと思っていた矢先、エピロは、飲食店のショーケースに涎を垂らしながら張り付いていた。

言っても聞く耳を持たなさそうなので無理やり連れていこうとする

「嫌だ!嫌だ!嫌だ!〜ご飯食べたい!」

人目も憚らず泣き叫び出した。

「あーもう!うるさい!ドラゴン捕まえた後にでも腹一杯食わせてやるから今は我慢しろ!」

俺が妥協案でそう言うのと、エピロは即座に態度を変え・・・

「本当?!よし!そうと決まればすぐ行くわよ!ほら、何してんのよ?ドラゴンは待つてくれないわよ。」

・・・全く現金なやつである。

そうして、俺たちは大きな音がした方に走っていくのであった。音のした方にたどり着くと商店街の地面の至る所から植物が生えそれにびっくりして人がいなくなった店の商品をドラゴンがむしゃむしゃと食べていた。さっきの大きな音は硬いアスファルトをドラゴンが生やした植物が壊した音だったようだ。

「なあこれってやばくないか」

「・・・どういうこと?」

「アスファルトを植物を突き破るって普通あり得ないぞ。こんな状況誰かにネットにアップされたりしたら大騒ぎになるぞ」

しかしエピロは落ち着いた感じで、

「壊れたものは魔力なんかでなおすことができるし、それこそ女神とかなら死人も生き返らせることもできるわよ」

といいだした。

つまりエピロがいれば壊れた店なんかの心配は必要ないというわけか。

「ってことはあのドラゴンをさっさとつかまえて気付かれないうちに

エピロが商店街を直して逃げればいいんだな」

そうつぶやいてドラゴンをつかまえる作戦を考えていると

「私が商店街を直すの!?!結構疲れるからやりたくないんだけど…」

とエピロが文句を言ってきた。

「よし。ボンノー賢者タイムでいこう」

「だが相棒、あれは相棒の欲望が必要だぞ。そんなに簡単に必要な欲望をためられるのか?」

「その本屋でエロ本でも見てれば大丈夫だろ。エピロ、ドラゴンが逃げないように見張つといてくれ」

エピロはまったく話を聞いていない俺たちに何をいっても無駄だと思っただのかため息をつきながらも了承してくれた。

ドラゴンペアレント 4

……十分後

「よし、今の俺ならいける！いけるぞ！」

「さあ、いくぞ相棒。賢者タイムだ！」

エピロが見張っていたおかげでドラゴンが食べることに集中していたからかもしれないがドラゴンはまだそこにいた。

賢者タイムの効果で身体能力を向上させた俺はあっさりドラゴンを捕獲することに成功した。その後エピロを説得して商店街を直させて、俺たちは帰宅した。

「はあく、もう苦労させやがっ……」

俺達が家の前に着いた時だった。

まず玄関が開いていて、靴とかが散らかっていた。もしかして空き巣に入られたんじゃないか……。

ドサツ

ショックでドラゴンを落としてしまった。

「ピキヤー」

ダダダダダダ！

しまった、また逃がしてしまった。だがそれどころじゃない！

「あー！ちよつと何をして……」

「エピロ!!!ドラゴンを頼む！」

「え？わ……わかったわ！」

エピロは、羽ばたいてドラゴンを追いかけた。さっそくアスファルトの破壊音が向こうから聞こえた。

「相棒よ、心してかかれ。中から何かしら強い力を感じる。」

ボンノーが俺に助言してくれる。もしかして天使とかじゃねーよな……。俺は慎重に玄関に入った。

「うーん、中々の散らかりっぷりだな。」

俺がそう言うとき家の奥から物が落下する音が聞こえた。

ガランガラン

「キヤー」

ん？女性の声もするぞ。

なんかストーカーから逃げてきて、家に隠れたのかな？

なんて推測をしているとどうやらあちらからこっちに歩いてくるようだ。

俺はボンノーを握りしめ、さっきのエロ本の内容を思い出していた。

「そこでとまれ、お前は何者だ？」

「ふえ〜違うんです〜、あたしは道に迷っただけなんです〜。」

「は!?!?!」

俺はつい間抜けな声を出してしまった。て言うか結構可愛い系の女子だな、おい。後、おっぱいでかいな

「あ〜家で何をしてたんですか。」

よくよく考えると、挨拶なら家をこんなことにしない・・・もしかしたらコイツは天使でドジっ子キャラを演じて俺を騙しているのかも知れない。ボンノーが強い力があるっていつてたし。

「あ！すいません！道を聞こうと思ったら足を滑らせてしまって、それで落ちた物を片付けようとしたらさらに悪化しちゃて、その・・・。」
まだ疑いが晴れた訳ではない。

「お前は天使か？」

「天使？違います、あたしはプロロです〜」

プロロ？外国人か。

もしかすると本当に只の人間かもしれない。

俺は天使かどうか確かめるため最終手段に移った。

それはボンノーを対象者に近づけ、もし天使ならボンノーに埋め込まれている玉が赤く点滅する。

俺はボンノーを近づけた。

「ヒィーやめてください！あたしは食べたって美味しくないですー！」

しかしボンノーの玉はどういうわけか緑に点滅した。

(相棒よ、コイツは悪魔だ。)

「悪魔……って呼び出してもないのに悪魔が人間界に来ることがあるのか？」

(知らん!!)

俺の疑問がボンノーから力強く拒否された、その間にもプロロと名乗るこの悪魔は何もないところでこけそうになったり、カエルが顔にジャンプしてきたり面白いことになっている

「大丈夫ですか？」

思わず声をかけてしまった

「はや、大丈夫ですうーひゃわー」

こちらに来ようとして顔面にクモの巣がかかってしまった、てかあんなに立派なクモの巣気づかなのか……

「もう、無視していいかな？」

俺はボンノーに小声で相談する

(うむ、ドラゴンの方が大事であろうな)

白い光が収まっていく賢者タイムが終了したようだ、つか今回の賢者タイムは、かなり温存しながらだったのでかなり長かった。

「まあ、ひよーちゅきやうによういきびしゅいーとおみよーぞはいぼー(もう、今日使うのは厳しいと思うぞ、相棒)」

ボンノーが何を言ってるのかはわからんがちよつと絶望的な発言をしたと感じたね、だからプロロさん？をおいてドラゴン探しに行くことに決めた、なんかプロロさんはホースで体グルグル巻き出しまあいいよね

「じゃ!!」

俺はなんか、関わりとこつちまで大変そうなプロロさんを見捨て走り出した

「ちよ、ちよつと助けてよおー」

なんか、悲痛な声が聞こえたが無視して先へ進む

く数分後く

ボンノーが少し回復しエピロたちを追って辿り着いた先で俺が見たのは、大手の定食屋で明らかにデカイ凶体をしている人物とカレーの大食い対決をしているエピロの姿だった。

「おい！何してんだよ!？」

堪らず俺はエピロに叫んだ。するとエピロは何食わぬ顔で、

「あれ？早かったわね。ドラゴンならあつちに飛んでったわよ」

「いや、そうじゃなくて！お前はこんなところで何してんだ、て言っただよー！」

「え、大食い対決だけど？」

エピロは、何か問題でもみたいな顔をして俺の質問に答える。

「……こいつ、元が良いだけにこんな顔しても可愛いな……いや、いや、そうじゃなくて！」

「何で大食い対決に出てんだて言っただよ!？」

「ふん、愚問ね。それは、参加料だけで好きなだけ食べられるからよ！」

あーもうこいつダメだ……

俺は、もう皿を10枚以上も積み上げている馬鹿大食い悪魔をほつといて、ドラゴンが言ったであろう方向に走り出した。しばらく走り続けると、植物があちらこちら生えていた。

追跡に関しては、植物追いかければ最終的にドラゴンにたどり着くから、その辺は楽だな……。

ドーン！ボゴー!!!

音が近くなってきた。そろそろだな……。

「アイツ空を飛んでやがるな。」

だが俺の目には、飛行物体が二体確認できた。

「む？相棒よ、今度こそ本当に天使らしいぞ。」

ボンノーの玉がわずかに赤く点滅している。

「うおー！こんな遠くからも反応するんだな。何をしているんだ？」

ドラゴンと追いかけてっこしてるように見えるぞ。まさか……。

「相棒よ、おそらく天使はドラゴンを捕獲するつもりらしいぞ。」

マジか！それは阻止せねば！と言うかアイツは天使からくれたんじゃないのか？俺は再びエロ本の内容を思い出しながら、飛んでいる物体の方向へ走った。

ドラゴンペアレント 5

「ギユキイー！キイー！」

ドラゴンは必死に植物を操って対抗する。しかし天使は華麗に植物の鞭とかを避け、ドラゴンに接近する。

「マズイー！捕まるぞー！」

後少して奴らの所まで追い付くのに！天使の手がドラゴンに触れた。

「畜生！連れてかれる！」

必死に抵抗するドラゴンを押さえつけた所でようやく俺の存在を確認できたらしい。天使は軽く笑い、飛びたとうとした。

「させるかよー！」

俺はボンノーを地面に突き立てた。ボンノーの大きくなる能力を応用して高い所まで行く方法だ。

俺は空中にいる奴の足首を掴もうとしたが俺の手は弾かれてしまった。

「ゴイツ、女だ！」

畜生！このままだと連れてかれてしまう……。その時だった。

ピシャーン!!!

強烈な音と光が天使を包み込み、そしてドラゴン離れた……。落雷だ！運がいいぜ。

落ちてくるドラゴンを慎重にキャッチし、俺は地面に着地した。

「気絶してるな。一旦物陰で寝かせておこう。」

まずは天使を片付けねーとな……。俺はボンノーを握りしめた。

ビシユシユシユ!!!

身構えると同時に上空から槍のような物が飛んできた。天使は俺を敵とみなしたらしい……。

それにしても相手が空中にいるとやりづれーな……。なんて思っていると二回目の槍攻撃が来た。

「やべー！避けれねー！」

ギイン！

「え？何？ってプロロじゃない！久しぶり！」

俺はエピロに突進したが、よくよく考えると俺は女にさわれないんだ。しかも俺の事無視しやがって……。

まあいい、ドラゴンを追うしかないそう思い俺は走り出した、後ろの方ではまだキャツキャツしてる様だ

「クソー働けよー悪魔共があー!!」

俺は怒りを走る力に変えてドラゴンを追う。

走りながらボンノー無しでドラゴン捕まえられなくねーかなんて思っているうちに緑の元となっているモノの姿を捉えた。

「見つけた!!」

俺はドラゴンにタックルを仕掛けた、ドラゴンは気づいてない、いける!!

と思った瞬間目の前が茶色ものに覆われた、

ガツバターン

一瞬で木が生えたらしい思い切りぶつかった。

「痛てえ」

周りを見る、緑……つかジャングルだ。

「(っ)ど(っ)？」

まさかの近所で迷子、小学生でも中々おこらない状況に陥った、落ち着け俺、こんな時こそ冷静になるんだ……。

冷静に考えてこれ普通に明日のトップニュースだよ？ヤバイなこれ……天使との戦いの比じゃない

「ボンノー、どうすればいいと思う？」

「そーだな奴はこれだけ魔力を使っているのだそろそろ魔力切れになるはずであろう。」

「そうか、魔力切れかとりあえずこのジャングルから抜けて森の先頭にいくか!!」

そうと決まれば……アッ!……自分迷子でしたね……。

「何してるのよ、高司」

上からエピロの声が聞こえた。プロロさんと一緒に飛んでいる。

「何してんだよ!？」

「このジャングルを片付けてんのよ、てかあんたドラゴン追ってたんじゃないの?」

「追ってたけど、木にぶつかって」

「情けないわねー、こっちが必死に森をどうにかしてるのに・・・」

「さっきまで飯ガツついてたじゃねーかよ!て言うか修復は大変だからしたく無いみたいなこと言ってたじゃねーか、なんで森かたずけてんの?」

「それは、プロロがいるから修復は彼女に任せてんの」

「そ、そうですう」

プロロさんがいきなり説明を始めた

「あたし達は、終わりと始まりの悪魔と呼ばれてまして、エピロが終わりを、あたしが始まりを担当してるんですねえ、故にエピロが森の消滅を、あたしが町の修復を担当してるんですう」

「なるほど、そ〜いうね!!」

事情はわかった、今森が出来るところに行けばドラゴンはいるということだ。

ドラゴンペアレント 6

森の消滅と街の修復とエピロとプロロに任せて、ドラゴンを駆け出した俺たちを待っていたのはまたしても森だった。

「おい、ボンノー、また森が出来てるって事は……」

「ああ相棒、ここにいるのであろうな……例のドラゴンは……」
「じゃあ、行くか」

覚悟を決めた俺たちは早速、森の中に入った。

しかしまあ、森と言ってもさほど大きくは無い。ボンノーが言っただようにドラゴンの魔力切れが近いのだろう。

案の定、ドラゴンはすぐに見つけることが出来た。

ドラゴンは木の上に座っており、こちらにはまだ気づいていないようだ。

(……よし、また逃げられるのも面倒だし、このまま後ろから近づいて捕まえるか。)

俺がそんなことを考えながらドラゴンの背後へと近づいていく。

そしてもう手を伸ばせば届くということだ

「おーい、たかしー、どっこー」

「たかしさんー、どこですかあー」

大声を出しながら飛んでくる馬鹿2人が見えた。

おいー！なんでこんなタイミングでくんだよ！

やっぱりと言うべきか大声に気がついたドラゴンは俺を見つけてすぐに翼を広げ飛び上がった。

「チィ、こうなりや実力行使だ。ちよつと痛いかもしれないが我慢しろよ。」

俺はボンノーを抜くと構えた。

「相棒……やるか？」

ボンノーは少しノリ気だった。

「ああ、これ以上商店街の皆さんに迷惑かける訳にはいかねーし、何より……これ以上この追いかけっこを続けるのは面倒くせーからな！」
「後半が本音だな、それこそわが相棒よ。」

だがそうこうしてるうちにエピロとプロロが俺たちの所までたどり着いた。

「ふうやつと見つけた。ちよつと、何してんのよ。」

「そうですよおゝ随分探したんですよおゝ。」

2人は近くの木に着地すると俺に話しかけてきた。

「て言うか、あれドラゴンじゃない。何してんのよ? さつさと捕まえなさいよ。ん、なんかこつち向いてない?」

イヤ、主にお前らの所為でこうなつてんだよ。

「それにあんた、なんでボンノー構えてんの? …まさか!? ドラゴンと!? やめなさい、ドラゴンが可哀想じゃない!」

「そうですよおゝ。それはちよつと引きますうゝ。」

イヤ、だからね? 君たちの所為でこんなつての!

馬鹿2人をほつといてドラゴンに突つ込もうとしたその瞬間だった。

「おい、嬢ちゃんたち、お代を貰ってないんだか?」

…向こうからおっさんが走ってきた。

話を聞いてみると俺が去った後、

森の消滅と街の修復を終えたエピロとプロロの2人は俺たちを探す過程で腹が減り、

近くのファミレスに入ったはいが2人で店のメニューを全部平らげた挙句に、

お金を持つていないことに気付き相談した結果、俺を見つけてお金を貸して貰えば良いと考えたらしく、トイレの窓から2人して抜けだし、此処まで飛んできたらしい…。

俺はとりあえずお金を払い、頭を下げた後、何食わぬ顔でいるポンコツ2人組の頭をはたくとひたすら謝らせた。

ひたすら頭を下げている様は、どこぞの汚職政治家か粉飾決算をやらかした企業の役員さながらである。

こういうときだけ偉い人の真似ができてもちつとも嬉しくねえ…。 だったら一生庶民でいいわ。

2人の誠意が伝わったのか、おっさんは特に怒ることもなく帰っていった。

最後に残ったのは、ボンノーを構えている俺とひたすら頭を下げている悪魔2人と、此方をずっと見ているドラゴンだけだった。

ちなみにこの騒動中ドラゴンは鳴きも逃げもせず、ずっとこつちを見てた。案外良いやつなのかも。

・・・さあ、気を取り直してドラゴン捕まえるか。

なんとも締まらない空気の中、ボンノーを構えた俺と空をホバリングしているドラゴンは向き合った。

・・・そう言えば、あのおっちゃんこの状況見て何も言わなかったな。

ドラゴンペアレント 7

おっちゃんは何となく気になるが、今は目の前のドラゴンだ、これ以上暴れられると流石に怪我人が出るのではと思うし

「やるぞ、ボンノー」

「おう、相棒!!」

俺はボンノーを刀背打ちが出来るように構えドラゴンに襲いかかった、しかしドラゴンは二度も捕まっているためか植物の鞭を出しながら逃げていく

「クソっ! ツタが邪魔で追いつけない、」

俺は鳶を切り刻みながらドラゴンに向かっていくがあと一歩で届かない!

ビビビビく!!!

奮闘していると俺の背後から奇妙な音と共に真っ直ぐと光線のようなモノが現れ、鳶を華麗によけながらそのままドラゴンへと命中した。

次にそれはドラゴンの周りで瞬く間に鳥籠のようになってしまった。

「へえ?」

何か拍子抜けで変な声が・・・

「何してんのよ、とろいわね。」

後ろでエピロが溜め息をついてる。あのビームみたいなのはエピロが撃つたらしい。

「そういうのがあるなら一番最初にしろおお!」

俺の魂の叫びがここ一帯に響き渡った。

「だって、これ疲れるんだもん」

エピロがビームでできた鳥籠のようなモノを持ちながら答える。

その頃プロロさんはなんか見たこともない動物、多分犬か狸みたいなのに襲われている所だった。

「さあ、帰るわよ」

ひと仕事終えて満足したのかエピロは植物を消してから家の方に

歩き出した。

「プロロさんはいいのかよ、友達なんだろう？」

俺はなんか良く分からない犬みたいな動物に襲われているプロロさんを横目に見ながら言う。

「いいの、いいの、いつものことだから、関わりと巻き込まれるしねー」

なんか親友ぽいエピロまでそんな反応なのか・・・

なんか可哀想だなプロロさん・・・まあ俺も置いてくけど・・・

そう思い俺もエピロを追いかけた。

「こうしておけば逃げられないだろ」

俺はつかまえたドラゴンを首輪と鎖でつなぎ逃げられないようにしておくことにした。

「首輪の強度が心配だし、魔力なんかで強化できないか？」

「そういえば、この子も持っていちやった私の魔力はどこにあるの？」

そういわれて気づいたが最初につかまえるまえからこのドラゴンは魔力をもっていなかった。

「まさか、回収し忘れた、とかいうんじゃないでしょうねえ」

エピロが青筋立てながら詰め寄ってきた。するとボンノーが

「まずいな。このままだとあのカリエルだったか…が復活してしまうぞ。あいつらはエピロの魔力から生み出されたものだからな」

と、実に面倒なことになりそうなことをいつてきた。

「つてことは魔力を天使にとられる前に回収しなきゃいけないのか」

「そうなるな。一度倒されたのだから、ある程度強化もしてくるだろう。」

もしかするとまたくるようなふりをしておいてその後私の爆破でやられたので恥ずかしくてもう出てこないかもしれないがな」

「でもせっかくのふりを台無しにされて怒り狂って襲ってくるかもよ」

「もしかするとほかの天使と合体してくるかもしれない」

と3人でカリエルの予測をあれでもないこーでもないと言いつている。

「うんうん、確かにお前らの言う通り・・・で何でプロロさんがここに

いるんだあー!?」

「とりあえずエピロの魔力を探してみよう」

そうして3人と一本でエピロの魔力を探しに行くことにした。

ドラゴン逃がさないようにつれていくことにした。

ザツザツザツ

俺達は、ドラゴンが暴れた場所に俺、ドラゴンとエピロ、プロロの
二手に別れて行った。俺はビニール袋が無いか、注意深く探した。

探して探して探した挙げ句に探したが、結局魔力は見つからなかつた。

俺が探し終わると同時にエピロ達から連絡が入った。

あちらも見つからなかったらしい。

「不味いな、これは天使が先に見つけて回収した可能性が高いぞ……」
「ああ、どうやらそのようだ相棒よ……これは予定を変更して急いで
天使を追いかけた方がいい……。」

だが今日はもうボンノーの力を使いすぎて、賢者タイムは使えない……
どうすりゃいいんだ？俺が考えてると空から女の高笑いがか
こえてきた。

「オーホッホッホッ！」

ヴン!!!

重い重低音が鳴り響くと同時に周りに結界が張られた。

「しまったー！」

どうやら向こうから直々に俺をぶちのめしに来るらしい。

ドラゴンペアレント 8

「これはどういうことだ？あんたの目的は魔力の回収だけじゃないのか？」

奴は空中に浮いたまま答えた。

「そうですね、本当ならそうしたいところですけど貴女方は後々ワタクシ達の邪魔になりそうですので……ここで始末しときますわー！」

「あんた、誰だ？」

俺は、空中にいる女に率直な感想を述べると、

「まあ、先程御会いした相手の顔も忘れるなんて、どういう教育を受けているのかしら？」

「相棒よ、どうやらこ奴はさっきの天使らしいぞ。」

ボンノーがそう言うと、奴は笑いながら自己紹介をした。

「オーホツホツホツホツ！その通りワタクシの名はプリム。早速ですが貴方のお命貰い受けますわ。」

そう言うとプリムはこちらに向かって攻撃を仕掛けてきた。

「おい、相棒。我はもう賢者タイムは使えぬ。この状態で奴の相手をするのは少々骨が折れるぞ。」

奴の攻撃を弾きながら移動している俺に向かってボンノーが話しかけてきた。

「そんな事は分かってるよ。」

だが、今日は戦えませぬ。はい、そうですか。で帰してくれる様な相手じゃねーだろ。」

俺だってこのままでは、勝機が微塵も無い事ぐらいは分かっている。だが、この状態でこれ以上の戦闘もできないだろう。

しょうがないあの手を使おう。

「おい、ボンノー。秘策がある、俺の動きをサポートできるか？」

俺は、ボンノーに俺の体内に魔力を送り動きを強化出来るか聞いた。

「うむ、できない事は無いが、精々ちよつと速度が上がる程度だぞ？」
「十分だ。やってくれ。」

俺はボンノーに頼み体内に魔力を送り身体能力を強化した。
「おい！プリムとか言ったな。これでもくらえ！」

俺はステップを踏みながらプリムへと突撃すると、奴に向かってその辺の砂をぶん投げた。

そう、あの手とは目潰しである！

我ながら天使とはいえ、女の子に手荒だとは思うが、こちらら命掛けだ甘い事は言つてられない。

「・・・相棒。流石に女相手にそれは卑劣過ぎぬか？」

ボンノーが聞いてくる。

「うるせえ、この状況でなり振り構つてられるか！」

俺はボンノーに言う。

「聞け、ボンノーよ。「青春ウエイwwww」なんて馬鹿なリア充がはしやぎ過ぎているような部活やサークルは、大抵しょーもない騒ぎをやらかして潰れていく。」

その轍をここで踏むわけにはいかない。

つまり、調子に乗つてその場のテンションに身を任せると、とんでもない痛手を負うて事だ。

本当いいお手本になつてくれるよ、リア充（笑）は。

まあ、詰まる所なにを言いたいかと言うと、下手な橋は渡らないて事だ。」

イノチダイジ、オレウソツカナイ。

そうして、プリムに目潰しを食らわせた俺は家への道を走った。

因みにプリムが張った結界は、奴が現れてすぐ逃げて行つたエピロとプロロさんが壊していた。

あいつら、天使が現れた瞬間、俺を置いて逃げるなんて悪魔かよ！

・・・いや、そういやあいつら悪魔だったわ・・・。

「俺を置いていくくんじゃねえよー！」

「だって、相手は天使よ。あいつらに私は攻撃できないし、あつちの攻撃を受けたら死んじゃうかもしれないじゃない」

そういえばそうだったこいつは神に関わるものに攻撃できないんだった。

「俺を置いて逃げたことに関しては何もういいや。ところでプロロは？」

俺がそう聞くとエピロは滑り台の方を指さして

「あの子ならその影で震えながら隠れてるわよ」

そういわれて滑り台の方をみてみると確かにプロロがふるえているのがみえた。というより丸見えだった。

「隠れるの下手だな」

「あの子いつもかくれんぼで最初にみつかるタイプなのよ」

「連れて行ってやれよ！」

俺がそう言うと、エピロはしぶしぶプロロを持ち上げて直ぐ様その場を退散した。

「痛い！痛いですわー！」

結構目潰しが効いてるらしい。俺はだめ押しに砂ボコリを巻き上げながら走り、結界が閉じる前に退散した。

そして息が切れる頃には見覚えのある建物の前についていた。

俺はプロロさんによって散らかった玄関をなんとか乗り越えて、自分の部屋に向かい、部屋の真ん中にドラゴンを置いた。やっと一息つけるぜ。

「ふ〜こいつ・・・名前どうするかな？」

「そうね〜・・・」

「バタンキュー」

俺は鎖の首輪をドラゴンにつけ、檻から出した。

するとドラゴンは真っ直ぐとエピロの方へ向かい、甘えているような行動を取った。

「む？エピロよ、もしやそのドラゴンはお主になつたのではないかな？？」

「え？？」

エピロは顔を赤らめ、素直に喜んでるらしい。

「エピロになついたかくじゃあ名前もエピロにちなんでつけるとする

か。」

「え〜いいの?」

「あーそうだな〜エピロとドラゴンだからエピゴンとか?」

そう言うどボンノーから間髪いれずに

「ダサイ!」

と一瞥された。なぜだ!?

次に、このやり取りの最中に起き上がったプロロさんが名前を考え
た。

「そうですねーエピロは終わりを司る悪魔だから・・・」

おお〜〜〜?

「終わりを司るドラゴン!略してオワンとかどうですか?」

「ダサイ!」

プロロさんの名前はボンノーとエピロから却下された。結構いい
名前だったのに・・・。

「もう!ちゃんとした名前にし・・・」

「エンド・・・」

ボンノーがエピロの言葉を遮った。

「エンドだ。終わりを司るのだろう?」

お・・・おおお!エピロも納得してる。流石ボンノー!

「よし!名前はエンドで決定だな!お〜よしよし」

そう言って俺がエンドに手を差し出すとエンドはおもいつきり俺
の手を噛みついた。その痛みで俺は思わず鎖を握っていた手を離し
てしまった。

「あー!」

ダダダダダ!

ドラゴンがまた逃げてしまった。

ヤバい!凄いやつこっち見てくるんだけど!

とりあえず追いかけるしかねえ!

「まてえーエンドー!」

こうして俺たちにドジツ子とハチャメチャな仲間が加わった。

余談だがプロロさんは俺の家に居候することになった。

第三章

ダーティーフエイト 1

こんにちは、俺の名前は御手洗 雲高（みたらいうんこう）
高校生で高司の幼馴染みでもある。

そして奴に途方も無い恨みを持っている一人の男でもある!!

小学生や中学生の時は割と仲良くしていた、しかしある日あの事件のせいで俺のあだ名は、・・・俺のあだ名はあなあ!!!

『ウンコマン』になってしまったのだー!!

許すまじ高司！絶対に許さない、憤怒バーニングサンダーファイヤーウルトラスーパーローリングストームグレートファツキンストリームDXである！

だから俺は図書館に何故かあった、【超強力悪魔召喚術、魔王編】つてのを借りて、悪魔を呼び出し奴を懲らしめる事に決めたんだ!!

だがそれからは大変だった、血液を1リットルため魔法陣を書くとか、蛇を20匹捕まえて四隅に5匹ずつ置くとか色々やった・・・。

そして遂に俺は魔王級の悪魔ベルゼブブの召喚に成功したのだ!!!
ウンコマンというあだ名になってしまった俺に蠅の王が召喚されるのは、なんとなく不条理を感じるがこれで百人力だ!!

「ハツハツハ！アツハツハツハ!!ゴホゴホッ！ゴホ」

「何してるんだい、雲高君」

「ああ、高司の苦しむ姿を想像して高笑いしてただけだ。」

「君もよくやるね、というか憤怒の担当は僕じゃなくサタンがするんだけどね・・・僕の担当は暴食だから」

「そうだな、確かにお前は小さい体のどこに入るんだってぐらい食うし俺の仕送りは全部お前の胃袋のなかだしな、・・・」

「その分は君の願いを叶えてあげるから、投資だと思つて我慢してよ。」

しかしこの町は何だか色々大変な事になってるね……。」「ん?、どこが大変なんだ、こないだちよこつと森がいきなり出て消えたみたいな都市伝説が俺の友達の間で出てたけど、所詮都市伝説だろ?。」

「それが大変なんだよ、雲高君、それは多分僕達悪魔または人間以外の魔獣、そして天使が関係していると思うんだ。」

「はあ、悪魔の存在もあんまり信じてないのに、魔獣や天使なんかもいるのか……。一部のエリートたちは魔法を使えるみたいなのは聞いたことがあるけど、世の中わかんねえな、

ま……。俺は高司に復讐できればいいけどね!!」

「じゃあ、その高司君とやらに会いにくとするかい?」

「んーアイツとは違う高校だし、家はわかるけど上手く会えるか?」

「その点は大丈夫だよ、僕の蠅をこの街に放つてあるからね」

「そうか!じゃあ明日、学校の放課後あたり会いに行つてギャフンと言わせてやるぜ!!」

「そう言えば、雲高君、何気に流したけどこう見えても僕は魔王級の悪魔なんだ。」

「ああ、そうだな。何を今更?」

「いや、分かっているならいいんだ。で、君はさつき僕のこと。お前”って言ったよね?」

「え、そうだった?」

「うん、言った。こう見えても僕は魔王級の悪魔なんだ。だからさ、こう敬意と言うのをもって接してくれると嬉しんだけど。」

なんだこいつ?さつきからやたら魔王級の悪魔を連呼してんな。

「つまり?」

「いやだから、お前って言わないでよ。」

「どんだけ前の話してんだよ!なんだお前!魔王級の悪魔のくせに結構根に持つタイプか!」

「違うぞ!ただ僕は魔王級の悪魔だからそれに合わせた呼び方をだ

な・・・」

「じゃあなんだ？魔王級の悪魔（笑）とでも呼べばいいのか？」

「いやなんだよその魔王級の悪魔（笑）って!?せめてベルゼブブでしょ！呼び捨てをする前に（笑）てなんだよ！絶対に僕をバカにしてるでしよー！」

「してねーよ。別に見た目小学生だから、何こいつほんと魔王級の悪魔　ベルゼブブ様（笑）とか思ってねーからよ。」

「いやしてるじゃん！絶対バカにしてるじゃん！いいだろう、表に出ろ！僕の力見せてあげるよ！」

「ハン！たかが小学生如きに負けるんでも？」

「あくまた言ったー！僕のこと小学生ってまた言ったよー！僕は魔王級の悪魔ベルゼブブなのに！」

こうして、何気ない一言から始まった俺とベルゼブブの喧嘩は庭での殴り合いへと発展した。

ちなみに最終的にお隣さんの

「うるさいよー！何時だと思ってるんだい！」

の一言で俺とベルゼブブの喧嘩は終わった。あと説教された。ベルゼブブ涙目だった。

・・・ほんとにこいつ魔王級の悪魔か？

ダーティーフエイト 2

翌日

いざ行かん新天地へ!

……どこの海賊王だそれは。麦わら帽子被った人?

いや、話が逸れたな。

御手洗 雲高だ昨夜、喧嘩した俺とベルゼブブだったが、仲直りして今、高司の家へと向かってる。

「そう言えば雲高君。」

「ん?なんだ?」

「何故それ程、高司とやら恨んでいるんだい?」

「あーその話か。そうだな。折角呼び出した上に此処まで付き合っただけで、話しとくか。」

そうして、俺はベルゼブブに俺が何故、高司を恨んでいるかを話し始めた。

「あれは小学校のことだった……俺がウンコマンと呼ばれるようになった日、その日の給食のメニューはキーマカレーだった。

俺はこのときはまだカレーのことが好きだったんだ。

俺はカレーを食べることを楽しみにしながらお椀にカレーをついでもらい後は席について合図を待って食べるだけだったんだ。

平穏な給食の時間になるはずだった。

そう、あいつが、高司 蒼一郎が俺の後ろでカレーの入ったお椀をもつてこけるまでは!」

そう言いながら俺は拳を固く握りしめ、そのまま壁に打ちつけた。

「あいつはカレーの入ったお椀をもつてこけたばかりか、お椀の中に入っていたカレーを俺の尻にぶちまけたんだ!

そして、あろうことか俺の尻にぶちまけられたカレーをみてだれかが俺にこういったのさ

「ウン……雲高がウンコ漏らしたみたいになってるぜ!こりやあだ名はウンコ改めウンコマンだな!アーツハハッハ!」

ってな……って聞けよ!」

俺が振り返るとベルゼブブは話に飽きて近くの部屋からもつてきた漫画を読んで笑っていた。

「ああ、うん、聞いてる聞いてるちゃんと耳には入っているから続けて」

「ちゃんと聞けよー」

そういつて俺が漫画を取り上げるとベルゼブブは渋々ながら話を聞く姿勢になった。

「よし。話を戻すぞーそれが原因で俺はウンコマンと呼ばれるようになったんだ！

あいつがいなければ、ウンコマンなんていう汚らしい呼ばれ方をされることもなかった！そう思わないか!?

ベルゼブブ!!?」

「それって只の逆恨みじゃないかなあ。」

「そうだとってもあいつが俺に恥をさらさせたことには変わりないし、逆恨みでは断じてない！」

俺がそう力説しているとベルゼブブの放った蠅たちが帰ってきた。

その内の一匹がベルゼブブの耳元に止まり、なにやらメッセージを伝えているようだった。

ベルゼブブが数回頷くといよいよ出発となった。

「さあ、行こうか雲高君」

「ああー」

俺の復讐劇が今始まる！

ダーティーフエイト 3

よっ！俺高司 蒼一郎。とある事情で悪魔と住んでいる高校生だ。最近よく蠅を見かけるなあゝゝゝ俺はそんなに臭いのか？まあいいや、今日も良い天気だなあゝ

「ふんふんふんふーん♪」

俺が鼻歌を機嫌よく歌っていると、1階から大きな音と女性の悲鳴が聞こえた。

ガシャーン！ドンドン！ガラガラガラ！！

「キヤーー！」

「何の騒ぎだ!?!」

俺は直ぐ様1階へ向かった。

そこにはひたすら皿や容器、コップなどが散らばった台所が広がっていた。

「あつおはよー高司」

「いや、おはよーじゃなくてねゝゝゝ何があつたんだよ」

俺はこの状況下、平然としている悪魔ゝゝゝエピロに聞いた。

「んー、いつも通りよ、プロロが入ってきたんだけど、なんか蠅見たいのが5、6匹入ってきてプロロが驚いて魔法で消そうとしたらこの有様よ、蠅はもう居なくなってるけどね」

「そうなのか、これどうすんだ??」

俺は明らかに通常では起こらないであろう破壊の後を見ながらそういった。

「あーそれは、プロロがどうにかするんじゃないのー??あの子再生魔法得意だし」

「ゝゝゝ俺は学校に行く後は任せた!!」

俺はそう言つて壊れた部屋から外に脱兎のごとく逃げ出した。

「ふああゝいつてらっしやいゝ」

エピロは三度寝に入るようだ、学校から帰って来るまでには直つて欲しいなゝゝゝ部屋

そう思いながら俺は学校へ向かった。

「学校にて〜」

「鈴鹿、おはよう」

「おう、おはよう蒼一郎。そういや最近お前の周りだけ蠅が飛んでるんだが、俺は飛んでるんだ？」

「俺にもわかんねー、臭いのかなんか傷つくな」

「そう言っている間にも蠅がブンブンと俺の近くを飛んでいるのが見える。」

「蠅取草でも買わなきゃダメかな…」

「キーンコーンカーンコーン」

「お、チャイムなったんで俺は席戻るわ、じゃあな鈴鹿」

ガラガラ

「おう、みんな今日も全員いるな？、出席とつぞ」

「白羽先生が出席を取り始めた、今日は罵倒される事はないみたいだな、」

「白羽先生は普段は人一倍俺に対して厳しいが何故か3ヶ月に一回ほど俺に何も言わないにしろ優しい時が来るこれを俺はデレ期と呼んでいる」

「あれから特になにも無く放課後になった。」

「俺は帰る準備をしていた。そこに鈴鹿がやってきた。」

「おーい、蒼一郎。白羽先生がお呼びだぞ。また何かやったのか？」

「鈴鹿は、教室に入ってきたから俺に声をかけてきた。」

「いや、なにもしてねーよ。なんで、何かしたこと前提？」

「なんでって、いつも白羽先生に馬鹿にされてんじやん。蒼一郎」

「いや、あれには山よりも高く、海よりも深い訳が…」

「元々あれは呪いのせいだ俺はほぼなにもしてないんだけどな」

「おーい、なんか目が遠くなってるぞー？」

「俺がそんな事を考えていると鈴鹿が声をかけてきた。どうやらまた、目が遠くなっていたらしい」

「とりあえず行ってくるわ、職員室。」

「おう、行ってこい。俺は帰るけど」

「待つてくれないのかよ！」
時々、鈴鹿が冷たいです……。

『青春は犠牲で出来ている。』

そして、世界の誰かの成功はまた、世界の誰かの犠牲で出来ている。世界にいる人間、青春を全うする学生は周りの誰かを踏み台にして、苦しむ下層のカーストを尻目に上へと登る。

まるで、トーナメントのようだ。しかし、青春はトーナメントとは違う。

なぜなら それは、敗者がいるからと言って、勝者がいると はないからだ。

誰かを蹴落としたとて、頂点 がないのだ。

貪欲に上へ上へと誰かの幸せを砕きながら登ろう とする姿は地獄の亡者を見ているようで、はつきり言つて気分が悪い。

蜘蛛の糸にもあるように、人の欲に際限などないのだ、埋まらないパズルのために他者を貶めることのなんと醜いことか。

それならばいつそパズルなど捨ててしまえばいい。トーナメントなど棄権してしまえ。

そして早々に捨てた私にはあれらがいつそ哀れにも見える。

ベラベラと騒音問題だの工事現場がどうだの喧しいグループの横で、迷惑そうな顔をする生徒を見た時に猿のように叫ぶ者共に憐憫の情が湧き上がった。

「人の迷惑も考えられずに騒ぐ貴様らよりは、ちゃんとご迷惑をおかけしますと謝る工事現場のほうがマシなのだがな」と。

青春を謳歌するのはいい。

が、その青春が誰かの 涙と汗の上に成り立っていると知ったら彼らはどう思うだろうか。

そんなこと知らないと言うのだろうか、それとも騒ぐのを止めるのか。結論に入ろう。

他人の事も考えられない人間は誰もいない場所で誰にも迷惑を掛
けずに碎け散ればいい。』

場所は変わり職員室

俺は白羽先生の前に立っていた。

で、さつき白羽先生が読み上げたのは先週 の授業で俺が書いた作
文『高校生活を振り返つ て』だ。

眉間の皺を解しながら白羽先生は難しい声を上げる。そしてこ
う言った。

「これのどこが高校生活を振り返っているんだ」

「そして早々に、から全部ですな」

間髪入れずに答える。

すると、さらに難しい顔を してため息を吐いた。

「ううん、まあ、間違つてるとは言わないがどうしてお前はこう・・・
こんな極論 になるのやら」

「これが間違えてないからじゃないですかね」

「ぐ、屁理屈を・・・」

「屁理屈つて筋道の立っていない理屈のことだった と思うんですけど。
俺、なんか屁理屈言いましたか？」

「ムカつくから殴っていいか」

「教師のセリフじゃないですな」

「しかし、前から馬鹿だ、馬鹿だ、キモイ、とは思っていたがここまで
とはな。」

あーれ、最後の一言だけ違うくないすかー。

今日も今日とて白羽先生は絶好調です。

「とりあえず、書き直しな。この考えが悪いとは言わないがこれでは、
周りの人間が離れていくぞ。」

「はあ、そうゆうもんすかね。」

白羽先生がまともな事を言っている！いや、いつもまとも事は言っ

てるんだろが、それを上回る程俺を貶してくるからか。

「うむ・・・大切な物とは・・・いつも失ってから気づくものだからな。」

先生はどこか遠い目でそう答えた。

「かっこいいすね」

「かっこつけてるからな」

正直、俺は白羽先生のこう言う大人の一面は素直にカッコいいと思う。まあ、それがあつて余りあるほど俺を馬鹿にしてくるが。

「よし、もう帰っていいぞ。作文は書き直してこいよ。」

話が終わると白羽先生はこつちに向かってシッシと手でやっている。

「うす、失礼しました。」

職員室から出た俺は、そのまま下校した。下校中にいつの間にか朝から飛び回つてた蠅等はいなくなっていた。

ようやく訪れたここ久々の静寂に解放感を感じたのもつかの間、突如後方から嫌な感じがした。

殺気か!?

バツ!

振り返つてもそこには誰もいなかったが明らかにさつきとは空気が違うのが確認出来た。

「チツこんな時に・・・。」

俺がボンノーをポケットから取り出したとほぼ同時に、蠅の羽音が聞こえた。それも尋常じゃない数の。

「なんなんだ、朝から?」

ヴウウウウン!ヴウウウン

蠅たちは、重低音を出しながら大量に集まると、二人の人間の姿を形作りそして一気に拡散した。

すると人を形作っていた場所に恐らく俺と同じ年代の青年と、小学生と思われる少年がそこにいた。

「久しぶりだなあ・・・高司イ〜」

なんか片方、目がヤバいんだけど!

ダーティーフェイト 4

「・・・誰アイツ??」

俺は何となくボンノーに尋ねた

「知らん!!相棒の名前を呼んでるといふことは相棒の知り合いではないのか?」

「・・・」

　　～1分後

「・・・」

　　～3分後

「・・・」

　　～10分後

「誰???」

俺は長時間思考したが思い出すことは出来なかった。

「俺だよ、俺俺」

誰かわからない目の前の人は自分の顔を指でさしながら叫んでいる。

「対面してるのにオレオレ詐欺とは斬新ですね」

何となく思ったことを言っただけだ。

「ちげえーよ!!だから俺だって小学校の時同級生だった・・・」

「田中!」

「そうそう、田中、田中ってちげえーよ、俺だって御手洗、御手洗 雲高だって」

「御手洗、うんこ?」

「うんこじゃねーよ、うんこ〴〵な!!〴〵、ここが大事な!!」

「あゝ雲高君ね、で誰??」

「ふっふっふ、なんだかんだと聞かれたら答えてあげるのが世の情け、世界の破壊を防ぐため、世界の平和を守るため、愛と真実の悪を貫くラブリーチャーミーな敵役!ベルゼブブ……ほら雲高君も」

「え、えーと、雲高!」

「銀河をかけるロケツ〇団の二人にはホワイトホール、白い明日が

待ってるぜ！………ほら！その野良猫！」

「にやーんてにや（棒）」

俺が、さっきの新オレオレ詐欺容疑者？に尋ねるとその横にいた小学生くらいの男の子が、某人気アニメの敵役みたいな答え方をした。てかなんで野良猫も普通に参加してんだよ……。

「で、結局誰？」

「おい……ここまでやってまだ惚けるか！」

雲高が憤慨してるが、覚えてないものは仕方がないと思うなどと、俺が考えているうちになんか、向こうで2人が揉め始めた。

「おっと、そう言えばベルゼブブ」

「なんだい？雲高くん。なんならもう一回、自己紹介しとくかい？」

「もうそれはいいから。そうじゃなくて何でお前が、あのセリフを知ってたんだ？」

あのセリフとは、さっきのロケツ○団のセリフのことかな？

「な、何のことかな？僕にはさっぱりだ。」

「いや、その反応がもう怪しいから。……さてはベルゼブブお前、俺に黙ってポケ○ンを見たな!？」

「し、知らないなー。ポケ○ン？なにそれ食べれるの？」

「うるさい！なんだそのムカつく返しは！なぜだ！なぜ俺に黙ってポケ○ンを見た!？お前にはまだ、ポケ○ンは早い！アンパ○マンはどうした!？」

どうでもいいが、なんでこいつはポケ○ンを見ただけでこんなにキレてんだよ……。あと、ポケ○ンを見るのにに早いも遅いもないと思う。そう思っているとベルゼブブの方もキレた。

「じゃあ、言わせて貰うけど、なんだよあのアンパ○マンと言うアニメは!？」

「アンパ○マンはアンパ○マンだろうが!？」

「そういうことを言ってるんじゃない！バイキ○マンは人質誘拐と環境汚染と無免許運転くらいだけど、アンパ○マンは自然破壊に殺害未遂、不当投棄に器物損壊、名誉毀損に私有地への不法侵入などなど様々な悪に手を染めてるじゃないか!？」

「お前は、アンパ○マンをどんな観点で見てるんだよ！」

「あんなものを幼少期から、子供に見せるなんてどうなってるんだよ、この日本っていう土地は!？」

なにこの幼稚な争い・・・あと、幼少期からアンパ○マンを見てるのは何も日本だけじゃないと思う

「大体、君は日頃からガミガミと口うるさいんだよ！」

「なんだとー！そもそもお前が部屋を散らさなかったら俺もこんなにガミガミ言わねえよ！」

〜十数分後〜

「すまない、雲高くん。僕も熱くなりすぎていたよ。君がそこまで僕のことを心配してくれているとは。」

「いやこっちこそ悪かった。お前もお前なりの考えがあつたんだな。」

なんか、仲直りして前より友情を深めたらしい。

「おい、もういいのか？いいなら帰りたいんだが？」

俺が尋ねると2人はこちらを向いてベルゼブブが、

「おっと、忘れていた。高司くんだったか？待たせたな。」

とか言ってきた。そして、決め顔でこう言った。

「さあ、始めよう。絶滅タイムだ！」

・・・どうでもいいけど、決めゼリフが若干痛かった。

「えつと・・・つてことはこれから戦うつてことでいいのか？できればあまり人目につかない場所がいいんだけど」

「ずいぶんとあっさり受け入れたな相棒。もう少し戦うことに抵抗するかと思っていたが」

「流れるに断つてもつつかかってくるきそうだし、

なによりこいつらが痛すぎてみててかわいそうになってきたし、適当にウンコとベルゼブブの相手してやればいいだろ。・・・多分」

「誰がウンコだこらあああああ!!!雲高だ！後おまえたちの会話全部聞こえているからな！」

ボンノーとはウンコ・・・じゃない雲高に聞こえないようにはなしていたつもりだったが聞こえているようだ。まあ聞こえていたなら話早いからいいが。

「そういうわけだから移動しようぜ」

「いいんじゃないかな？周囲の目や被害を気にする必要なくなるし移動しようか」

「そう言いながらベルゼブブは俺たち全員の足元に魔法陣を作り上げた。」

「ボンノー、この魔法陣攻撃用か？」

「いや、転移用——つまり移動専用の魔法陣のようだ」

その一言に安心して俺は魔法陣から出てくる光に身をまかせた。

光に眩んだ目がすっかり見えるようになってあたりを見渡すとそこはどこかわからない平地だった。

雲崗がキョロキョロしているってことはあいつに聞いても無駄だな。そう判断して改めてまわりをみてみるとあることに気づいた。

ベルゼブブがいない……多分ちよつとした失敗で一人だけ別のところに移動したのだろう。

「おい、ウンコ……雲高」

「今ウンコと言いかけなかった？まあいいなんだ」

「そろそろはじめようぜ」

「……………え？」

「え？じゃねーよお前たちが戦うっていいだしたじゃねーか」

「いやそれは……その……えっと……あのお」

急に雲高は歯切れが悪くなった。

「そうこうしていると俺のところには二枚、雲高のところには三枚の紙が現れた。」

その紙には少々子どもっぽい文字で「もう一枚の紙の魔法陣から戻れるよ」と書かれており、もう一枚に魔法陣が描かれていた。

「どうする？ボンノー」

「雲高とやらは紙をみたまま動かないようだ。今日のところは帰ってもよいのではないか？」

「短く相談を終えた俺たちは紙の魔法陣を使って帰っていった。雲高を置いて。」

俺―雲高はベルゼブブによって移動した後あいつの不在に気づいた。

俺は戦うのはもちろん初めてだ。

しかも、高司は何か武器を持っているらしい。

このままだと確実に負ける。

ベルゼブブをまちながら戦おうとする高司を相手に必死に時間稼ぎをしようとしていると三枚の紙が出てきた。

一枚目には

「もう一枚の紙の魔法陣から戻れるよ」

という文字、二枚目には魔法陣、三枚目には文字が書いてあった。

「もうすぐポ○モンの時間だから僕はいけないよ。ごめんね」

と。あの馬鹿に鉄槌を下してやる！少しの間制裁をどのようにするか考えた後高司がいた方向をむいた。

「今回は用ができたから戦いは今度ということにしてやる……っっていないし！」

俺は一人置いてけぼりにされていた。

「くそがー、!!!」

俺の怒りの咆哮が辺りに響き渡った。

俺は直ぐ様二枚目の魔方陣が描かれた紙を使って、移動した。御丁寧にいき先は俺の家の前だった。俺は荒っぽくドアを開けて、家に入った。

「ベエエエルウウゼエエブウウブウウ!!」

「あれ、雲高君？随分早かったじゃないか。」

「誰かさん達からおいてけぼりにされたからな！」

「しー！ポケ○ンが始まるから静かにしてよ。」

ベルゼブブがそう言った直後にポケ○ンが始まった。

「ポケ○ンゲットだZ E ♪」

チャーチャチャチャーチャラーラーラーラーラー♪

俺は正直今すぐテレビの電源を切って、怒鳴り付けたかったが、なんだか懐かしかったので隣に座って一緒に見ることにした。

「おお、ヤベエー！バトルシーンがカッコエ」

まさかこの年でポケ○ンを面白いと感じるとはな、隣を見てみると、ベルゼブブは俺よりも興奮していた。

「いけー！そこだー!!」

そして暫くしてアニメが後半へと進んでいくと、変装していたロケツ○団が正体を表すシーンへと突入した。

俺たちは口をそろえてあの決め台詞を口にしていった。

「なんだかんだと聞かれたら答えてあげるのが世の情け、世界の破壊を防ぐため世界の平和を守るため愛と真実の悪を貫くラブリーチャーミーな仇役！

ム○シ、コ○ロー、

銀河をかけるロケツ○団にはホワイトホール、白い明日が待ってるぜ！」

俺達が肩を組んで、台詞を読んでもと窓が開き、さっきの野良猫が部屋に入ってきた。

「にゃーんてにゃー」

お前最高だわ。

俺達は、野良猫とともにポケモンを堪能した。もう怒る気は失せていた。

俺は野良猫の名を“ニャーヌ”と名付け、明日は学校が休みなので明日こそ高士に復讐すると天に誓い俺は寝た。

「しっかしあいつはなんだったんだろうな」

俺たち、高士 蒼一郎たちは家に帰った後プロロやエピロたちと夕食を食べながら雲高とベルゼブブのことを話していた。

「雲高とやらは相棒にやたらと敵意を持っていたようだがあやつとにながかったのだ」

「確かにベルゼブブほどの悪魔を呼び出してまで対決をしようとした訳ですし何か恨みを買うようなことをしたのではないですか？」

ボンノーとプロロにいわれて俺とあいつの間であったことを思い出してみた。そこで思い出した原因で最も信憑性の高いものは、

「あいつの尻にカレーをぶちまけたあげくそれをみた誰かがあいつをウンコマンと呼んだことが原因であだ名がウンコマンに固定されたことかなあ」

「二間違はなくそれだな（ね）（ですね）」

三人一斉に断言した。

「相棒よ。」

あだ名というのは生涯つきまとうものだ。

普段からあだ名で呼ばれていたものは、同窓会などで旧友と再会を果たしたときに旧友が名を覚えておらず、あだ名で呼ばれてしまうこともあるのだ。

そのときいい大人が「ウンコマン」などと呼ばれてみる、自尊心が傷つくことは目に見えているではないか。

お前にとつては、只の事故に過ぎないだけかもしれんが受身の側からしたら重要なことなのだ。」

なにやらボンノーが熱弁を繰り広げだした。俺が後悔を僅かながら感じているとエピロとプロロも言葉を失っていた。

「まあ、あだ名で散々いじめられてきたのだから今更かもしれんがな！」

俺はボンノーをゴミ袋へと突っ込みながら叫んだ！

「俺たちの感動を返せー！」

「燃えるゴミの日はいつかしらねえ？」

「剣だから燃えないゴミじゃないですか？」

「燃えるゴミの中で一緒に燃やして殺った方がいいだろ」

「わ、悪かった！我が悪かったから勘弁してくれー！」

そうして雲高とベルゼブブのことは忘れられていった。

後日、エピロとプロロの提案で俺たちは映画を見に行くことになった。

「で、なんで映画？」

俺が尋ねると、

「まあ偶には良いじゃない。こここのところ天使もめつきり姿を現さなくなってるんだし。」

と、エピロが言い続けてプロロも

「そうですよお。最近出たのもこの間二人が話してた可笑しなコンビぐらいですよ。」

と言った。

「良いんじゃないのか相棒。折角の休日だ。どうせ天使どもも現れないだろう。存分に楽しもうではないか。」

どうやら、ボンノーも映画に行くことに賛成のようだ。

「そうだな。んじゃ今日は1日、楽しむか。」

そんなこんなで俺たちは映画を観るため街へと向かった。

夕方

映画を観た俺たちは家へと帰っている。

え、映画の感想？寝てたから知らん。

始まって即寝てしまったため俺は映画を殆ど観ていなかった。

起きたら横にいたエピロとプロロに、なんで寝てんだよ的な目で見られてた。解せぬ。

すると、向こうから最近見慣れた二人組が歩いてきた。

「こんなところで会うとは奇遇だな高司。」

「そんな事言って2時間前からずっとここに居たじゃないか。」

「バカ！お前。そういうのは普通言わないだよ。」

「なるほど、これが所謂お約束という奴か。」

「うーん、若干違うようだがまあいいか。」

……雲高とベルゼブブだった。

どうやら、この二人2時間前からここに居たらしい。

「で、今日は何のよう？また、戦うの？正直今日は疲れたから帰りたいんだけど？」

俺が溜め息をつきながら言うと、

「いや、今日はいい。」

と、雲高は言った。

「なんだ、今日はいいのかよ。」

「ああ、実は俺たちもきつきまで映画に行っていたからな。疲れてるのはこっちも一緒だ。」

マジか。……いつらも映画に行ってたのかよ。

「まあそういうことさ。……で、其方の2人は誰かな？」

ベルゼブブは、エピロとプロロを指差しながら言った。

「お初にお目にかかります、ベルゼブブ様。我が名はエピロ。終わりを司る悪魔で御座います。」

「同じくお初にお目にかかります。始まりを司る悪魔、プロロで御座います。」

エピロとプロロがひざを突きながら答えた。……おお、なんか、いつもとキャラが違う

「うむ、なるほど。この町に来て感じていた悪魔の気配は君たちだったのか。」

ベルゼブブは指で顎を撫でながら感慨深そうに言った。

「あ、普通にしていいよ。正直僕はそういうの苦手だからさ。」

ベルゼブブはそう言うのと2人を立たせた。すげー、ホントにマジモンのベルゼブブだったんだなあいつ。

「それより見たかい雲高くん。やっぱり僕は敬われる存在だっただろ？」

「う、うん。そっだねー。」

またなんか、2人でコントしてる。

「お前はもう帰るのか？」

雲高が俺に聞いてきた。

「ああ。」

「じゃあ、ここでお別れだね。帰ろうか雲高君。」

どうやら、雲高とベルゼブブも帰るようだ。しかし、ベルゼブブはいきなり止まると、

「その前にそこにいるキミ。いい加減出てきたら？」

いきなりベルゼブブは近くの電信柱へと話しかけた。すると、電信柱の影から人が出てきた。

「あーれ、俺見つかった？」

出てきたのは黒のロングコートを着た中年のおっさんだった。

「あんた誰だ？」

俺が尋ねると、おっさんはポケットからココアシガレットを取りだし口にくわえ、答えた。

「俺か？俺は安形 啓二（あがた けいじ）。エクソシストだ。それもA級のな。」

「な、A級だと！」

おっさんの自己紹介を聞くと、ボンノーがいきなり声を上げた。

「いかん！相棒。今すぐここを離れるんだ！おい！雲高とかいった

な。お前たちも今すぐここから逃げろ！」

ボンノーは普段からは想像できないほどに取り乱していた。

だが、次の瞬間安形の姿は俺たちの後ろにあった。

「遅い、遅い。」

ドンツ！

安形は手に持っていた銃でエピロを撃った。

「おい！エピロ！」

俺はすぐさまエピロの側によるとエピロに聞いた。

「だ、大丈夫よ。でも、このままじゃ、やばいかも……。」

エピロはそう言うと、意識を手放した。

「プロロ！頼む！」

「任せてください！」

俺はプロロにエピロの治療を頼むとボンノーを抜き構えた。

「てめえ！いきなり何しやがる！」

「おいおい、そんなに怒るなよ。高々、悪魔の腹に穴が開いたただけだろ？」

安形はさも当然のように答えた。

「雲高くん、ここは高司くんと共に闘するんだ。」

ベルゼブブが展開についていけない雲高に言った。

「あ、ああ！」

雲高もどこからか出した籠手を構えると俺の隣に並んだ。

「悪いな。分けの分かんねー事に巻き込んで。」

俺が雲高に言うと、

「いや、いい。流石に目の前で女の子が撃たれて引き下がれるほど俺も大人じゃない。」

雲高が答えた。

「てことだ。今から俺たち二人で相手をしてやるよ！」

俺が安形に言うと、安形は笑いながら、

「君たち2人がかい？。いいよ。遊んであげる。」

そう言うと、安形は二本目のココアシガレットをくわえ噛み砕いた。その間に俺たちが構えていると、次の瞬間に雲高の身体が宙を舞

い向かいの扉に叩きつけられていた。

「ぐはあ！」

そこから、雲高は動かなくなった。

マジか、始まって即一人戦闘不能なんだけど！

「弱いよ、弱いな。それでも君、ベルゼブブの契約者かい？」

安形は笑いながら言った。三本目のココアシガレットを取り出しながら。

「次は君かい？」

安形は俺の方を向きながら言う。

「高司くん、もういいよ。此方にくるんだ。」

すると、ベルゼブブの聞こえた。俺はすぐさま賢者タイムを使用し、ベルゼブブの元へと走った。

どうやらベルゼブブは、俺たちが戦っている間、全員分の転移魔法を展開していたようだ。

「悪いが続きはまた今度だ。」

俺はそう言うと、先に拾われていたエピロ、プロロ、雲崗と共にベルゼブブの転移魔法で転移した。

ダーティーフエイト 7

〈高司の家〉

先の戦いを終え家へと転移した俺たちはすぐさまエピロの手当てを始めた。

「どうだプロロ？エピロは治るのか？」

「傷自体は大きなものではありません。ですが、銃弾に込められていた聖の力が私の回復魔法を邪魔していて十分に回復出来ません。」

プロロは消沈した面持ちで答えた。

「でも、時間をかければ目を覚ますと思いますよ。」

プロロが慌てて付け加えた。

「そうか。じゃあエピロのこと頼めるか？」

「はい、任せてください。」

俺はそう言うとおエピロの部屋を出てリビングに行った。

そこでは、既に目を覚ましていた雲高とソファアに座っているベルゼブブがいた。

「で、何なんだあの安形ておっさんは？」

俺が尋ねると、ボンノーが答えた。

「あやつはエクソシストだ。それも上位のA級のな。」

「なんだよ？A級で。そんなになのかよ？」

「ああ、少なくともそこにいる雲高の数十倍はな。」

雲高を見てみるとずっと下を向いていた。

「おい？どうしたんだよ。ずっと下なんか向いて？」

俺が雲高に言うのと、

「……………俺何も出来なかった。」

どうやら、戦闘開始からすぐやられたことを悔いているらしい。

「なあ、ベルゼブブ？俺って弱いのかな？」

雲高は横でお茶を飲んでいるベルゼブブに尋ねた。

「…ふむ、お世辞にも強いとは言えないね。」

うわぁー、容赦ねー。

「……………そうか、やっぱそうだよな。あんなイキって行ったのにザマ

アねーな。ホント。」

「だか、弱いなら強くなればいい。」

そこで、ベルゼブブは湯飲みをテーブルに置き雲高を方を向いた。

「まあ、敗北からの成長というのも漫画の醍醐味らしいからね。」

と言った。するとベルゼブブはこちらを向き頭を下げ、

「ということで、高司くん、雲高くんを特訓してはくれないだろうか？。」

とか言ってきた。

いやいやいや、俺ですら勝てるかわかんねーのに人の世話とか無理無理。

俺がそう思っただけ口を開こうとした瞬間

「良いではないか相棒。ここらで特訓でもしていつそう強く成っておけば天使が来てもそうそう苦労はせんぞ。」

とかボンノーが言い出した。

「勿論タダでは言わない。君たちが留守の間エピロくんとプロロくんの2人は僕の全力を持って守り通そう。なんせ、同じく悪魔だからね。」

ベルゼブブはそう言った。

すると、雲高が俺の前に来て頭を下げた。

「頼む高司！俺は強くなりたい！」

涙を流しながら頼んできた。

「……………ここまで言われたら引き下がれないか。良いだろう。一緒にあいつを倒すための特訓だ。だが、俺たちの特訓は厳しいぞ。それでもお前はついてこれるか？」

「……………ああ」

「よし。では、今から雲崗は俺達に話しかけられた時以外口を開くな。言っただけいい言葉はレンジャーだけだわかったかクソ野郎」

「レ、レンジャー」

「聞こえねえぞ！ 玉落としたのか!？」

「レンジャー!!」

「明日から全ての予定を取りやめて訓練だ！ ！」

すぐ帰って準備しろ雲高！ 明日の五時に迎えに行く。
迎えに来るまでに準備しておけ。遅れんじゃねえぞ、クソ野郎！

「レンジャー!!」

こうして、俺たちの特訓が始まった。

*

翌日、某山中。

俺達は上に黒のタンクトップ下に野戦服を着て、軍靴を履いてとある山に来ていた。

もちろん学校をサボっている。

俺達が来たところは、俺の親父の知り合いのヤクザ組が管理している山の一つで主に新人を訓練するのに使う場所だ。

今は使っていないので借りてきた。

ここには訓練用の障害物がたくさんあるのでちようどいい。俺

は、丸太置き場から雲高に小さめの丸太を見繕って渡す。

「まずは準備運動だ。ここからあそこまで十往復だ!!」

「レンジャー!!」

もちろん俺達も同様に丸太を肩に担いで一緒に走る。

走りながらも激励を忘れない。

俺とボンノーは、雲高以上に厳しく訓練をこなしながら一言ずつ交代で雲高に檄を飛ばす。

「このクズがトロトロ走るんじゃねえ!!」

「レンジャー!!」

「全くなんたる様だ! 貴様は最低の蛆虫だ! この宇宙で最も劣った生き物だ!!」

「レンジャー!!」

「いいか、クソ野郎! 俺達の楽しみは貴様の苦しむ顔を見ることだ!

爺の交○みみたいにヒイヒイ言いおつてみつともないと思わんのか!

○玉があるならこの場でセンスリをこいてみる! インキン持ち

のタムシ袋の腐ったものを！」

「レンジャー！」

なんとか十往復を終えさせた雲高を急かしながら次の場所に向かう。

鉄条網を匍匐前進できるギリギリの高さに設置しその下を俺達が背面で匍匐していく。

「いいか、今の貴様は家畜以下だ！」

俺達の訓練に生き残れたその時貴様は初めて兵器となる！

それまで貴様はケータイ小説の人命よりも価値がない！」

「レンジャー！」

次の障害物は木を網目状に組んだものを登って降りていくものだ。

「俺達は貴様を軽蔑している！ 勝利の足を引つ張るような野郎には容赦せんから覚えておけ！」

「レンジャー！」

その次は格闘だ。

俺は木の棒で雲崗は素手でお互いのに殴り合う。

「笑うことも泣くことも許さん！」

貴様は人間ではない！

殺戮のための機械だ。

殺せなければ存在する価値はない。隠れてマスをかいてるのがお似合いのチ○コ野郎に過ぎん！」

俺と雲高が殴り合っている間、ボンノーが激を飛ばす。

「わざと負けて目立ちたいかあ！」

痛いふりをして同情を引きたいかあ！

この負け犬根性のゴミ溜め野郎が！」

格闘が終わったら走り込みだ。俺達は死にかけている雲高を肩に担ぎながら丸太を持って走る。

「トロトロ走るなこの豚！」

貴様の体力はナ○お嬢様以下か!?

泣き言言うならこの場でケツにシヨンベン流し込むぞ！」

走り込みが終わらせ、すっかり疲労困憊している 雲高に籠手を渡

す。

「貴様の彼女はその籠手だけだ！ ケツがデカイ尻軽女なんざ貴様には必要ない。彼女を綺麗に拭いてやれ！」

「とても綺麗だよ、シャンプー。ピカピカにしてあげるよ、嬉しいかい？ ぼくは君のためなら死ねるよ」

雲岡は目を怪しく光らせ籠手に話しかけている。

俺達は四日間こんな感じで生きていた。

*

「どうした雲高、もう限界か？」

「ぜえ……ぜえ……」

「所詮貴様の根性など、その程度のものだ！」

「くっ……」

「違うと思うなら気合を見せろ！」

「レンジャー!!」

それからの日々、俺とボンノーは雲高を徹底的にいじめ抜いた。

そして、今日近場の道場に俺達は殴り込みをかけた。

「いいか、今この時をもって貴様は蛆虫を卒業する！」

俺達の訓練を耐えきった貴様は俺達の兄弟だ。

貴様のくたばるその日まで、どこにいようと俺達は貴様の兄弟であることに変わりはない。それを肝に銘じておけ！」

「レンジャー……」

次はボンノーの番だ。

因みにボンノーは周りに認識阻害の魔術をかけているため俺たち以外には認識されない。

「貴様はこれから最大の試練と戦う。全てを得るか地獄に落ちるかの瀬戸際だ。どうだ楽しいかあ！」

「レンジャー……」

「よし…… 戦闘準備！」

俺がそう声をかけると雲高は野戦服を脱ぎ捨てる。

その下からピカピカのTシャツが現れる。雲高の準備が終わったところで俺は息を吸い込む。

「野郎ども！ 俺達の特技はなんだ!？」

『殺せっ!! 殺せっ!! 殺せっ!!』

雲岡とボンノーから声が返ってくる。

「この試合の目的はなんだっ!？」

『殺せっ!! 殺せっ!! 殺せっ!!』

ボンノーの言葉に対し、今度は俺と雲高が言葉を返す。 次は俺の

番だ。

「俺達は筋肉を愛しているか!? 戦いを愛しているかっ!? クソ野郎

ども!!」

『レンジャー!! レンジャー!! レンジャー!!』

「よし！ 殺ってこい!」

「うおおおおおっ!!」

雲高は雄叫びを上げながら相手の元へと歩いていった。え、キャラが違うって?.....気にすんな。

ダーティーフエイト 8

〜10分後〜

しばらく道場の方から叫び声が聞こえた後、雲高が全力ダッシュで戻ってきた

「ん??ボンノーあいつ戻って来てないか」

「うむ、しかも明らかにこちらに敵意があるな。」

「そうだよなー・・・あれは人を殺す目もんなー」

雲高が鬼の形相で突っ込んでくる

「よくよく考えたら、一番恨ん出る相手お前だったあああ」

ガキン

雲高が思つきり殴ってきたので急いでボンノーで防いだ。

「何すんだよ、てめえ!!兄弟の契を結んだ俺に!!」

「俺は結んだ覚えはない、どっちかと言うと催眠術にかかって気づいたら強くなってた感じだ。何がレンジャーだ、死ねええええ!!」

雲高はエクソシスト戦は違うキレのある動きでソバットをきめて来る

「うあ、あぶねえええ、仮にも師匠だぞ!!」

俺は間一髪でそれを防ぐ。同じ修行をしてきたはずなのだが奴の成長が著しかった。

まあそれは俺がボンノーのアシスト能力で多少のズルをしてきたからなのだろうがそれにしても雲高のキレが違う。

「ボンノー、賢者タイムで一気にケリをつけるぞ!!」

「それでほんとにいいのか?相棒」

「しようがねーだろ、アイツめちやくちや強くなってるからこのままじゃこつちが殺られるぞ」

「それもそうだな、いくぞ賢者タイム!!」

先程まで均衡していた力はこちら側賢者タイムを使ったことで一気にこちら側に傾く

「いける!!」

このまま押し切れると思ったその時、一つの魔法陣が現れた。

「賢者タイムか、その選択肢はどうかなあ、あと関係ないけどエピロ君は回復したみたいだよ」

ベルゼブブだ、エピロが回復したのは普通に嬉しい

だがこのタイムミングで奴が出てくるのは不味い気がする

「なんだよベルゼブブ、加勢してくれるのか?？」

防戦一方の雲高がベルゼブブに話しかける

「ん?それは流石に卑怯だから僕はそんなことはしない、代わりに籠手についての説明と戦い方のヒントをあげよう」

お、お、これは早めにケリをつけないとヤバいな、俺は落ちてた木の棒で攻撃を仕掛けるがギリギリのところまで雲高に防がれた。

「は、早くしろベルゼブブ」

苦しそうに雲高が叫ぶ

「いいかい、雲高君その武器は僕の暴食の力を込めている、そして、暴食の力によってバクテリアの分解する速度が爆発的に上がる。その結果としておこる現象が腐敗だ。」

「だからどうした!!これで殴ると腐敗が起こるってことがいいのかわ!?!」

「いや、僕が言いたいのはそこじゃない、その腐敗という能力は全ての生き物に起こるといのがポイントだ!つまり金属であるボンノ―君は無理でも、高司君なら分解できるとい事だな」

「つまり、アイツをリアル生ゴミにできるわけだ、殴れば!!」

「まあ、どこかが出血すれば確実に腐敗していくだろうね」

なんか、とんでもねえ話してるううううう、殴つても出血したらそこから腐敗…だと…?」

「ボンノ―どうすればいい?？」

賢者タイム中は喋れないので、ボンノ―は心に語りかけてきた。

(うぬ、とりあえず賢者タイムがきれないうちは押せるはずだが、そろそろ決めなければ、賢者タイムはきれいな、)

やべえええ、どうする??考えろ、考えろ、

考えている間も雲高を攻めたてるが、ギリギリのところまでよけられる所は変わらない、しかも奴はこちらの攻撃に慣れてきているのか、

徐々にこちらへ攻撃を仕掛けてくる。

「ちつくしよー、」

シュツ

雲高の右ストレートが俺の頬を掠めた、摩擦で頬が切れ出血をおこす

「やべえぞ、ボンノー、頬を切られた」

触ってみると、大量の膿が出てるのが確認できた。

(賢者タイム時は私の能力の一部が使える、熱だ。熱で微生物達をどうにかするのだ)

熱でって、つまりアレをやるのか・・・。

賢者タイムでボンノーはふやけてるとは言え、熱は依然帯びてる。

つまりやることは一つ！

ジュウー!!!

「ガアアーッッ」

俺は、ボンノーの余熱で切り口を焼いた。熱で微生物を焼き殺す。

「マジか、アイツ・・・」

その様子を見て雲高が動揺をしている。俺はすかさず棒で攻撃を仕掛けた。

「オラア！」

「馬鹿が、木ってのは生物なんだぜ！俺の籠手で腐敗させてやる！」

雲高が俺の手にしてる木の棒を殴ると、みるみると腐敗し、崩れさった。

「ハハハ、高士！これで止めだ！」

雲高は拳を振り上げながらそういった。

「油断したな。」

俺は、崩れ行く木の棒の粉を手で掴むと奴の目に思いっきりぶん投げた。目潰しだ。

バサー

「くっ、目が」

雲高はたまらず後退するが、俺は隙だらけの奴にすかさず蹴りをかました。

ボグ!

「ゲフー!」

奴はそのまま後ろにぶっ飛び仰向けの状態となったので起き上がる前に体を取り抑えた。奴が抵抗していると

「勝敗は結したね、高士君の勝ちだ。」

と、ベルゼブブが静かにそう言ったので俺は手を離した。雲高は悔しそうな表情を浮かべながらしばらく仰向けのままだった。

「高士、あんた少し強くなったんじゃない?」

俺が、何とか勝利を治めると、復帰したエピロから誉められた。

素直に嬉しいな、なんて思っていると、雲高が起き上がり、俺に向かってこう言った。

「ヴァーラーカ!!!」

「あれーデジャブだなーコレ、まあいいや帰ろう。」

俺がそう言うと、ベルゼブブが引き留めた。

「いや、待ってくれ高士君。急で申し訳無いが君に、いやここに居る君たち全員に言うことがある。」

なんだ?何事だ?急な展開とは言え、ベルゼブブは真剣な表情だったので思わず冷や汗が出てしまった。

「この町から天使の気配がする。それもエピロの魔力が込められたものが……。」

俺とエピロは戦慄した。今、再び因縁の戦いの火蓋が切って落とされようとしていた。

第四章

センケツノキズナ 1

初夏が過ぎ、蒸し暑い季節になってきた。家の外も中もサウナ状態だ。

俺こと高士 蒼一郎は昼休みに学校を無断で一週間程欠席したことにについて、こっぴどく担任の白羽先生に叱られていた。

「お前、いくら高校が義務教育じゃないとは言え一週間は休みすぎだろう？何をしていたんだ？」

ウンコマンと修業をしていた、が正解だが言えるわけない。何か適当に言って誤魔化すか

「五月病で動けませんでした。」

「面白くない上に意味が不明だ！」

「じゃあ、デング熱……。」

俺がそう言った途端職員室に打撃音が鳴り響いた、辞書という名の鈍器で。

その後何とか俺は弁解することに成功し、ペナルティは下されなかった。

いやー先生も案外やさしい面があるんだな。

まあ、結局のところその後は忙しかった。課題とかPTA関連のプリントだとか課題とか進路についてのプリントだとか課題とか課題とか。

え？課題が多い気がするって？気にする必要はない。

「そろそろ夏休みだしどこか遊びにいかない？」

エピロは俺が帰宅するなりそう提案してきた。こいつこの前自分が死にかけたことを覚えていないのだろうか。

「駄目に決まっているだろ！」

最低でもお前が死にかけない状況にならないことが確定しなければ駄目だ！」

エピロはしばらく黙り込んでしまった。

「そういえばプロロはどうした？姿が見えないが」

ボンノーが空気を察して話題をそらした。確かにプロロはいないし何か壊れる音も聞こえてこない。

「あの子ならあんたの部屋の掃除中にエロ本見つけて気絶したわ」
「はっ。」

俺が思わず間拔けな声をあげるとボンノーが震えだした。

そこからボンノーを床に叩きつけて俺の部屋に入るとそこには、
《俺のエロ本が分解された状態でしかもページが一発で見渡せるように配置（扉に要が向くような扇形）》されていた。

下からボンノーが笑っているのを聞きながら、俺はその場で崩れ落ちた。

orzの体制になりながら俺は思った。

（なぜこうなるんだああああああ）

その後俺が夕食を作り終わるころにプロロが起きてきた。聞くのも悪いと思ったがどうやってたらああなるのか気になってしまったので聞いてみてしまった。

「なにが起こったんだ？というより俺の部屋にはいれないように鍵かけたはずなんだが」

俺がそういうとプロロは首すじまで真っ赤にして

「換気をしよう」と窓を開けたら偶然ドアが開いて風が吹いて本が……」

と消えいりそうな声でいった。聞かなきゃよかった…

その後はものすごく気まずかったので皆早々と部屋に戻った。

俺はまったく眠れなかったが。翌日も気まずかったのでいつもより早い時間に学校に行くことにした。

いつもより早く登校した俺を待っていたのは、まだ閉まっている学校だった。

ちなみに、ボンノーはいつの間にか俺のズボンのポケットに入っていた。

「なあボンノー、まだ開いてないんだけど？」

「みたいだな、相棒。まあ、あの気まずさ満載の家にいるよりは気が楽

だろう?」

「……………まあ、うん。」

つつてもなー、どうしよう開くまで

「なにその内、係員か誰かが開けてくれるだろう。それまでの辛抱だ相棒。」

まあ、そりやあそうか。

ボンノーの言葉を聞きながら俺はカバンに入れていたスマホを取り出すとアプリを起動した。

(そーいやあ、今日の分のログインボーナスまだ貰ってなかったな。)

そう、朝から家中が気まずさに溢れていたため俺は朝食をさっさと済ませ、充電が完了していたスマホをカバンに突っ込み走って学校まで来たのだ。

(お、今日で丁度100日目だ。石10個貰えるじゃん。ラッキー)

そんな事考えながらシコシコと学校の校門の前でゲームしていた俺の前に一人の女性が現れた。

センケツノキズナ 2

「あの君、この学校の生徒さんですか？」

「ええ、まあそうですけど」

誰だ？この人。てか、言葉遣いからわかるけど真面目そうな人だな。

「そうですか、じゃあ高司 蒼一郎君て子知ってますか？」

ん、それ俺のことじゃん。

「いや、知ってるも何も俺がその高司ですけど。あんた誰？」

「……こんな偶然もあるものなんですね。……自分は砂城楓。国家公認のメイジウィッチー。つまり魔術師です。」

「うむ、相棒よ。どうやらこの女の言っていることは本当らしいぞ。確かにこの女からは魔術師の気配がする。」

ボンノーがポケットの中から若干はみ出しながら言ってくる。

「喋る剣。と言うことはあなたがボンノーさんですか？」

「うむ、確かに我がボンノーだ。して、その魔術師が我らに何のようだ？」

勝手に砂城さんとボンノーの会話が進んでいく。

「これは探す手間が省けました。……この近くにカフェがあるのですが、ついてきてくれますか？。詳しい話しはそこで。」

と言って砂城さんは歩き出した。

(……まあ、知らない振りも出来なさそうだしついて行くか。今日はサボリかなー。)

俺は、そんな事を考えながらやつと開いた校門を背に砂城さんの後についていった。

なんとなくて、砂城さんついて行きながら歩くこと5分カフェに着いたようだ。

「ボンノーあれってなんて読むんだ？」

「CAFÉ　　武雷庵と書いている看板を指していった、

「ブライアンじゃないのか？」

「そうです!!、ブライアンです、ブライアンは創業大正5年」

〜十分後〜

「今は三代目ブライアンさんなんですけど〜」

〜更に十分後〜

「ブライアンさんの料理は全ておいし〜」

〜更に十分後〜

「〜コーヒーのオススメはブライアンブレンドですねこれが苦味の中にも甘味あってこれもまた〜」

「あのー、もう店の説明はいいんで中に入りませんか？」

「あ、すみません、そうですね入りましょう」

カランコロン、

店の中に入るとリーゼントの男性の店員が一人いた、彼がブライアンだろう、

「いらつしやい、砂城の嬢ちゃん、隣の子は嬢ちゃんの知り合いかい？」

「あ、ボワルフさん、こんにちは、この子はちよつと仕事の関係で」

ん???待つてあれ?ブライアンじゃねーの???

「あのウェイターがブライアンさんじゃないんですか???

「ん?、彼は違いますよ、この店唯一のバイト、ボワルフさん、ブライアンさんの弟子で魔術師ですよ」

俺を席に促しながら砂城さんは言った、

ん?じゃあブライアンは??

「濃じゃ、」

目の前に白髪幼女がたっていた

「ボンノー幻覚かな?幼女が見える」

「幻覚ではないぞ我にも見える、しかも魔力量が上位悪魔の比じゃない。」

「おおお、珍しいのう魔人を加工した魔剣か、お主面白いもんを持ってるのが、少し触らせてくれんかのうー」

幼女がキラキラした目でボンノーを見ている

「ボンノーこの子に触らせてあげてもいいか?」

「致し方ない、別にいいぞ相棒」

幼女にボンノーを貸してあげると幼女はキラキラした目でボンノーを観察している、俺は砂城さんの方に向き直った

「砂城さん、話ってなんですかね？あと、この幼女なに？」

「この人は、アウル・フランシス・ブライアン魔術師兼魔具の作成者、この呪いを弾く指輪、破邪の指輪の効力をあげてくれたのも彼女、だから自分には女神がかけた呪いが作用していません、

まあ女神の呪いが時代とともに弱まってるのもあるんですけどね」
頼んでもいないのにボワルフさんがコーヒーとパフェを持ってきた多分砂城さんがいつも頼んでるだろう、

てか、パフェでけえな

「自分ががここを選んだのはここなら天使や悪魔、エクソシストに邪魔されないからです。で、本題と言うのは、この街で、明らかに魔力が増えている、更に天使が不穏な動きをしているみたいなんです。」
「不穏な動き、とは一体。」

「そうですね、具体的に言うならまるで何かを探しているような様子でしたね。」

「その天使の特徴とかはわかりますか？」

ひたすらに嫌な予感がする。俺が質問してる間も砂城さんはパクパクとパフェを食べていた。

「今のところ確認出来たのは、二人の天使で一人は女性、もう一人は男性でした。二人とも羽の色から人工種だと思われれます。」

「人工種？なにそれ、ボンノー知ってる？」

俺はボンノーに尋ねるが、

「アツ・・・アヒイー！ヤメロ！変な方向に曲げようとするでない！」
「まあまあ、良いではないか。儂とて久し振りの魔剣じゃ、堪能させんかい。」

「相棒ー！ー！！」

ボンノーの断末魔を向こうから聞いたあと、謎の金属音がなり始めた・・・。

よし！聞かなかったことにしよう。

俺が砂城さんに視線を戻すと、彼女はすでにパフェの半分は食べ終

えていた。砂城さんは一度咳払いをすると、

「天使にはまず人工種と純粹種の二種類に別れていてですね……。」
と説明を加えてくれた。

「話を長くすると悪いですからね、簡単に言うとか全知の神が作った天使が純粹種、それ以外が人工種となります。」

「なるほど、わかりました。」

「それで、貴方に自分と一緒にこの天使たちの調査をして欲しいんです。」

「はあ、調査ですか。」

「はい、やってくれますか?」

砂城さんが少し不安そうな顔で尋ねてくる。

「そんな顔しないで下さいよ。良いですよ。協力します。」

「ほんとですか!?!ありがとうございます。良かった〜断られたらどうしようかと思いました。」

ホツとした顔で残りのパフェを食べていく砂城さん。

「で、その天使は今どこにいるのか分かりますか?」

「そつから先の話は俺がしよう。」

俺が砂城さんに尋ねた質問の答えは意外なところから返ってきた。

声が聞こえた方向に振り返ると、さっきまでブライアンさんに遊ばれていたボンノーを片手に持った、いつかのファミレスのおっさんがいた。

「あんた、確かこの間のファミレスの?」

「おお、自己紹介がまだだったな。俺の名前はズ・グヌンバ・ペペ。」

あのファミレスでは、バイトをしてる。気軽にペペさんと呼んでくれ。」

ペペさんはそう言うと、シナシナになったボンノーを渡してきた。

俺は、茹でたほうれん草みたいになったボンノーをそつとズボンのポケットに入れた。

話を聞いてくと、ペペさんは昔、凄腕のエクソシストだったらしい。

しかし、ある日の仕事の途中、ケガに倒れていた悪魔を助けてしまったため、教会から追放され路頭に迷っていたところをブライアンさ

んに拾われたらしい。

人に歴史ありとはよく言ったものである。

そして、ブライアンさんの伝手で今の仕事場を紹介してもらい、今ではバイトリーダー兼時間帯責任者らしい。

ちなみに時間帯責任者とは、店長が諸事情で店内にいない場合の代理店長みたいなものらしい。

まあ、詰まるところ教会から追放されはぐれ者になっていたところをブライアンさんに拾われ、バイトをする傍らはぐれエクソシストとしてそこそこ活動していたらしい。(飽くまでも、バイトが主らしいが。)

「じゃあ、この前エピロとプロロが食い逃げしたときもイツらが悪魔でことには気づいていたんですか?」

「ああまあな、だが害は無さそうだったんで放っておいたんだ。まさか、こんなところで再会するとは思わなかったがな。」

「なるほど。で、そう言えば天使の居場所を知ってるんですか?」

「おお、そうだった。少年よ、お主のクラスにモテルとか言う奴がいるだろう?」

「え?ええまあ、いますけど。」

何でここでモテルの名前が出てくんのだ?

その疑問はペペさんの次の一言で解決した。

「天使たちはそのモテルという奴の家にいる。……それも今は女神も一緒にな。」

「ナア!?!」

ペペさんの言葉に砂城さんが思わず椅子から立ち上がった。

マジかよ、まさかのラスボス登場!?!

「と言うことで、今からそのモテルで奴の家に乗り込もうと思うんだが、少年そしてそちらの魔術師の嬢ちゃんも一緒に来てくれないか?」

「行きましょう!高司くん!これは二度とないチャンスですよ!。」

おお、砂城さんのテンションが高い……。

こうして、ペペさんの情報を元に俺、砂城さん、ペペさんはモテル

の家へと向かうこととなった。センケツノキズナ 2

センケツノキズナ 3

「ボンノー俺よく考えたら学校あるんだが、」

「そうだな、相棒」

「で、結構欠席しててやばい気がするんだが、勉強とか、出席日数とか、」

「そうだな、」

「あと、砂城さんちよつと時間ありますかって言つてたよな？」

「そうだな、」

「6時から3時間経つていま九時なんだが、ちよつとつて3時間経つもんかな？」

「そうだな、ちよつとではないな」

「行きたくもない、モテルん家とか行つてさー!!勝手に入ったら捕まるくね!!」

「いや、砂城と言う女は政府の人間ではなかったか？」

「じゃあ、捕まらないのかなー」

「そうこう言いながら歩くこと10分して、モテル宅についた。」

「こらあー待ちなさいー」

お魚くわえたドラ猫を追っかけるサ○エさんもとい、

ビーフジャーキーをくわえたエンドとそれを追いかけるエピロである。

「変なの見えた気がするんだが？ボンノー」

「ああ見間違えではない、我にも見えた。」

絶望だ、これで淡い希望と思つていた何事もなく終わるといふ事はなくなったと言つても過言ではない

絶望しながら、俺はエピロに声をかけた。

「こんなところで何してるんだ!?!エピロ」

「あ、高司、どうもこうもないわよ、エンドが私が昼から一杯いこうと思つてとつておいた高いジャーキーを持って行ったのよ」

思つた通りマジでくだらねえことだった!!

「あの一、そちらの方がエピロさんですか。」

砂城さんが聞くと、

「そうだけどって、あんた……。」

そう言っただけでエピロは砂城さんをジロジロ見始めた。

「ファンファン、ヘーアンタ中々の魔力があるのね。あっそれブライアンのじゃん。」

まじまじと見られ照るせいか、砂城さんは少し顔を赤くしていた。エピロは十分に堪能すると

「じゃあ私は、帰るわ。」

と急に出てきて急に帰るらしい。それを聞くと砂城さんはもの寂しそうに、

「今度、また何処かでお話ししましょう。」

エピロは少し微笑んでから、行ってしまった、エンドを残して。

それにしてもアイツ、ブライアンの事を知ってたんだな。

そんな事を思っていると少し回復したボンノーがポケットの中で震えた。

(それでよい、エピロよ、女神に気づかれる前に早く逃げるのだ……)

「ん？どうした、ボンノー？」

「何でもない。只一つ言うのなら、身構えておくのだ。」

ボンノーがそう言うのと、俺を含めてここにいる全員に緊張が走った。俺はジャーキーをくわえてるエンドを抱き抱えると、ホテルの家のインターホンを押した。

ピンポーン………

ガチャ

ドアが開き、ホテルの家から出て来たのはまだ、20歳前半であるう若い美人の女性だった。

「あらう・えつと、どなたかしら？」

女性はそう言うとう首を傾げた。

か、かわいい……

「あ、えつと、俺の名前は、高司 蒼一郎。ホテルのクラスメイトです。」

「まあ、あの子の。母の緋那です。いつも息子がお世話になってま

す。」

緋那さんはそう言うとお辞儀をした。

えー！この人がモテルのお母さん!?若くね!?

「それで、モテルは今いますか?」

「ごめんなさい。今、息子は出かけているの。もう少ししたら帰ってくると思うから上がって。あ、そちらのお二人もどうぞ。」

緋那さんはドアを開き俺達を家へと迎え入れてくれた。

ちなみをなぜ緋那さんに女神の呪いが効かないかと言うと、何を隠そう砂城さんとペペさんのお陰である。

砂城さんが持つてる破邪シリーズのお陰で呪いの効果が緋那さんに効いていないのである。

これだけでも十分なのにペペさんが持つてるあの妖刀、使い手によつては、呪いや呪術をある程度払えるらしい。

まあ、神の加護や祝福等も一緒に払ってしまうらしいが、腐つても魔剣属性である。

そうこうしてるうちに俺達は緋那さんにリビングへと通された。

「あ、そちらのソファに座って下さい。今、お茶を入れますので。」

「いえ、お構いなく。」

緋那さんと砂城さんのそんな会話があつて緋那さんはキッチンの方へと歩いていった。

「それにしても、あんな美人だしとても子持ちの母親には見えませんね。」

俺が隣に座っている砂城さんに言うと、

「そうですね。あれじゃないですか? 訳ありみたいな。」

「はあ、そうなんですかね。どう思いますペペさん、ペペさん?」

俺はペペさんにも話を聞こうとペペさんに訪ねるが、ペペさんは目を見開き固まっていた。

「?、ペペさん、ペペさん!」

「ああ、そうだな。訳ありだろう。」

少し大きめの俺の声に反応するようにペペさんは答えた。

何だったんだ、一体？

そう考えていた俺の思考は紅茶を持ってきた緋那さんによって遮られた。

「ごめんなさい、席を空けてしまつて。皆さん紅茶で良かったかしら。」

「はい、構いませんよ。」

砂城さんが答えた。

緋那さんは俺たち3人の前に置かれたカップの一つずつ紅茶を注ぐと向かいのソファに座つた。

「ちよつと待つてね。あの子、今学校行つてるから。ていうか、あなたは学校良いの？」

「ああ、大丈夫です。」

「そう。それにしても、珍しいこともあるわね、クラスメートとはいえ、男の子が来るなんて。」

「はあ、はあ。」

「いえ、ごめんなさいね。あの子いつも女の子しか家に呼ばないから。それにすぐ自分の部屋に行つてしまふし、部屋には近づかないで欲しいと言われるし。まともに挨拶なんてしたこと無いしね。」

リビングにいるといつも二階のあの子を部屋から何か軋む音が聞こえるし、何をしてるのかしら。」

あ、あいつ！母親に部屋に近づくなつて言つて、何か軋む音つてぜつてーあれだろ！

ほら！横の砂城さんなんてすぐに思い至つたのか凄く嫌な顔してるんだけど！

「(落ち着け、相棒！私の存在がバレてしまふ！。)」

ボンノーが直接、脳内に話し掛けてきた。

(ふうー、危ない、危ない。)

ボンノーの声と砂城さんの嫌悪感丸出しの顔で落ち着いた。

「だから、嬉しいの。クラスメートとは言え、あの子の同級生にこうして挨拶出来るのが。」

そう言つて微笑む緋那さんの顔は慈愛に満ちていて、でもどこか悲

しそうだった。

「えつと、どうかしたんですか？」

俺が訪ねると、

「え、何故かしら？」

「いや、なんか悲しそうな顔してたんで。どうしたのかな〜と思いますして。」

「やだ、私そんな顔してた？」

「ええ、凄く悲しそうな顔してました。」

俺の言葉に横の砂城さんもうんうん頷いている。

「はあ、じゃあ少しお話しをしましょう。良いかしら？」

俺は、砂城さんとペペさんの顔を見る。2人とは頷いてくれた。

「ええ、構いませんよ。」

そこから俺たちは緋那さんの話に聞き入った。

聞けば、モテルは緋那さんの本当の子供ではないらしい。この話を聞いて何故、緋那さんが母親にしてはこんなにか納得がいった。

モテルは緋那さんの旦那さん、つまりはモテルの父親の連れ子でモテルの本当の母親は別にいるらしい。

しかし、病気でモテルの母親が亡くなりモテルの父親は男手ひとつでモテルを育てることになった。

でも、父親の仕事の都合上ずっと日本に留まることは叶わずモテルの養育に困っていたらしい。

そこで白羽の矢が立ったのがこの緋那さんである。

モテルの家系と馴染みが深い緋那さんはまだ大学を卒業して間もない頃、実家に呼ばれモテルの父親とお見合いをしたらしい。

ちなみに聞いた話ではモテルの実家と緋那さんの実家(凰家)は、日本でも屈指の金持ちらしい。しかも緋那さんの家は代々続く武家の家なんだと。

幼い頃を施設で育ち、凰家に養子で引き取られた緋那さんは、その恩返しの意味もあってかすぐにお見合いを了承したらしい。

そして、あれよあれよといく内に早々と結婚と言うことになり今に

至ると言うわけだ。

単身赴任が多くまともに家へと帰ってこれないモテルの父親は、まだ若い緋那さんに悪いと思っただのか断つたらしいのだが、緋那さんはそれでも構わないと言って結婚したらしい。

結婚して一年、モテルの父親の仕事の関係で緋那さんは一年の殆どをモテルと2人で過ごしているらしい。

しかし、モテルも腐っても人の子である。そんな緋那さんとの距離感が上手く掴めずストレスからか、ここ一年夜な夜な遊び回っては女を家に連れ込んでいるらしい。

緋那さんも何度かは注意しようとしたらしいが、やはり気まずいのか強くは言えないらしい。

話しを聞いた俺たちは何とも言えない雰囲気になった。

……緋那さん、健気過ぎるだろ……。見ろ、砂城さんなんて、ハンカチで目元覆ちやってるよ。

「ごめんなさいね。とても人様にするような話じゃなかったわね。紅茶入れ直すわ。」

「あ、いえ、こちらこそ不躰なことを。すみません。」

「ふふふ、気にしないで。」

そう言つて、緋那さんはキッチンへと向かった。

「……想像以上に重い話だったな相棒。」

緋那さんが席を立ったからなのかポケットに入っていたボンノーが話しかけてきた。

「ああ」

「少々、出過ぎた真似でしたね。反省してます。」

砂城さんがハンカチをポケットに入れながら言った。

ペペさんは唇を噛み締めて下を向いている。

そうこうしてる内に緋那さんが戻ってきた。

「お待たせしました。」

ちようど良い

「すみません、ちよつとトイレに行きたいんですけど?」

俺が訪ねると、

「ああ、トイレならこの部屋を出て右曲がった所の突き当たりになりますよ。」

「すみません。」

俺はそう言うと、立ち上がりトイレへと向かった。

トイレを済ませリビングに戻る途中、不思議な雰囲気のある部屋を見つけた俺はその部屋の前へと来ていた。

「なあ、ボンノー。この部屋怪しくね?」

「……………相棒、多分ここは地下室への入り口だ。そして、この先から女神の気配がする。」

「マジか!?すぐに2人知らせないと!」

リビングに戻った俺はすぐに砂城さんとペペさんに地下室への入り口の話をした。

そして、ペペさんに幻惑魔法を緋那さんに掛け、寝てもらい地下室の入り口がある部屋へと向かった。

センケツノキズナ 4

ペペさんと、砂城さんが攻撃の準備を整えてから扉に手をかけたガチャ、少し重い音がしながら扉が開く

「ハロハロー!!」

聞き覚えがあるウザイ声が出た、とりあえず唾然としているペペさんと、砂城さんに少し下がってもらって扉を閉める。

「ボンノー、あれ見たことあんだけど、幻覚?」

「あれは、多分あいつだろ、しつかり殺った筈なんだがな」
気を取直して、もう一回扉を開けてみる

「ハロハロー」

そこにはカリエルとほか三人がいた

「あなたがたがここ一連の魔力上昇の原因ですね？」

少しお話よろしいですか？」

砂城さんが相手を問いただすと、初老の執事のような格好な男性が奥にいる女性に声をかけた

「ゼネシス様、ここはこのヴァルル・モントにお任せください。」

「そうか、わらわが直接手を下しても良かったのだが、この神を愚弄する者共を。まあわらわはこのあとする事もあるから、そなたらに任せるとしよう。」

そう告げたあと、奥にいたゼネシスと言う女はどこかに消えてしまった

「相棒、今消えたやつが女神だ」

少し震えた声でボンノーが言う、あまりに強大な力に少し蹴落されたのかもしれない。

先程まで、女神と話していた男性がこちらに振り向き砂城さんに声をかけた

「そちらの女性は少し勘違いしているみたいですが神とその神に仕える我らは別に魔力を糧に生きているわけでも、その量が膨大な訳でもないのですぞ」

「はあ?」

砂城さんが素っ頓狂な声を出す

「そんなわけ、あるか俺の元いたエクソシスト部隊だつて魔力を元に悪魔共と、戦つてたんだぞ？」

「それとこれは話が別でございますよ、我々にとって魔力とはあと付の武器でしかございませんし、悪魔共と違い魔力だけでしか戦えないわけでもございませんしね、

例えばその、カリエルの神速と言う高速移動の能力は魔力に頼らない天使固有技でございます。

まあこれも制限などがございますし、天使で多くて6つ程しか持ってません。」

「えええ？まじか、俺カリエルの神速は俺の賢者タイムの劣化版だと思つてた」

「神は魔力を表に出されることはありませんなのでここ一連の魔力上昇はその、青年の周囲にいる、悪魔共が原因ではございませんか」

グウの音も出ない正論である、なんだこのじじい死ね！

「お前らが俺の一族に呪いをかけて、更にエピロの魔力を奪つたことの説明はどうつけるんだ!!」

「その通りだ！」

おれと、ボンノーが声をあげる、

「完全に輩ですね、まあそこまで恨むならしようがないでしょう、我々もこの古川家にお邪魔してたわけで不法侵入と言えば不法侵入ですし」

遂に、非を認めたがなんか完璧に宥められた気分である、なんなんだこのじじい死ね！

「お相手して上げましょう、場所を移動してもよろしいですか？」

「ああ、いいいぜ、こんなところで闘う訳にも行かねーしな、あとこれ言つてもあんたは否定するだろうがあんたのこの女神さんは色々な事件を起こしてんだぜ、証拠もある。」

「そもそも、天界の人等が人間の世界に降りてる時点でダメなんですよ!!」

砂城さんがプンスカ怒っていた。

「我らが主が何をしようと我々がその意思を止める事は出来ませんしね、それに人間共は黙って神に従っていればいいと思いませんぞ。」

「ほお。」

ペペさんが言った。

「まあ、こんなくだらない話は止めてササツとやってしましましょうかね、行きますよプリム、カリエル。」

「は!!ヴァルル・モント様!」

「私のことはヴァルさんでいいと何度もいつているんですがね、まあいいでしょう。」

「あのー」

そつと砂城さんが手を挙げている

「なんですか。」

「どうやって移動するですか?」

「あ!!」

考えてなかったらしい、このクソジジイあんだだけ格好つけといてなんにも考えてねーな。

「どうしましょう、今から移動用魔法陣書くのも面倒ですし、私の固有能力もそういう系統の物ではないですし、カリエル、プリムの能力も違いますしね、あなた方は移動用魔法をお持ちではないんですか?」

「あいにく、結界系しかないな、移動用魔法陣書いた呪符は使い切りの一枚しかねえ。」

「自分も無いです、ないから聞いたんですけどね。」

2人答えてこちらに視線が来た

「ボンノー持ってるか。」

「持ってるわけなからう。」

「だよな。」

ということでもみんな持ってなかった、なんなんだこの魔術師どもは、

「しようがないですね徒歩でいきますか、ちよつと歩いたところに人がない広い所がありますし。」

なんでかわからないが敵である天使達と一緒に歩いて行くことに

なつてしまつた。

センケツノキズナ 5

この間、家は緋那さんが寝て留守になるのでペペさんに留守番をしてもらうことにした。

それにしても何でカリエルの野郎が復活してんだ？そう思いながら歩いてると向こうから見覚えのあるシヨタ・・・もといベルゼブブが歩いてきた。

「おーつす、ベルゼブブ。」

俺がアイツに挨拶をすると

ピキイ！

と何かが割れる音がした。方向はくそジジイの方から

「ベ・・・ルゼ・・・ブブ？」

くそジジイはなにやら呟いてるが、ベルゼブブが俺に気づいて挨拶を返してくれた。

「あー高土くん、おはよう。学校はどうしたの？」

何やらくそジジイの様子が可笑しいが気にせずベルゼブブと最近の雲高の様子などについて話していると、

「ベルゼブブウウウウウー!!!」

と急に叫びだした。どうしたんだコイツ、遂にボケが悪化してヴェオケになったか？

「この声は、ヴァルルかな？」

「ちっクソガキが、オヤジの方はどうした。」

何かが始まった。

「やっぱりヴァルルか、お父さんなら今頃仕事をしてるよ。」

「そうか、ならお前を殺ればアイツは急いでココに来るよなあー！」

コイツ完全に一人で暴走してやがる。

「おいベルゼブブ、一体アイツと何があつたんだよ？」

「正しくは僕のお父さんと色々あつたんだよ。」

俺が聞くと、そう説明してくれた。

「アア!?話は済んだか!?殺すぞオラア！」

地元のヤンキーかよ、さすがに部下のカリエル・・・じゃなくてコッ

トン100%とプリムがとめに入った。

「ヴァルルさん落ち着いて。」

「後で、『アレ』をあげますから・・・ですわ。」

くそジジイはそのワードを聞いた瞬間に元に戻った。『アレ』とは？

「ふう、すまなかった、では先を急ぎましょう。」

再び歩き始めると、ベルゼブブもついてきた。いやお前が付いてきたら危ないだろ。

「高士くん、君らはこれから天使達と何をするの？」

「ああ、これから奴等と闘う、そのための場所に向かっているんだ。」

そう言うと、ベルゼブブは黙って懐から何かを取り出した。紙だ。

「これを貸して挙げる。本当はボクも戦いたいけど周りへの被害が大きくなるからね。」

紙には、『あすたろと』と子供っぽい字でかかれていた。裏には魔方阵。

「これは？」

俺がベルゼブブに尋ねるが、一枚の紙を残して奴はすでに居なくなっていた。

「ふんふん、魔方阵に君の血を付けるとボクのお供のアスタロト君が出てくるよ。か」

そうこうしてうちに、目的地に着いた。山の中にある自然公園だ。平日だから人なんて居やしない、中々いいチョイスだと思う。

ウン！

聞き覚えのある、重低音と共に結界が張られた。しかも結構範囲が広い。ヴァルルは結界を張り終わると此方を向いた。

「さあ、始めましょうか。」

俺はエンドの首輪を外した。

「で、俺と戦うのだけ？」

俺はポケットからボンノーを出すところまで大きくし肩に乗せながら聞いた。

「もちろん僕だよ。この間は君とその魔剣に手酷くやられたからね。」

カリエルがニヤニヤしながら一歩前に出てきた。

あ、若干口元が引きつってる。まだ根に持ってんなあいつ。

「と言うことは自分の相手はあなた達お二人ですか。」

砂城さんも腰から袋を取り出すと臨戦態勢に入った。

するとクソジジイが、

「おっと、何を勘違いしているか分かりませんが私は戦いませんよ。」
とか言い出した。

「何より一介の魔術師如き、我々天使自らがが複数で戦う必要など無いでしょう。よってあなたと戦うのはこのプリムただ一人ですよ。」

このクソジジイ完全にナメてやがる。

「しかし、もしもという場合もあるでしょう。なので置き土産を残していきましよう。」

クソジジイはそう言うといきなり棺を3つ召喚した。

「こ、これは?。」

砂城さんが尋ねると、

「我々は天使ですよ、地上の人間はある程度私たちの思い通りに操れます。死体は尚更でしょう!。」

クソジジイはそう言うのと、棺を3つとも開け放った。

中から出てきたのはリビングゲッド。つまり生きる屍だ。まあ、わからない人はゾンビみたいなものだと思ってくればいい。

「では十分にあらがってくださいよ。カリエル、プリム後は任せましたしたよ。」

「は!ヴェルル・モント様!。」

クソジジイはそう言うのと消えていった。

「さて、こちらも始めるししようか。」

クソジジイを見送ったカリエルがこちらを向き言った。

「プリム、そっちの魔術師は任せたよ。」

カリエルがプリムに言う。

「はいですね。ご心配なく、私がこんな魔術師如きに負けるわけありません。」

プリムが笑顔で答える。

うわー、なんか砂上さんから黒いオーラ出てんだけど・・・。

「高司くん。そちらのパーマは任せましたよ。自分はその鶏女を潰しますんで。」

キ、キレてるー！おもつきしキレてるよー！。

そりゃクソジジイとプリム、いくら天使とは言え2人に「魔術師如き」なんて言われたらキレるよな。

「は、はい、善処します。」

答えた俺はカリエルへと剣を向けた。

「じゃあ始めよう。」

カリエルがそう言った次の瞬間、奴の姿は俺の後ろにあった。

とつさに振り返った俺を誰が責められよう。

振り返った俺はそのままカリエルの回し蹴りを受け近くの遊具に突っ込んだ。

「おいおい忘れたのかい高司？僕の能力は神速だよ。そんなにチンタラしてていい分けないだろ？言っておくが僕がああ爆発で受けたダメージと屈辱はその比じゃないがね。」

そうだったコイツ、能力でメチャクチャ早く動けるんだっけ。

俺はすぐさまここに来る前にペペさんにもらっておいた障壁魔法の護符を発動し展開した。

何でもこの障壁、中にいれば少しの間だけ敵の攻撃を防いでくれる優れものらしい。

一緒に行けないからとせめてもの餞別としてここに来る前くれたのだ。

「あんにやろー、思いつきり蹴りやがって。この前の事どんだけ根に持ってやがんだよ・・・。」

「大丈夫か相棒？」

ボンノーが聞いてくる。

「大丈夫と言えば嘘になる。まあ心配すんな、俺だって前より少しは強くなってるんだ。」

俺は血が混じった唾を吐き出しながら答えた。

「そうか、それよりもどうする、奴はこの間よりも強くなってるぞ。」

「だろうな、てかそもそもアイツこの間だつて全力じゃなかったんだろ？じやあ俺より強いのは当たり前だろ。」

「むう、それもそうだな。だがどうする相棒よ。」

「・・・賢者タイムを使う。それも最初から全力で。」

「な、正気か相棒!?最初から全力で使えば確かにあやつ速度に追い付くのは可能かも知れないがその分長期戦は望めないのだぞ!。」

「知ってるよ。何回使つてると思ってたんだ、俺だつて学習する。」

「だがッ!」

「それしか方法がないだろう?どのみち天使相手に長期戦に持ちこもつてのは虫が良すぎるだろうしな。」

「それはそうだが。」

「じゃあ今打てる最高の手を打つしかねーだろ。元々、最初から短期決戦で決めなきやならねーとは思ってたからな。」

それに何より俺はお前がいないとタダの性格が少し歪んでる超絶イケメンの高校生でしかねーからな。」

「相棒、自分の性格が歪んでると気付いていたのだな。少しどころではないが。」

「今ツッコむとこそこじゃねーだろ!」

「ハハハ。だが!それでこそ我が相棒だ!分かった!相棒の望み通り最初から全力で逝くぞ!」

「おいちよつと待て!「いく」の字違うだろ!」

「ハハハ、気にするな。」

「たつく、縁起でもねー。これでも割と頼りにしてるんだぜ、伝説の魔剣さんよ。」

「ほーう、随分嬉しいことを言ってくれるのだな相棒よ。買い被り過ぎではないのか?」

「そうでもないぜ。魔人の魔剣のくせにお節介で口うるさい勝負事にハッキリしない事を嫌うのに爆弾とか仕掛けるし。そのくせ仲間思いで何かと助けてくれる。」

「ふん、よく知ってるな。」

「相棒だからな。」

「お主こそ、超絶イケメンだったか？それのくせに非リアでリア充を恨んで女子にはモテない。そして、成績優秀でスポーツ万能、会って間もない魔剣がバカにされたら自分の事のように怒ってくれる。」

「へえー、よく知ってんじゃねーか。」

「我の相棒だからな。」

「へん、違くない。」

「そんじゃまあ、いっちょやりますか。」

「応」

ようやく障壁魔法を破ったカリエルが此方へ向かってきた。

「賢者タイム！」

俺とボンノーの声が重なった。

・
・
・

センケツノキズナ 6

砂城サイドにて、

自分は今、パーマ天使を高司くんに任せて自分を散々バカにしてきた鶏女と対峙しています。

ちなみに向こうでは早速戦闘が始まったのか高司くんが天使に蹴り飛ばされました。

高司くんと天使の戦闘を横目に見て自分は鶏女に注意を向けました。

「私の相手は貴方ですか魔術師。では、改めて自己紹介をしましょう。私の名前は――」

「良いですよ名乗らなくて。自分、あなたの名前を覚える気はありませんから。」

自分は高々と名乗ろうとした鶏女に言う。

自分で言うのもなんですけど自分は今とても腹が立っています。

自分は魔術師という職業にそれなりですが誇りを持っています。

しかし、この鶏女と先程消えていったジジイは魔術師全員を敵に回すほどの発言をしたのですから。

別に自分がバカにされるのは構いません。

いや別に進んでバカにされたい分けではありませんよ。マゾじゃないですから。

………本当ですよ！本当ですつたら！

ですが、この鶏女とあのジジイは自分や自分の同僚までバカにしたのです。それにはカチンと来ました。それが許せないのです。

自分の言葉に鶏女もカチンときたのか目元を引きつっています。

「そ、そうですね。そうですね。考えたら魔術師などという俗物に名乗る名など持ち合わせていませんでしたわ。」

鶏女が言ってきました。

「泣いて媚びたら苦しまずに殺して差し上げようと思いましたが考えが変わりました。散々にいたぶって殺して差し上げます。」

鶏女はそう言うといきなり自分の足元が棘状に変わりました。

「冥土の土産に私の能力を教えてあげますわ。私の能力は範囲指定した場所を棘状に変えることが出来るのです。」

「聞いてもいないことをペラペラと、良いんですか？そんな簡単に自分の能力を喋って？」

自分は棘状になっていく地面を躲しながら言いました。

「構いませんわ。だって貴方、これから私に殺されますから。それに此方には彼らもいますからね！」

鶏女がそう言った瞬間、自分の右側からリビングゲッドが現れた。

確かコイツ等は先程のジジイが残していった奴。

自分は棘状化した地面とリビングゲッド達の攻撃を上手く躲しながら腰に付けていた袋を地面に投げつける。

中から出てきたのは大量の砂。

これこそが自分の武器です！

「盤上の駒達よ、王の命に従いその身を現せ。砂上の防人（さじょうのさきもり）！！」

自分は魔法を発動させた。

すると、先程バラまいた砂からチェスの女王、騎士、僧侶、戦車、兵士の形を模した兵達が現れた。

そう、これこそが自分の魔法。『砂上の防人』。

自分は女王以外の全ての駒を3体のリビングゲッドにぶつけました。

「へえー貴方、面白い魔法を使いますわね。」

鶏女はそう言いながら自分と女王の駒に攻撃を仕掛けてきます。

「ですが、貴方と砂の駒1体如きで私を倒せるとお思いですか？本当に思ってるなら随分とおめでたい頭ですわね。」

くう、それを言われると弱いです。元々、自分の魔法は調査などに重きを置いた魔法です。なので、リビングゲッドの方は14体でどうにかなるでしょうが、自分と女王だけではこの鶏女の相手は正直キツイ。

その時、自分のそんな心情を悟ったのか分かりませんが賢者タイム

を使いカリエルとほぼ互角に戦っていた高司くんが、

「砂城さんーこれをーこつちにはエンドもいるんで！」

と言つて何かを投げてきました。

(あの速度は、もしかして全力の賢者タイムで短期決戦に持ち込む気でしようか。)

受け取つて見てみるとそれは高司くんがベルゼブブさんから受け取っていた魔法陣が描かれている紙でした。ご丁寧に高司君の血ま で付いています。

ですが、これで此方の戦力も増えました。

自分はすぐさま紙を使い悪魔を呼び出しました。

すると、魔法陣が浮かび上がり中から悪魔が出てきました。……ベルゼブブさんと同じくらいの大きさの鼻水を垂らした子供の。

「オラを呼んだのはキミかど？」

自分は思いました。……この子を戦力にカウントして良いのかと。

「は、はい。確かにアナタの呼んだのは自分ですが、アナタは？」

自分が尋ねると、

「オラの名前はアスタロトだど。」

「あ、アナタがあの悪魔アスタロトですか!？」

「そうだど。」

「そうですか。とにかく何でもいいです。今、自分たちはあの天使と向こうにいる天使、そしてそのリビングデッド3体と戦っています。手助けしてくれませんか？」

自分が言うと、アスタロトくんは

「いいどく。とりあえずあそこの砂の兵達を使ってリビングデッドたちの動きを止めて一カ所に集めて欲しいど。出来るかどく?。」

「はい、任せてください。」

「それと、砂の兵達も攻撃に巻き込まれてしまうと思うけど良いかどく?。」

「はい、構いません。」

アスタロトくんは自分の答え聞くと、

すると、プリムは、三枚の札を取り出しました。

「なんですか、それは？」

「黙って見てなさい、ですわ。」

そう言っつて鶏女は肉塊に三枚の札を投げました。

メキメキバキバキ

と札が当たったと思つた瞬間に肉塊が音を立て人形、否ケンタウロスのような形に変化していきます。

「な、何がおこつてるんですか？」

「今私が投げたのは、ヴァルル・モント様から預かつたコピー武器、叫びのオハン、ロンギヌス、そしてオリジナルの道具である天馬の蹄を封じ込めた札ですわ。」

「肉塊がケンタウロスになつた説明がなされてませんよ！」

「あーもううるさいですわね、普通少しは自分で考えてみるものですわ。」

「アスタロトくんどういふことだと思ひますか？」

「オラにもわからないどー確かにぐちやぐちやにした筈だどー」

「あーもう教えてあげればいいんですわね、あれらはヴァルルモント様が作製された仕掛けで、天馬の蹄を装備するとケンタウロス型になるようにできているのですわ!!」

「はあー」

「せっかく教えてあげたのにその態度はなんなんですよ！さっきのリビングデッドとはスピード、パワー、防御力共に別物ですのでさっさとぶつ倒されちゃえばいいんですわ。」

「ブルワアアアア!!」

重装備のリビングデッドが、今までとは比べ物にならないスピードで此方に突っ込んで来ます。

「砂上の防人よ!!」

掛け声に応じてポーンの砂の兵等が防御に回りますが、一瞬で蹴散らされてしまいました。

「くっ」

「守るどー」

アスタロトくんとリビンググデッドがぶつかる激しい音がしてリビンググデッドの動きが止まりました。

「う、うぐう」

でもよく見ると、リビンググデッドはスピードを落とすただけで明らかにアスタロトくんが押されています。

「砂上の防人よ!!」

砂上の防人がアスタロトを支えてくれます。

これで、リビンググデッドとアスタロトくんは互角にぶつかる事が出来ます。が何故かアスタロトくんの体がリビンググデッドと共に軽く浮いています。

「なんで、浮いてるんだどー」

更に追い討ちをかけるように鷄女が棘を飛ばして来ました。

センケツノキズナ 7

一方高士サイドにて

ピカーーー!!!

一気に勝負を決めるためにいつもより強力な賢者タイムをしたためか、輝きが違う。

「早速本気で来たか、はは、でも及ばない。」

「うるせえ、俺だって強くなったんだ！前とは違う。」

「その通りだ、今の相棒は前よりも賢者タイムを持続出来る時間が10秒も上がったのだ。」

あれ、ボンノーがふやけてないな？

「それに今回は全力だ、我も直ぐにはふやけぬわ。」

へっ、そう言うことか。それじゃあ早速いかせてもらおうとするかね。

「オラア！」

「ムウン！」

俺とカリエルは同時に飛び出した。奴は、懐から剣を取りだし攻撃を仕掛けてくる。

ガキンガキガキ！

剣VS剣、だが俺の方が上だね！

「おらよっ」と

奴の剣を上手く弾いた。

ギユウイン！

「くっ」

前にボンノーが弾かれたからなら、その仕返しだぜ。奴は空中に舞う剣を取ろうとするが、すかさず足を切ってやった。

ズバァー！

「ざまあ見やがれ。」

だが奴はそんなことは気にせず、ニヤニヤしながら剣をキャッチしそのまま体勢を整え次の攻撃へと移った。流星にその行動は予想外だったので油断した。

「まずい！」

しかしそこで俺の視界が茶色に覆われた。エンドだ。

グワーーーという音をたて、次々と木が生えてくるので奴はやむを得ず身を引いた。これで俺も向こうもお互いの姿を見失った。

「うーん、助かったんだけどどうしようコレ」

ただでさえ時間制限がある。ここで奴の姿を見失うことは、少しこちら方が不利になってしまう事になる。どうする？そう思っていると、向こうから何かが聞こえてくる。

ドーン！

「ギューキイイイ!!」

爆発音とエンドの鳴き声だ！

この森のなかで奴は、まさかエンドの位置を特定したのか？

「キイイイイイ！」

ドーン！ドーン！ドーン！ 爆発音とエンドの鳴き声がかしまない。

「どーなってやがるんだ。」

「植物はエンドを中心に生え、その早さは距離に比例する。つまり姿が見えなくても植物が急激に生えてくる場所を狙えば良いのだ。」

ボンノーが解説してくれた。成程、じゃあ上から位置を探るか。俺はボンノーを地面に突き立てた。

ギューキイイイイン

ボンノーを肥大化させ、かなり高い位置に昇ることが出来た。音源は東の方からだ、案の定木がどんどん生えておりかつ爆発が頻繁に起きていた。

ドカーン

「OK、つまりあつちだな。」

俺は方角を特定すると、ボンノーを一気に縮め、その方向へ一気に駆けた。賢者タイムのお陰で身体能力の他に動体視力、反射神経まで上がっている。木がいく手を妨げるが、どうって事はない。ノンストップで走るぜ！音も近づいてきた。

10秒程で、二つの物体と開けた場所が見えた。

「このクソドラゴンが！」

ドカー!

エンドが奴に蹴られた。

「余所見してんじゃねーよ！」

俺は思いつきりボンノーを振りかざすが、間一髪避けられてしまった。

「フツ高士、遅かったな、ドラゴンは既に戦闘不能だぜ。」

エンドをみてみると傷だらけだった。爆発魔法でやられたんだろう。そして俺は奴を見て一つの疑問点が浮かび上がった。

“ざつき切った筈の足”がある。

「何で足がある?..」

そう聞くと奴は、とても愉快そうに笑いだし、

「ふっふはははははは...」

「お主、まさか。」

「くくくくく、そうだ俺は復活の際にゼネシス様に神速の他にもう一つの能力、再生を加えさせて貰ったのだ。」

「固有能力の追加ってわけか。」

「そうだ、前とは違う。」

お互い強くなってからの再戦か、

「相棒」

ボンノーが話しかけて来る。わかってる、時間がねえ事くらい。

「話は以上だ!..」

俺は足に力を込め、奴へと突進した。奴は全く動かず俺の攻撃をわざと受けた。右腕を肩ごと切ってやった。

「オラァ!..」

スパァ

「ふん」

このまま小間切れにしてやるよ。

「ウオオオオアアア！」

いくら再生能力が身に付いたって、不死身ではないはずだ。俺は次の一撃を首に当てようとしたが、

「馬鹿め、タイムアップだ。」

奴の首にあたる直前でボンノーがふやけた。次に俺の体から一気に力が抜け、そのまま地面に倒れこんでしまった。糞が、立てねえ。「ご苦労だったな、自分のペットのために貴重な制限時間を使つて。」

エンドを探すときに少し時間を使いすぎたか、それにしてもまじい。地面に這いつくばりながら奴を睨むと腕が再生をしてる最中だった。

「じゃあ、止めといこうか、爆発の魔法で。」

ヤバい、死ぬ。

センケツノキズナ 8

ドゴーン!!

「う、うああー!!」

奴が使った爆発魔法で俺の左腕が吹き飛び肩から先が無くなった。

「相棒!」

「ひゃっはあー! 良い声で鳴いてくれるね!。でも楽には殺さないよ。君には十分苦しんで死んでもらう。ペット共々な!」

左の肩口を抑えながらうずくまる俺を見下ろしながらカリエルは言う。

「さあ!もつと泣き叫びなよ!」

剣を持ち上げたカリエルはそのまま剣先を俺の太股へと突き刺す。

「うあー!!」

何度も何度も

クソ!これじゃ脚まで使い物にならなくなる。

「やめろ! 貴様それでも天使か! 何故そこまでする!?!」

ふやけたままボンノーが叫ぶ。

すると、笑いながら俺の太股を刺していたカリエルは手を止めボンノーへと目を向けた。

「はあ? 何言ってるんの魔剣如きが。僕が楽しいからに決まってるだろ。ていうか、虫を殺すのに一々理由なんているのかな?」

カリエルは笑いながら両手を掲げ、心底疑問という顔でそう尋ねた。

コイツ・・・狂ってやがる。

「さあ、再開と行こうか。」

そう言うときカリエルは次に俺の脇腹を突き刺してきた。

「グハア!」

新たな痛みが俺の身体を襲う。

「はあん、四肢をもぎ取り標本にするのも良いな。」

俺の脇腹から剣を引き抜くとカリエルはそう言い俺の右肩へと剣を向けた。

「相棒ー!」

(クソ!ここまでか!)

「ギユキイイイー!」

俺が諦めかけたその時どこかで聞いたことがあるような声が響き渡った。

次の瞬間、カリエルの足元から無数の樹木が生み出され奴を巻き込みながら空へと伸びていった。

そして俺は不思議な浮遊感に襲われ気づくとエンドの背中に乗り空を飛翔していた。

サンキュー、助かったぜエンド!

エンドに抱えられながら俺がたどり着いたのはこれまたエンドが創り出した森林の中だった。

「おい相棒!大丈夫なのか!」

ふやけが直ってきたのか若干真っ直ぐになりかけているボンノーが聞いてきた。

「そんなわけねーだろ。身体のだこもかしこもがイテーよ。こちとら片腕がねーんだぞ。」

俺は痛む左の肩口を右手で抑えて木に寄り添いながら答えた。

「て言うか、エンド!お前無事だったんだな。」

「ギユキイイイ。」

エンドは体の傷を舐めながら丸くなり息も絶え絶えと鳴いた。

「さっきはサンキューナ。お前が居なかったら正直死んでた。」

俺はエンドを撫でながら礼を述べる。

「ギユイ・・・。」

エンドは撫でられるのが気持ちいいのか目をつぶりながら鳴いている。

「お取り込み中の所済まないが、このままではいずれこの場所も奴に特定されてしまうぞ。」

ボンノーが大声で忠告を促す。

「わーてるよ。つってもなー、このままじゃジリ貧だしな。お前の方はどうなんだよ?」

「我か？」

「ああ、さつきまで賢者タイム使ってふやけてただろ？」

そうである。さつきまでふやけてたボンノーが今ではきっちり伸びて普通に剣として振るえるようになっていたのである。

「まあ、普通に戦う分には問題ないが、

今日はもう賢者タイムは使えぬぞ。」

「だよなー。マジどうしよう……。」

ちなみにカリエルはさつきから俺たちを探しているようだが、さつきとは違いエンドは草木を出し続けているわけではないので俺たち見つけるのに困難しているようだ。

なんか、そこらかしこから、隠れてないで出てこいよ！と言う大声と爆発音が聞こえてくる。

「それよりも相棒。その右腕はどうするつもりだ？そのままでは十分に戦えぬだろ？」

「うーん、そういや俺今片腕ねーんだよなー。スゲー普通に喋ってるけどさ。」

つーか、この魔剣まだ戦わせるつもりかよ……。まあ、俺もここまですされて逃げる気なんてサラサラねーけど。

すると、突然エンドが俺の右肩に来ると肩の傷口を舐め始めた。

なにしてんだ？と思ったままの俺をよそにエンドはずつと傷を舐めている。

次の瞬間、俺の右肩がいきなり緑の光に輝きだした。

そして、気づくと俺の右肩から先に木製の義手が生えていた。

はあー!?マジか、何か木の手が生えてんだけど！

「ちよちよちよ、ちよつとボンノー！なんか、手が生えてんだけど!？」

俺が動揺しながらボンノーに聞くとボンノーは、

「うむ、これはあれだな。エンドの力だろう。」

聞けばこの義手、エンドの力によって発生して物らしく元の腕のように俺の思い通りに動かせる仕様になっているらしいのである。

でもなー、このフォルムはなー。木だもの。腕が木で出来てるからね！もう凄いを通り越してキモイ！

こうして、奇妙な形で一時的にはあるが俺の片腕は復活した。
・・・この時俺は誓った。この戦いが終わったらプロロにしつかり
元の腕を治して貰おうと。

センケツノキズナ 9

ドーン！

刹那、俺達のすぐ近くが爆発した。幸い直撃はしなかったが、これでは上から丸見えになってしまう。俺は直ぐ様近くの木に隠れて、奴の様子を確認した。

「何処だ、高司イイ、殺してやるぞオオ」

なぜか、カリエルの片方の羽が黒くなっていた。

「おいボンノー、一体奴に何が起きてるんだ？」

「あれは間違いなく墮天化しているな。」

「墮天化？」

「相棒も聞いたことくらいはあるだろうが、昔ルシファー、又はルシフェルと呼ばれた天使がいた。こいつは元々天使をまとめる天使、つまり天使長であった。しかしこいつはある事件を起こしたのだ。」

「ある事件？」

「そうだ、奴は神に不服を申し立て、その申し立てに応じなかった神に自分を支持する天使等を従え戦を挑んだのだ。」

「それで、そいつは墮天使になったのか？」

「否、そうではない。」

「じゃあなんだよ？」

ガサガサガサ

ドカーン！

「高司イイ！」

カリエルが近づいてくる、黒く染まっていなかった片翼も八割ほど黒く染まっている、ここもそろそろ危なそうだ。

「ボンノー今の続きは戦いながらでいいか？」

「そうだな、今はペラペラと話してる暇はなさそうだ。」

「行くぞボンノー！」

「うむー！」

俺達はカリエルにむかって飛出した

「高司いいいー！」

ギョロツと、不自然に顔を後ろに向けたカリエルが、斬りかかってきた、カリエルの顔はあまりにも虚ろで、どこか寂しそうであった。

ガギイイイイン！

剣と剣が交わる。

「ひゃひゃひゃ、殺してやるぞおお」

そう言つてカリエルは、剣を何度も叩きつけてくる、

「ボンノー押されているぞ!!」

「しようがないだろう、相棒今の奴は剣術を知らない素人が振るう剣、故に玄人である、我とて敵の出方がまるで分からないのだ」

「魔法は使えないのか？」

切羽詰った状況を打開する策を求める、今は右手も自分のものではないのだ、こんな状況で勝てるわけが無い

「魔法は相手に一太刀入れるか大きな隙が無ければ使用は困難であるぞ」

切羽詰った状況は一緒に戦っているボンノーも同じである。

「畜生!!」

打つ手が無い故に防戦一方になる。

「ひゃひゃひゃひゃ、ふは、ふははハハハ、死ねええ、神なんて知るか、お前さえ殺せればなアア」

そう言つてカリエルが、剣を振り下ろす瞬間だった。

目をくらませる白い閃光が放たれた、

「グああああおおお」

そして突然カリエルがその身から光を放ちながら苦しみ出した。

「何なんだよボンノーこれは!」

「もしかしたらだが、アイツは分離するかもしれないぞ」

「グあああ」

苦しむカリエルの他所に光は小さくなっていく、そこに現れたのは2人のカリエル（恐らく）である、

「ボンノーなんだあれは?」

本日何回目か分からないお決まりのセリフを投げかける

「なにと言われてもアレはカリエルではないのか?」

ボンノーのも反応カリエルがその場にはいた、俺達を知るカリエルとは大きく異なったカリエルが

片方は、白に近いグレーの翼持つカリエルで体格は大きい2mはあるだろうか、こちらを殺してやるという目でこちらを睨んでいる。

もう片方は、黒に近いグレーで、体格は中学2年ぐらいの大きさのロン毛である、

「ハハハ、高司君どうしたのかなその顔は、馬鹿みたいだなハハハ」

ロン毛が話しかけてきた、なんだ、このカリエルのウザイ部分固めたみたいのもしかもあるのヤツはこちらをまだ睨んでいる

「どうなっている、さっきまでの殺意満々のカリエルはどこに行ったんだ？」

「相棒よ、何故だか分からないがカリエルのお主を憎む部分とそれ以外とで別れているようだ」

「ハハハ、そうだね、その魔剣の言うとおりでよ高司君、僕もイマイチ状況が読めていないんだけどね」

ロン毛カリエルが話しかけてくる俺はそれを無視しつつボンノーに訊ねた。

「戦闘を続行するか？」

「いや、やめておいた方がいいだろう、白いは勿論、あの黒ロン毛からは我と似た嫌な気配がする」

白いデカ物が、明らかにヤバイのは見た目でも分かるがあのペラペラ喋っているチビがヤバイのか？常時前のカリエル方が強そうである。

「その魔剣君はやっぱりいい事を言うね、ちょっと欲しくなってきたな」

「お前に誰がやるか」

「我からも御断りだ」

「ハハハ、やっぱりそうだよ、で、僕がその魔剣、ボンノー君だけ、彼が賢いって言ったのは、僕達は2つに別れたから力は元の半分だと思ってる君とは違うからだよ、」

「分離してるんだから半分になって当たり前だろ!!」

「ハハハ、やっぱり頭が悪いよね高司君は、僕達は天使じゃない違う生物にシフトチェンジしたんだ。前のカリエルとは根本的に違う生物なんだよね、今は」

少し離れたところから爆破音やらの怒号が聞こえるが気にしていないようにカリエル（ロン毛）は続けて話す。

「僕達、適当コイツをカリエ、僕をリエルとしておくが、僕達は天使カリエルから生まれた、2体分離した力は2分の一になるのが道理なのだろうが、そんなに上手く行かないのが墮天だ、カリエには、元のカリエルの能力のほぼ全てが、僕には魔力の殆どと能力の一部が持たされている」

センケツノキズナ 10

「だから、どうしたんだ、」

俺は向こうの戦闘も気になり始め叫ぶように訊ねた。

「だから君や僕らが思うようには行かないってことだよ、一応僕達2人の合わせた攻撃力は前のカリエルと同じだ」

と言いつつ黒い方リエルだった方が飛翔し、消えていった残る白い方はまだこちらを睨んでいる

「グアアアアア」

とカリエが叫び何か黒いスライムのような物を吐き出した。それらはこちらに多量に向かってきた。

「グオオオ」

その光景を見て満足したのか、カリエもリエルが飛んでいった方へ消えていった。

向かってきた黒いスライムは何故か動きを止めた、すると周りの草や木が枯れていった。

シユウシユウシユウ・・・

そしてそれらが枯れていくと同時にスライムはその大きさを増していた。

「どうすればいいんだ？」

「相棒よあの黒い物からは、奴の恨み、怒り等の感情を感じられる、そして」

「そして？」

「何よりも相棒への殺意と言う欲望が詰まっている」

会話をしている間にもスライムはその大きさを増し続けている。

このメカニズムはわからないがそんなことより、

「ボンノー、今欲望って言ったか？」

「気づいたか、流石だな」

「俺が今からやろうとする事わかるよな」

「むしろこれから述べるつもりであったがな」

俺はボンノーを黒いスライムに向かって構えた。エピロから渡さ

れた俺の相棒ボンノー、その能力は、熱くなる、硬くなる、伸び縮みする、そして欲望を魔力に変える。つまり

ドス！

俺はボンノーをスライムに突き刺した。奴が欲望の塊なら絶好の餌だぜ！

ギューイイイイン

みるみるスライムは小さくなっていき、最後には何も残らなかった。

「相棒よ、ちゃあじ完了だ」

ぎこちない英語の発音でボンノーはそう言った。よし、そうと決まれば砂城さんの援護にまわらねば！俺はエンドを抱えて大きな音が聞こえる方へ駆けた。

「賢者タイム！」

砂城サイド

ドーーーーン！

天馬の蹄を身に付けた敵にアスタロトくんが叩きつけられました。

「ガハア、だど・・・」

しかし休む間もなくそいつはアスタロトくんに連続して攻撃を行います。

ドカドカドカ！

自分も砂上の防人で動きを止めに行きますが、圧倒的なパワーの前に成すすべがありません。

「うぐ、もう、頭に来たど！」

ドカー！

そう言うと、アスタロトくんは此方に吹っ飛ばされました。

ズザーーーー

「オーホッホッホッ!!」

鶏女が口元に手をあてて高笑いをしています。自分は何もしてないくせに、

「リビングゲデッドの弱点は火だど、どうにかして火を起こせれば奴を丸焼きに出来るど、何か燃えやすい物があれば・・・」

ちようど奴には大木とツタやつるが絡まって身動きがとれてません、つまりじつくりと燃やせるわけです。

周囲を見渡すと樹脂が豊富な松が生えてました。

「幸い辺りには松がいっぱい生えてます、が私の炎魔法では正直燃やすまでには至らないでしょう」

そうこうしているうちにツタやつるに絡まってたりリビングゲデッドはそれらを引きちぎり此方に向かってきました。

「とりあえず流暢に長話している隙は無いみたいだど」

こちらへ向かってくるリビングゲデッドを見据え、拳を握り締めているアスタロトくん。

「そうですね」

自分は砂上の防人を操作してリビングゲデッドへと攻撃を仕掛けます。

しかし、先ほど同様圧倒的なパワーの前になす術が無いです。

「ツウーならー！」

すぐさま自分は砂上の防人を操作してアスタロトくんの方へとリビングゲデッドを誘導します。

自分がパワーで勝てないなら見込みがある方にしてもらえばいいのです。

アスタロトくんは動きが遅い分、一撃の重さは自分たの中では随一でしょう。

先ほど三体のリビングゲデッドを一撃で肉塊にしたのがその証拠です。

と言ってもこれでもあくまで今できる最善の策がコレだけなのであつて倒せる確証はありませんが……………。

自分は15体の防人たちを操り、また自分も攻撃の一部として切り込むことで拳を構えているアスタロトくんの目の前へとリビングゲデッドを誘導します。

「これでも喰らうどど」

上手いこと目の前へと誘導されたりビングデッドへアスタロトくんは風を生み出しながら拳を突き出します。

決まった！

自分とアスタロトくんがそう思った次の瞬間、リビングデッドはどうやったか知りませんがアスタロトくんの側面へと回り込み見事なラリアットをアスタロトくんに叩き込みました。

ラリアットをまともに喰らったアスタロトくんは物凄い速さで自分と激突し、自分はアスタロトくん共々2、300メートル程吹き飛ばされました。

しかし、リビングデッドの攻撃はそれで終わりません。

追撃を掛けるようにこちらへと物凄い速さで走ってくるリビングデッドを尻目に自分は悟りました。

ああ、ここまでか……と、

自分はせめてアスタロトくんだけでも助かるよう横で倒れているアスタロトくんを砂上の防人で遠くへと運びました。

リビングデッドへと向き直った自分は目を閉じました。こんな事ならもっと遊んでいれば良かったです。

「おいおい、諦めるのはまだ早いんじゃないのか、魔術師の嬢ちゃん？」

男性の声が聞こえ、目を開けた自分の隣を黒い影が通り過ぎた次の瞬間リビングデッドは真横から吹っ飛び砂埃が舞い上がりました。

センケツノキズナー

砂埃が晴れ目の前を見ると、フード付きの黒コートをはためかせ自分とアスタロトくんを守るように立ち、不適に笑っているペペさんの姿がありました。

「ちよ、なんで貴方がここにいるんですか、ペペさん!？」

自分は慌てて問い詰めます。

「え、いやーなんか長年の勘で嫌な予感、それがしたんでこれは何かあるなーと思つてな。」

そう言いながらペペさんは自分の横を指差しました。

自分が目を向けるとそこには何か金色の縄のようなものでグルグル巻きにされたロン毛二人組がいました。

「えつと、この人達は?」

「さあ?俺に聞かれてもなー。なんかここに来る途中に見つけたからとりあえず二人とも捕まえといた。なんか羽あるし、おそらく色からいって天使と墮天使でとこか。」

天使と墮天使相手に何でもなさそうに言うペペさん。

「だ、大丈夫なんですか、これ?」

「ああそれは心配ない、その縄はブライアンさんのお手製だ。解こうとしてもがけばもがくほど魔力を吸い取る。」

ブライアンさんのお手製だと聞いて納得、安心する自分がいま
すよ。てやつだ。……。

「じゃ、じゃあ!妃奈さんはどうしたんですか!?留守番は?」

「あー、なんか旦那帰ってきたからとりあえず家庭を大事にしろって説教して催眠かけといた。あ、心配するなよ。家には結界張つといたし今頃は俺の仲間が駆けつけてるだろ。安心してください、張つてますよ。てやつだ。」

……あんまりおもしろくないペペさんのギャグセンスを垣間見た気がします。

そんな会話をしていると砂煙が晴れた向こう側からリビングゲッ
ドが歩いてきました。しかし、その姿は先程とは違い何故だかいきな

りつつこんできたりして来ません。

「可笑しいですね。先程とは打って変わって静かです。」

自分が疑問を口にするのと、

「おおかたこちらの戦力を伺ってるんだろ。さっきはいきなり横から蹴り飛ばしたからな。」

と、ペペさんが答えてくれました。

て言うかペペさん、最初会ったときとキャラ変わってませんか!? なんか吹っ切れたような顔つきしてますし。

「で、あいつは何者なんだ? 魔術師の嬢ちゃん。」

ペペさんは心底疑問というような顔で自分に訊いてきました。

「あ、はい。最初に天使達に会ったときにヴァルルと呼ばれていた天使がいたのを覚えていますか?」

「ああ、無駄に執事ぽい爺さんだろ?」

「はい、あれはヴァルルが残っていたりビングデッドです。元は三体いたのですが、粉々にしたら合体して強くなって蘇ってきました。」
「うーん、成る程な。死体まで道具として使うとか天使のくせに、いい性格してんなあのジジイ。」

ペペさんは皮肉混じりに愚痴ってます。

「まあ、いいや。とりあえずここからは俺が戦う。嬢ちゃんはそのコンビの監視をしててくれ。」

ペペさんはそう言うのと異空間から刀を取り出し構えました。

「そうゆうことだ、化け物。ここから選手交代な。」

ペペさんは刀を片手に構えるともう一方の手で指をクイクイとしてリビングデッドを挑発しています。

それが挑発だと分かったのかどうなのかは知りませんがリビングデッドはペペさんへと狙いを定め走り出しました。

ペペさんも地面を踏み締めるとリビングデッドへと走り出しました。正直その姿を目で追うのがやっつとです。

ペペさんとリビングデッドが衝突するや否や、戦闘が始まりました。自分は必死で戦闘の全容を見ようとしますが、いかんせん目が追いつきません。超至近距離で何回か打ち合ったのか、金属同士がぶつ

かり合う音と共に大きな火花が散る。かと思えば、次の瞬間には距離が開いています。それはもう一瞬の出来事です。

……格が、格が違いすぎます。

ペペさんの刀を避けながら尚且つ攻撃に転じるリビンググデッドも凄いです。そのまさに化け物地味な速度に追いつきその上、口元に笑いを携えたペペさんには目を剥きます。

常識の範疇ではありません、尋常じゃない速さの戦闘です。

これが元A級エクソシストの実力……。

とてもじゃないですが今の自分では一秒どころか一瞬にも満たない時間で負けるでしょう。今更ながらこの人が味方であることに安堵します。もし敵だったらと考えると背筋が凍り付きそうです。

ちなみに捕まったロン毛とアフロヘアーの二人組は悪夢にうなされてるのか、先程からずっと隣で唸ってます。

センケツノキズナ 12

ペペさんサイド

砂城の嬢ちゃんに声をかけた俺は右手を異空間に突っ込み収納していた愛刀の《夜空》を取り出す。

まあこんなのを年がら年中持ち歩いていたら銃刀法違反で捕まっちまうからな。

「そうゆうことだ、化け物。ここから選手交代な」

俺はリビングゲツドにそう声をかけ、右手に《夜空》を構えて左手の指でクイクイと挑発した。

それが挑発だと気づいたのだらうリビングゲツドは一声鳴くところらへ向かって走り出してきた。その速度は並ではない。

俺も地面を踏み締めると走り出す。一瞬で高速へと達した俺とリビングゲツドの超至近距離での戦闘が始まった。

自分で言うのもなんだが今の俺たちはその姿が留まっていないだろう。焦って俺たちの姿を目で追うようにしている砂城の嬢ちゃんが良い例だ。

俺は高速戦闘だということにこちらの攻撃を交わし、いなして反撃してくるリビングゲツドに舌を巻く。

おいおい、マジかよ。さっきまでと動きが違いすぎだろ。こういうやや少し速度を上げるか。

次の瞬間、俺は戦闘速度を上げてリビングゲツドの後ろに回り込むように移動した。

いきなり消えた俺の姿に虚を突かれたのかりリビングゲツドはその攻撃の手を止めかけた。

「ここだー」

そう叫んだ俺はリビングゲツドの上半身を一闪した。

俺の一撃をモロに受けたリビングゲツドはその姿を真つ二つにして倒れる。

「ふうー、終わりかな」

「それじゃダメです！ペペさん！」

安心しかけた俺の元に嬢ちゃんの鋭い声が飛ぶ。

咄嗟に俺は《夜空》を側面に構えるとそこに重い一撃が飛んできた。衝撃を殺しきれなかった俺の身体が2、3メートルほど飛ばされるが、空中で態勢を立て直し上手く着地した。追い打ちをかけるようにリビングデッドの攻撃が飛んでくる。リビングデッドの繰り出す攻撃をいなしながら嬢ちゃんへと問いかける。

「どういふことだ嬢ちゃん？我ながらさっきの一撃は完璧に決まったと思っただが？」

「ただ倒すだけではダメなんです。これはアスタロトくんの受け売りですけどリビングデッドの弱点は火です。並みのリビングデッドならまだ他に対処法もあったのでしようけど今あのリビングデッドは特殊な道具で強化されているのが原因なのか強力な火で燃やし尽くしか対処法がないそうです」

「マジか…。けどそれなら嬢ちゃんの魔法で勝てたんじゃないのか？」

「いいえ、自分の炎系魔法ではリビングデッドを燃やし尽くすはできないと思います。ですが貴方ならリビングデッドを燃やし尽くすほどの魔法を使えるのでは？」

「うーん、まあできないことは無いけど」

つまり嬢ちゃんの話を要約すると並みのリビングデッドなら倒せない事もなかったが可笑しな道具のせいで復活、強化されたから炎系魔法で倒すしかない、しかし嬢ちゃん自身はあまり炎系魔法が得意ではないからリビングデッドを燃やし尽くすほどの火力をもつ魔法をご所望してわけだ。

なんとも難儀な話だな……………。

だがまあ話は分かった。詰まるところ押しても引いても奴には通じないってことか。

幸い辺りには燃えやすい素材で溢れているようだ。

「オーケー」

リビングデッドを倒す方法を聞き終えた俺は奴の攻撃を全ていなし、カウンターを決め奴と距離をとる。

改めてリビングゲッドのを見るとさつきから傷を付けてもすぐに修復されていく。

俺は縮地で奴との距離をさらにとると《夜空》を正面に構える。説明しよう！縮地とは俺が教会を追放された後、ブライアンさんと出会うまで各地を旅していたとき、南の方の地方の民族から学んだ特殊な移動法を俺が改良を加えた高速移動法である！まあ、詳しい説明はまた今度な！

悪い、話がそれたな。まあ気にするな。

「比類無き悲嘆をもって天魔に与える断罪を！『雪那』！」

詠唱を終えた俺の体内から一気に魔力が無くなると次の瞬間、俺の体内に膨大な魔力が流れ込んできた。

これがこの妖刀《夜空》の能力の一つ、『雪那』だ。

その能力は、使用者の魔力を喰らい何倍にも増幅して使用者に還元することで、使用者の戦闘能力を強制的に引き上げるといふもの。まあ、これに耐えられず死んでいく使用者が続出したんだが。

「いくぜ、第二ラウンドだ！」

俺は縮地でリビングゲッドとの距離を詰めながら高速で奴と斬り結んでいく。と、同時に新しい詠唱を始めた。

「忌まし忌まし忌まし、我絶対の魔力をもって煉獄を求めん」

詠唱を始めた途端、俺の周囲から取り留めとなく白い炎が現れ出す。

いきなり現れた炎に驚いたのか、リビングゲッドとしての本能がそうさせるのかは知らないが奴は俺と距離をとろう後ろに下がり始めた。だが、

そう簡単に逃がすわけないだろ。

開いた距離を縮地で埋めながら俺は連続でリビングゲッドに斬りかかる。こちらとらまだまだ魔力が有り余ってんだよ。

そして、俺は詠唱の完成へと取りかかる。

「顕現せよ〈迦具鎚〉！」

詠唱を終えた途端、俺の周囲を取り留めなく漂っていた炎が一瞬消え、次の瞬間白い炎で出来た龍が現れた。

これが俺が使える炎系魔法では最大レベルの魔法〈迦具鎚〉だ。

この魔法は発現に多くの魔力を必要とする代わりに迦具鎚の炎を受けた者は燃え尽きるか魔法の使用者が命令を出すまで白い炎がその身を焦がす魔法。

「行け迦具鎚、燃やし尽くせ。」

俺の命令を受けた迦具鎚は身を狂わせリビングゲツドへと襲いかかる。

その過程で周囲の木々に炎が燃え移りちよつとした火災現場みたいになっている。

迦具鎚を喰らったリビングゲツドは周囲の木々を巻き込み盛大に燃え上がっている。

ゴオオオオオオオ!

パチパチパチ……

数分後、リビングゲツドのいた場所には塵一つ残ってなかった。我ながら少々やり過ぎたかなーと思ってる。まあ、反省はするが後悔はしない!

こうして、俺とリビングゲツドの戦いは終わった。

高司サイド

砂城さんにリビングゲツドを任せ俺はエンドが出した木ですでに上空へと来ていた。

「あら、あの方を一人で置いてきて宜しかったのですか?」

プリムが口元に手を当てて言ってくる。うっわームカックー。

「人の心配する前に自分の心配をしたらどうだ?」

負けじとボンノーが言い返してる。

「あら、ご心配どうも。しかし、その口振り、もしかして貴方達如きが私に勝てるだけでも?」

「うっせーよ!」

「なっ!」

俺が返した言葉でプリムは固まった。

妙な感覚だ。死ぬかもしれない戦いの前なのに落ち着いてる。

「気づいたか相棒。」

俺の思考を感じ取ったのかボンノーが声をかけてくる。

「ボンノーお前、何か知ってんのか？」

「うむ、先程多くの欲望を吸収したであろう。あれをキツカケに私の戦いの記憶が相棒に流れ込んだのだろう。」

感慨深そうな声でボンノーが答えた。

「そっぴいやボンノー、滅茶苦茶強い魔剣だったけ。そりやずつと戦つてりや耐性もつくつてもんか。」

俺とボンノーが話していると幾つかの棘状の物体が飛んできた。

「いつまで話しているつもりですか。」

どうやら耐えかねたプリムが飛ばしてきたらしい。

「行くぞ、相棒。どうやら向こうも戦況が動いたらしいな。」

言われてみるとどうやらペペさんが助つ人に来てくれたらしい。リビングデッドとペペさんが戦っている。

賢者タイムの力を使ってやっと見えるレベルと戦闘速度でだが……。

俺はプリムの方へ向き直るとボンノーに話しかけた。

「なあ、ボンノー俺たち勝てると思うか？」

「なんだ怖いのか相棒？先程カリエルと戦ったときの威勢はどうした？」

「だからこそだよ。賢者タイムを全力で使ってもカリエルには勝てなかつただろう？」

「うむ、いいか相棒。出来る出来ないではない、やるんだよ！」

弱気の俺にボンノーの言葉が響いた。

「……………そうだな、エンド、アシスト頼んだ！」

「キユウナーー！」

エンドに声をかけた俺はプリムへと斬りかかった。

ちなみにペペさんや砂城さんたちがいた場所の近くが火災現場みたいになってるんだがなんで？

まあいいか、何か魔法でも使ったんだろう。今はこいつとの戦いに集中せねば！

「うおおおー！」

ガサガサガサ

木の枝から枝へ飛び回りながら俺はプリムとの距離を詰めた。そして奴に飛びかかろうと足を踏み込んだとき足の裏に違和感を感じた。見ると足場の枝が棘になっていて、俺の足を刺していた。

「ぐあああ」

だが、その痛みを我慢して俺は奴に飛びかかった。

「本当に馬鹿なんですわね」

俺は右手が使いづらいので左手でボンノーをもち、振りかざそうとしたが柄が棘となっており俺の左手は赤く染まっていた。

「うぐー！」

いてえ、けど今は我慢だ！

ブン！

当然のごとくその斬撃は避けられ、俺は勢いそのまま下に落ちていった。

「死になさい、ですわ」

しかしプリムが追い討ちをかけ、俺が落ちるであろう場所の地面を棘状に変化させた。

「畜生！」

「オーホッホッホッ、串刺しになるがいいですわー」

あと少しで地面に到達する、ボンノーの肥大化を使いたいがこんな手じゃ上手く操作出来ない。死ぬかもしれねえ、今日何回死にかけるんだよ！畜生！

「ギユキイイイ」

地面スレスレでエンドが俺を掴んだ。

「ちっ汚らわしいトカゲが！」

プリムが棘を飛ばしてくる。エンドは俺を安全な所に運び終わるとすぐにその棘をまともに喰らってしまった。

「キイイイー！」

「オーホッホッ！死になさい」

プリムが特大の棘を精製した。あれを撃たれると、俺も巻き添えを

喰らって死ぬ。

「ギユイ」

エンドが最後の力を振り絞り、俺の足と手を治癒した。逃げろってか？

「エンド・・・」

「高司君！逃げるんだ！」

向こうからペペさんの声が聞こえた、どうやら地面の棘が邪魔をしてこっちにこれないようだ。

「喰らいなさい」

プリムの魔法が放たれる！やられる！

「エンドオオオ！」

俺は、逃げずにエンドの方へ走った。こんな身でも助けたいと思っただからだ。馬鹿なことをした。

「な！まで、高司くん！」

ドーーーーーン!!

棘をまともに喰らったのに何も感じてない、つまり俺は死んだんだな。嗚呼、結局女神の呪いに振り回されただけの人生だったなあ。そう思うや否や、

「いや違うぞ相棒、お主は生きている」

「へあ？」

ボンノーが話しかけてくれた。目を開けると、俺の目の前には5〜6メートルはある大きさのドラゴンが立っていた。

「ト、モダチ、マモ、ル」

エンド？

「相棒よ、どうやらエンドは成長したのだ。言葉もある程度使えているようだ」

「へえ？」

よく見てみると、俺と成長したエンドの前には日本に生えるはずもないバオバブの木が生えており、棘を見事に受け止めていた。

「オマ、エ、ユルサ、ナイ、タカシ、イ、ジメタ」

片言でエンドがそう言うと、プリムの方へ飛び立った。

「くっ何なんですの!?!」

プリムが棘をエンドに向けて何発も撃つ。

ズドドドドドドドドドドドド

「キカ、ナイ」

エンドは風を操り、その棘を吹き飛ばした。

「うっ!」

動揺し、すかさずエンドから逃げるプリム、どうやら俺達がやったように森のなかに身を潜めるようだ。

だが、

「そうはさせるかよ、肥大化ア!」

俺はボンノーを超肥大化させ、プリムが森に入った場所であろう所へ思いっきり振りかざした! 的が小さいなら矢をでかくすりや当たるからな。

「くらええええ!!」

「キヤーーーーー!!!」

ズドオオオーーーーン!

暫く、土の煙が舞った後に光る煙が出てきた、それはつまり

「ざまあ見やがれてんだ」

俺はそう決め台詞を言うと、安心してそのまま体の力を抜いた。
あーもう無理、もう動かねー。

ドサツ

俺が地面に倒れると、ボンノーもこれまでの比じゃないくらいにふにやふにやになってしまった。

「ふあふえふあふおーふふいへはふゆ (我はもう無理である)」

「タ、カシ、ア、リガトウ」